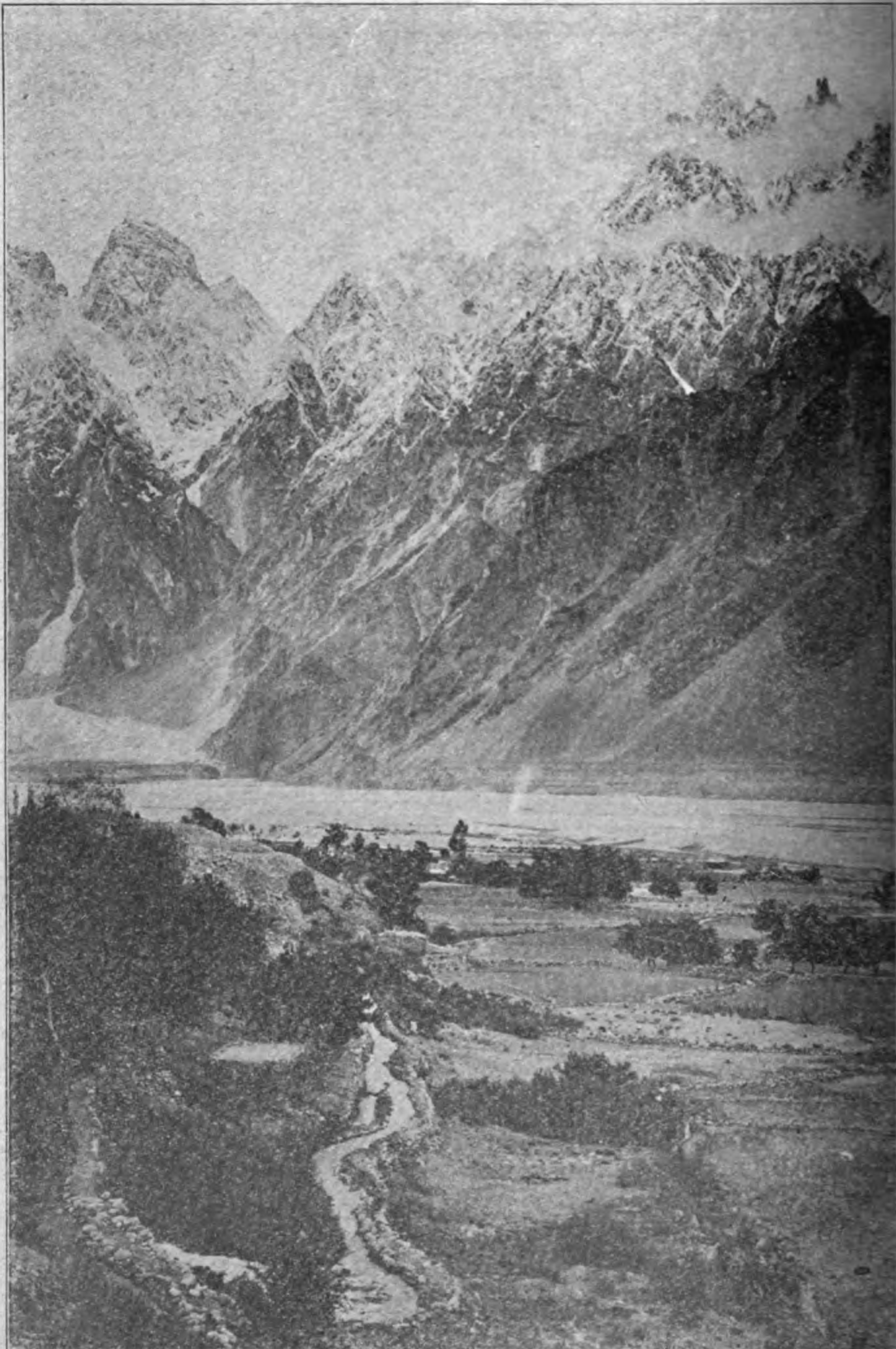
中央公論

本號目次



カシユミルの光景

（ヒマラヤ山下の小邦）

中央公論



第十八年
第十二號

學校卒業論

學校は人の世に處し有用の業務に從ふに要する學識才能を供するものにして、學校を卒業したるといふことは決して人物になりたるにもあらず成功したることにもあらざるなり。然るに此頃學問界、特に官學界の形勢を見るに學校の卒業は恰も一種の成功と考へられたるが如く、學生は卒業を以て無上の目的と爲し、實力の如何にかゝはらず、只管ら試驗を通過し、學位若しくは卒業生の名を得るに汲々たらんとす、是れ吾人の一言せざる能はざる所以なりとす。

蓋し吾國維新の初めよりして大に新學問新知識を求め、學校を出でたるものは其人物の如何を問ふに遑あらず、直に有要の地位を與へ、例せば慶應義塾の卒業生にして一躍して或る地方の知事書記官となり、大學の卒業生にして忽ち或る省の長官若しくは樞要の役人となりたることあり、その假令ひ是の如くならざる迄も新學問あるもの、特に學士といふものは殆んど方外の相場を以て飛躍し、經驗あり名望ある諸老先生をして後に瞠着せしめたる時代は甞てこれありしと云へども、右は新學問を求むるの急なると、又卒業生も甚だ多からずして餘り多くの缺點を社會に暴露するに至らざりしとにより其地位を高からしめ得たるべしと雖も、今日に至りては新學問なるものは殆んど全國各事業の間に行き渡り、各種學校の卒業生と云ふものも年々何千何百の數を以て增加するが故に、其學術人物も一樣ならず、同じ大學卒業にても其人物智識、恰かも其教授と其學生との如く相違するもの敢て珍しからず、一度是の如くなりたるに至りては世人は最早、單

に卒業といふを以て直に人物を高價に購ひ、高等の地步を與ふるに至らざらんとすべし。

素より今日に在ても地方によりては帝國大學卒業生と云へば隨分歡迎する處なきに非ずと雖も、そは率ね學士といふ名稱に醉ふて眞價を知らざるものか、若しくは始めより實際の手腕如何に頓着せず、單に學士といふ一種の粧飾品を備へ付くるが如き考にて、招聘するものなれば素より標準と爲すに足らず、一般今日の進步せる社會に在て、特に實業界の如きに在りては、學士も私立出身者も其力量手腕に於て敢て區別すべきものにあらず、時ありては私立出身者の方を遙かに勝れりと爲すべきものあるのみならず、學士は大概氣ぐらひ高くして使ひにくゝ間に合はざる爲め排斥せんとするもの多し、以て其大勢をトすべし、之が爲めに俄かに大學の價値を論ずるの早計たるは勿論なりと云へども、要するに大學も一の學校たるに過ぎず、その學校を出てたる世に經驗なき一青年が如何に大人物なるにもせよ直に間に合ひ、遺憾なく働き得んことは到底出來べきことに非ず、それを學士と云へば一概に何れも私立出身の徒とは全然異類の人物なるが如く考へ、高給を拂ひ高等の地位を與へんとするは一の迷信に過ぎず、而して今日に於て事新しく學士の無能にして間に合はざるを喋々す尙迷信の醒覺せざるものと云べし。

實業界の如き實力競爭の世界に在ては學士が實際に間に合はざる眞價を暴露するに至りたりと云へども、其他に在ては尙甚だ勢力を有するを見るべし特に敎育界に在ては殆んど大學出身者獨占の觀あり、是れ素より妨なし、然れども玆にも實力競爭は行はれ、文部省の取扱如何にかゝはらず、私立出身者、若しくは肩書なき人物の往々にして生徒の歸服を得、學士にして却て所謂ストラキキの厄運を受くるもの甚だ尠しと爲さず、特に地方中學の近來不穩の事多き、畢竟校長其人を得ざるに由るものにして敎育の如きは頗る人物の撰擇を要し、溫厚篤實斯道に經驗ある老成者を請ふて委托す可きものなるに、然るに今日の地方人士は是等の事に一切關心するなくして學士と云へば其人物如何

年齡如何、經驗の有無如何を問はず、直に高給を以て校長と云へる大切なる地位を與へて恠しまず、是の如くして完全なる教育の出來ぐべき理由万々之れある可らざるなり。是等の方面に於ても地方人が學士に對する迷信の醒悟も遠からざるべし。

されば學生の卒業は素より重要事たるに相違なしと雖も、卒業は最終の目的に非ず、卒業して後ち世に出で、更に有要の材と爲るべき大勉强なからざる可らず、社會は一の大學校なり、眞個の學問修行は寧ろ社會に出でたる後に在り。僅々五年十年の學問力を以て世に雄飛し成功し得べしと想ふが如き畢竟書生の空想に過ぎず、况んや實力の涵養如何を顧みず、只管卒業をのみ希望し、誤魔化して又誤魔化し、僅かに肩書を得たるもの丶如き實際世界に在ては到底劣敗者たるを免れざるべし。

肩書空名の實際世界に益なきは今日の社會を横行濶步する人物の出身學校を見て明白なり、實業界に於ては勿論其他各種の實社會に於て人物と云はれ、成業者と云はる丶者にして博士學士の肩書を有するもの果して幾干かある。官吏若くは大學教授の類を外にしては多くは皆私學校出身の徒、而も甚だ不完全なる教育を受けて世に出でたるもの丶みにして大學卒業の名稱に依りて成功したる者殆ど之あるなし、假令へば新聞記者として今日に盛名ある德富蘇峰氏は同志社の出身にして黑岩淚香氏は慶應義塾に學びたる人なり、朝比奈知泉氏は大學を中途に退學し、朝日新聞の鐵崑崙氏「日本」の陸實氏「毎日」の島田三郎氏の如きも格別有名なる學校を卒業したるものなりと云ふを聞かず、文學者にても幸田露伴氏の如き、故尾崎紅葉氏の如き其他に名ある諸氏皆學歷は甚だ多からずと云はる。又政治家にても大石、尾崎、犬養、箕浦、等の如き人々を始めとし、進歩黨にても政友會にても文明的知識あり、而も有力なる分子と云ふべきものは殆んど私立出身といふも不可なし。實業家としても三井の有力者故中上川益田、朝吹、波多野等の諸氏、三菱の有力者莊田、豐川等の諸氏、何れも皆私立學校の出身者にして三井の

早川千吉郎氏を除ては第一流と云はるべき實業家に學士若くは官公立學校の人を見るの多からざるは事實なり。是れ素より官學出身者の爲すなきを證するに足らず、大學を初め各種官立學校の發達日尚淺く、人を出すこと甚だ久しからず且つ多からざるにも依るべく、今後は學士連中にも簇々として大新聞記者、大政治家、大實業家、其他百般の大家を見るに至たるべきは勿論ならんと云へども、肩書なく空名なきも其實力に依りて能く社會に第一流の地を占むるに足る可く、之に反して如何に立派の肩書を有するも、本來實社會に應ずべき活力なきものは到底競爭に敗れざる可らざるは是等の實例に徴しても疑ふ可らざるべし。

吾人今日の學生を見るに官立學校に非れは學校にあらざるかの如く、官立學校を卒業せずんば世に出るの力なきもの丶如く爭ふて官立の門戸に走り、肩書を得るに汲々たらんとするもの丶如し、學生の官立學校を撰て學ばんとする素より咎むべきに非ず、官立は私立に比すれば多くの塲合に於て完全なれば、成る丈け完全の學校に入り完全の教育を受くるは大に可なり、然れども單に學位を求めんが爲め若しくは何等かの資格を備へんが爲に官學を撰ばんとせば大なる失望を見るべし、想ふに時世は已に肩書に驚くの時世に非ず實力なくしては如何に多數の學位を有するも到底成功の人たる能はず、如何なる無資格なる學校の出身者にても其實力にして眞個の人物たるに足るものあらば成功すべきは素より云ふ迄もなきなり、要するに學士にても學士ならざるものにても學校にて得たる有要の學識を實際に活用し、社會と云へる更に大なる學校に於て之を錬修し之を大成する人にして始めて成業の桂冠を得るに至るべし、之を或る先進の士に聞く人の一廉の人物と爲らんとするには尠くとも學校を出てたる後ち更に十年の勉强を要すと、是れ蓋し實驗の上より發したる語なり、素より其人の才力如何に依り成業に遲速あるべきは勿論なりと云へども、單に何學士何卒業といふを以て直に成功の門に登り、十分の地位を得らるべきものと想はゞ蓋し大なる誤なり。

されば官立學校の卒業生と云はず、私立學校の出身者と云はず、其學歷を鼻に懸けず、氣ぐらひを卑さくし孜々乾々として更に社會の一大學問場に勉强の功を積み、他日の大成を期すべきこと肝要なり、特に尙學窓に在るものに於ては單に學位を求め單に肩書を得るを能事となさずして、實力を養成し深く其本根を培育し社會に活動すべき資糧を蓄積するに餘念ある可らず。是の如くして學校卒業も始めて價値あるべく、學士の名稱も今日に倍加するの光榮を發するに至らん也。學生諸氏の一顧を煩はさんとする所以なり。（千山萬岳）

人道とは何ぞや

（人道主義の發展と動物虐待防止の關係）

黑岩周六

諸君、今の世の『世界道德』に於て。最も廣く認められ。最も高く敬まれ。最も强く主張せらるゝ者は『人道問題』と云ふ者是なり。余は今此の『人道』なる者の何なるやを說明し。其の發展する所以を尋ねて。人道問題と動物虐待防止との關係を論及せんとす。

一個人の生命が故なくして奪はるゝと有れば。世界の義人は直ちに憤りて『是れ人道に背くなり』『是れ人道問題なり』と叫ぶ、露國のキシネフに猶太人の虐殺せらるゝも人道問題を起し。土耳古兵がアルメニヤ人を虐待するも人道の點より非難せらる。歐羅巴人の云ふ近東問題の太半は常に人道主義より起るなり。英國が杜國を征しても。米國がヒリピンと戰ひても。其の政治問題や外交問題や戰爭問題の間に必ず人道問題の伏するあり、豈に人道問題は最も廣く最も高く且最も强き者に非ずや。然れども知らず此の『人道問題』とは抑も何者ぞや。何すれぞ其の空々漠々にして而かも世界を支配するとの爾く夫れ周到なるや。

他なし、人道とは人の天性の根本より發して、直ちに人をして人たるを得せしむる所以の大綱を爲せばなり。讀んで字の如く人の道なればなり。之に背きては人も人たると能はざればなり。

人の天性には道學先生の唱ふる如く自個を愛すると他人を愛すると兩樣の發作あり。之を自愛他愛と云ふも自愛も他愛も實は一なる可きも。二に分ちて論ずれば說明し易き故。多く二に分ちて論するなり。人若し純粹に自愛の心のみあつて毫末も愛他の心を有せざれ

ば、社會を爲すと甚だ難し。故に社會の組織を論する者は必ず愛他の心を一の要素と爲す。遠き所にてはアダムスミスが『同情』を社會組織の本なりと云ふが如き。ギッヂングが人間の社交性をば其の『同類相感するの情』(フェロー。フォーリング)に在りと云ふが如き是れなり。人は同類を愛す。是れ愛他なり。慈悲情愛を說く道德の學者が此の愛他の心を說くは勿論の事なれども。社會組織をのみ論する近來の社會學者とても之を論せざる者は有らず。其の用語は種々に相違あるも。吾國の語にては先づ『友愛』と云へば穩當なる可きか。

友愛は即ち社會の本。即ち道德の元、即ち人道の由て生する所なり。

唯だ怪む。友愛は人類のみの特性に非ず。動物にも之より。最下級の微々たる生物と雖も猶ほ同類と群居して其間に幾何の友愛の情を存するを見る。此の友愛を人道なりとせば、人道は人類の特有に非ざる事と爲る、然らば眞の人道と云ふ者は友愛の上に猶ほ何等かを加味せざる可からず。如何。

曰く友愛即ち人道なり。唯だ人類よりも以下なる動物に在りては、其の友愛なる者が特別に權威(オーソリテー)を有すると無し。彼等の友愛は總て喜怒哀樂の奴隷なり。彼等は自ら友愛の尊ぶ可きを知るに非ず。故に喜怒哀樂の情が友愛と併行する間のみは能く友愛を現はし得るも。喜怒哀樂の情が。友愛の心と相背く場合には友愛に反對する如き所業を爲して。自ら悔ゆる所ろ無かる可し。故に彼等を稱して。一個の友愛なる者を冊立して之を本尊とする者とは云ひ難かる可し、彼等の多くは單に所謂る衝機と云ふ者の發動に從ひて動く。故に彼等の友愛に權威と云ふ可き者を有せざるなり。既に權威なくは友愛ありと云へども殆んど無きに同じ、未だ人道の名を下すに足らざるなり。

人道とは此の友愛の發展なり成育なり、友愛が衝機や喜怒哀樂と戰ひて領分を廣くし。或る程度に達したる後を人道と云ふ。或る程度とは友愛を標準として喜怒哀樂を是非するに至りたる程度なり、一言にして云へば、友愛が喜怒哀樂より以上の權威を得るを人道の現はるゝ第一歩と爲す。人間社會に道德論の出る是に在り。

孔子が仁を說くは。友愛に喜怒哀樂より以上の權威を附する者に非ざる乎。釋迦の『慈悲』。基督の『愛』とても友愛をば喜怒哀樂の上に冊立したる者に非ざる乎。

總て道德と云ふ者は友愛に私情より以上の權威を與へたるなり。故に道德論の世に出でたる時を以て人道論の世に出たる時と爲す可し。

然れども道德とは空位なり。之を以て人を强ゆるに由なし。人若し道德を破らば。何人が之を罰するや。友愛と云へる人道の大主義が既に道德に現はるゝとも未だ之を以て眞に友愛が喜怒哀樂以上の『權威』を得たりと云ふ可からず。實際に於て道德は。喜怒哀樂に蹂躙せらるゝヿを免れざるに非ずや。故に眞に友愛が權威を得たりと云ふ可きは。法律の上に現はれたる時に在るなり。友愛が道德の形と爲るは未だ人道主義の大に發輝せられたる者に非ず。友愛が法律の形を得るに至り初めて人道主義が册立せられたるなり。初めて制裁あり權威あるに至りたるなり。

社會學より云へば法律は主權より發して人の行爲を規定する所の者なれば。法律も道德も殆ど社會と同時に現はれたりとも云ふを得るなり。然れども法律が成文として又法規として著しく研究さるゝに至りたるは羅馬法の時にに在り。人道法は所謂る羅馬法に於て大なる權威を得たり。羅馬法は特に人道の主義を認め。先づ人なる者を以て『目的物たる可からず』と爲したり。羅馬法の根本の精神は人を『主位』と爲したるに在り。人をば『目的物』の地位より救ひ出したるに在り。『目的物』とは物品なり。物品は直段を附するヿを得べし。人の快樂を達する目的の爲に手段として用ふるを得べし。人は物品の如く直段や定價を附す可からす。物品の如く客位として使用す可からす。

若し人を目的物とするヿを得ば。學術の試驗の如きは大なる便利を得べし。假例へば藥劑の功能を試驗するに。直ちに人に飮ましめて見るが如き是なり。然れども之は人を物品又は獸類と同視するなり。便利なりと雖も許す可からず。許せば則ち人道を蹂躙す。又若し人の生命に定價を附し得る者とせば人は物品と異ならず又獸類と選ぶ所なし。或る事業の爲に金錢を以て人の生命を買ひ。之を『オブヂエクト』として道具の如く使用するを得べし。帝王の病氣の爲には人の生肝を拔きて藥とするヿを得るにも至る可し。然れども斯くせば人間友愛の主義は根本より絕滅せらる。故に羅馬法が『人を目的物たらしむ可からす』との根本の旨義を確定したるは友愛に附與するに法律的の權威を以てしたる者にして人道主義の册立せられたる第二步なり

其後、世界の法學者が『ナチユラル。ロー』(自然法又

は性法）を説くに及びて此の主義は益々擴張せられ。知らす識らすの間に人道は人間の最高の訓規たるに至るの勢を現はせり。續いては政治の方面に及ぼし。奴隷解放等の大事件あるに及べり。人道主義發展の上より云へば。斯く友愛が政治上の權威を得るに至りたるを第三歩と云ふも不可なし。

（以下次號）

邦人躰格の不良その源因と救濟策

其三

寺田勇吉

社會風俗の及ぼせる害

先づ第一に我々の被て居る衣服が身躰を健康にする爲に甚だ宜しく無い、且服制が一定して居らぬといふ事は我邦に於ける一の大なる欠點と思ふ、チヨッと表を通つて見ても袖のある着物を被て居る者もあり筒袖を被て居る者もあり袴を穿いて居る者もあり羽織を被て居る者もある、又洋服を被て居る者もある、どれが日本人の服であるやら西洋人などから見ると隨分可笑しく感ずるのである、日本人の衣服の不完全なることは申す迄も無い、是は急には、いかない事であらうが是非共衣服の改良といふことは忘れてはならぬ、就中生長しつゝある時代の小供の服は學校に於てのみならず總て筒袖を用ゐるやうにするが宜いと思ふ、日本人の今日の衣服は先づ安樂服と言つても宜くして、惰けるのに都合が宜いが働くには甚だ不適當な着物である、彼支那人の如きも服に至つては餘程我々よりは完全して居る、餘程西洋人に近い、隨つて支那人の健全なることは我國民の及ぶ所で無いと思ふ、又經濟上から言つても我々日本人が無用なる袖の爲に費す布片てもナカ〳〵少く無い、此袖丈け切ることにしても日本全國では殆ど二百万圓の儉約が出來る、且又冬になると襲衣をするが爲に一層身躰が重く身躰の發達に大に害がある、序でに言ふが西洋は甚だ寒い國であるに拘らず洋服の脊中に綿の這入つて居るといふやうなものは殆ど無い、然るに日本人は襲衣から起つた習慣てあり且歩くことが少くして人力車に乗るといふ習慣があるが爲に洋服も冬被るのは多く綿入になつて居る。

次には家屋の改良も躰育の爲には必要と思ふ、是はナカ〳〵容易なことては無いから我輩は日本全國の富の

度が進んで西洋風の生活が出來るまで已むを得ず在來の如くになし唯々成るべく丈け部屋等を明くし成るべく丈け天井を高くして少くとも仕事をするには腰掛けて仕事をするやうな風になし、又商人の店、飲食店、諸工場、例へば足袋屋、菓子屋等の如きに至つても腰を掛けて仕事をするといふ工風をすることは左程六つかしく無い、此腰掛けて仕事をするといふ事は餘程肝要なことであつて支那人、朝鮮人も尙安坐はしない、是等が矢張り支那人朝鮮人の我國民よりも躰格が良き一つの原因であると思ふ。

又日本人は隨分無精であつて西洋では頭の毛を短く刈るといふ人は罪人の外無い、然るに我邦では多數は三分とか五分とかに頭を刈りさうして毎朝櫛を以て梳らないでも濟むやうな工風をする、然るに西洋人は毎朝必ず櫛を頭に入れ且男子ならば殆ど毎朝髯を剃るといふ風であるが、日本人は是等の點から申しても甚だ無精である。

次は我々の食物の惡いことであるが、是も大に考えなければならぬ、未だ民度が進まぬから仕方が無いかも知れぬが、日本國民の生活の程度の低きことは實に驚くべき有様であつて遠く西洋人に及ばぬ、日本では下宿すると例へば月に十圓内外を要するが西洋では月に少くとも六七十圓を要する、併ながら是は決して高く無いと我輩は思ふ、日本でも煉瓦石の家に住い三度西洋料理を喰えば、矢張り六七十圓の下宿料は拂はねばならぬ。

一家平均の支出一個月三圓

日本の民度の低きことは先達て我輩が大阪の博覽會に於て郡是、町村是の調べを全國四十縣程のものに就いて見たが、我國民の一家の平均の支出は一ケ年に二百圓であつて一家五人とすれば一人四十圓、一ケ月三圓餘、一日十錢、是で衣食住の費用を支辨せねばならぬ、而して食費は一人一日凡そ六錢に當る、して見ると一度の食事が二錢である、此物價高直の今日に於て二錢では滋養になる物を喰ふことは出來ないのは當前である、之に付ても日本人は働いてモッと收入を增し滋養分を食し生活の程度を高める必要がある、其身躰を丈夫にする基が實に一日十錢では精神を快活にする爲の費用として到底支出し兼ねる、唯々少數の金滿家が身心を慰める爲に旅行海水浴等に出掛け又は別莊等を以ても一般の人民には何の役にも立たぬ、故に是非共我

我輩は我國民の生活の程度を高める工風をするより外に仕方が無い、西洋人は極く〳〵下等の者は別として一般に小供が生れると牛乳を用ゐ稍、成長するとビフテーキ等を常食として成長するのだから我日本人の食物とは大に違ひ、滋養分が多い故に無益の費用を節して食物の方にはモウ少し金を出し良き品物を喰ふやうにせねばならぬ、冗費を節するといふことは實に必要で其節約は無用の費を節して有用の費に供せんが爲てある、支那人は數千年前より今日まで肉食をして居る、動物も肉食をする動物は强い、即ち虎の如きものである、益々我々も尙肉食をする工風をしなければならぬ近來勤儉貯蓄といふ說が起る、成程日一日と驕奢に流るゝ今日では是も必要であつて勿論我輩も贊成ではあるが何も勤儉貯蓄といふことは今日の發明でも何でも無い、伊太利の經濟學者の言つた言葉がある「錢あらば銀行に貯蓄せず腹に貯蓄せよ、胃腑は貯蓄銀行中最肝要なる銀行である」と是は伊太利人の爲に最金言であつて亦今日の情況にては我々も大に鑑むべきことであると思ふ、我々は貧乏な癖に形式に流るゝといふ惡風があつて總て外形に重きを措く、チョッとした事ても外國人には金時計を持つて居る者は割合に少いのに、日本人には金時計金鎖等を持つて居る者が比較的に多い、此の如き民度に適せぬやうなる驕奢は無論止めなければならぬが、無暗と勤儉貯蓄を勸め食ふ物も喰はずに金を溜させるといふことは今日の實況我輩は甚だ不贊成である。

世界第三の怠惰國民

次に我々日本人の不規律であるといふことも大に我々の身躰の惡きことに原因して居る、西洋人は食するのにも寢るのにも起るのにも誠に規律が正しくある、是は餘程良い習慣であると思ふが我々日本人はどうも不規律て困る、例へば汽車の內に入つて見ても西洋の汽車では食時の外は閒食をする者は殆ど無いが、我々日本人は汽車中に於て何かしら口を動かさずに居る者は無いやうである、又ステーションの如きも到る處に食物を賣る、又之を買つて居る人がある、是等も瑣細なことのやうであるけれ共大に愼むべきことで、閒食することは身躰の爲に大に害のあることである、元來日本人は怠惰であつて、更に他の一例を擧げて見ると西洋人は寒くなると運動する日本人は寒くなると巨燵に當るといふやうな風であつて、殊に冬になるといふと

日本人は運動が減じて身躰が悪くなる、又西洋では電話などを持つて居る個人の家といふものは甚だ少い、今でも往々大臣の家にすら電話を架けて無い所があるに拘らず日本人には往々左程の必要も無いのに、室内に電話を架してさうして無益の輸入品を增加して益々貧乏になるといふことも考えずに怠惰な事をして居るからして此怠惰といふことが經濟上の點から言つても又身躰發達の點から言つてもどうも改めなければならぬことである、チヨッとしたことであるが西洋人は停車場にても只待たずに散歩して居る、日本人は腰掛けて待つて居る間は飲むか喰うかして居つて運動をしない、是等も習慣であつて急に變えられぬかも知らぬが、チヨッとしたことではあるけれ共斯う云ふやうなことも間接には身躰に影響を及ぼすのである、國民の福音を求めばどうしても勤勉主義といふものである、總て各々の人をして一人前の仕事を爲さしむるにあるのである然るに日本では怠惰といふことが上流社會の特有物で無くして總ての階級に通じて斯う云ふ悪風がある、現に勞働者の如きも亦然り、怠惰といふことに付てはナカ〳〵日本人は有名である、マア日本人の外、怠惰に付て有名なのは朝鮮人並に、土耳其人である、若し假りに怠惰に付ての名譽金牌を受ける者が誰であらうと言えば朝鮮人若くは土耳其人である、名譽銀牌を受けるものは誰であらうかと言えば蓋し日本人若くは伊太利人であらう、名譽の一二等の賞牌を受けるものは誰であるかと言えば西班牙人白耳義人、丸るで賞與を得ないものは獨逸人亞米利加人、英吉利人、マア斯んなやうなものであらうと思ふ。

要するに勤勉主義といふものは有爲主義である、隱居主義や引込思案主義、籠城主義といふやうなものはどうしても社會から之を一掃しなければならぬ、我等が兼て言つたことであるが東京の人民などは殊に惰者が多いやうに見えるのであつて現に東京中にある人力車の數が四万からある、車夫の數も之に伴つて居る而して一ヶ年に東京市民が車夫の爲め費す所の金が一千万圓である實に非常な金額と思ふ、交通機關の今日不充分な時であるから我等は必らずしも此人力車に乘ることを總て止めろとは言はぬが、併ながら一ヶ年に費す金額が一千万圓の半分といふものは足休め、怠惰、無精、外觀等の爲であると思ふから、是からは少し節車して其金を食物に充したならば宜からうと思ふ、加ふるに人力車は元來人を動物と同じく使役する者で、同

類を牛馬の如く使役するといふとも甚だ宜しく無い、一方では之が爲に乘る者自身の運動が出來ず身軀が惡くなる、又一方では車夫の身軀といふものは之が爲に甚だ害を被る、是我等が諸君と共に成るべく丈け車に乘らぬで、さうして其減じた金を以て旨い物を喰つて身軀に滋養を與える、斯う云ふやうな風にする事が必要であらうと思ふです。

以上述べた如く社會の風俗に於て種々惡いことがある、要するに吾人の身軀をして健全にしやうと思えば敎育法を改正するといふ事と、婦女を丈夫にすることゝ、風俗を改めるといふ事と此三つが差當りのところ必要であらう、併ながらまだ此外に我々の身軀の惡いといふ事に付ては澤山他の原因があらうと思ふけれ共極く重もなるものは先づ以上述べたる所の三つと我等は信ずるからして何卒此誌を讀む人は此三點に付て充分に注意されて、向後その身軀の少くとも矮く且弱くなることの無いやうにしたいものと思ふ、西洋人は大きくなる、重くなるといふのに我國民は矮くなる輕くなるといふやうなことでは實に將來の事を考えると心配でたまらぬ。

（完）

再び新平民諸君に檄す

前田貞次郎

舊平民の一人にして新平民族の親友たる余は茲に再び檄して天下の新平民諸君に告ぐるあらんとす。

顧みれば余が檄して諸君に告ぐるありしは本年二月の事なりしが爾來同一問題に付鄙見を開陳せしこと再三に及び聊か諸君の注意を喚起し得たるを覺ゆ、想ふに諸君は已に余が微衷の存する所を諒せられしなる可し、然れども事の諸君に關して言ふ可きもの尚一二にして足らず、是れ余が再び檄して諸君に告ぐる所以なり。

余を以て之を觀れば本年七月下旬大阪に開かれし新平民有志大會は諸君の同族が將來に於て活動す可き第一着歩なりしなり、乃ち諸君の是が爲に多く發憤するありしは余が想像に餘る者ある可し、果して然らば大會開かれてより百有余日を經過せる今日に至りては所在其反響を聞かざる可からざるに未だ然るを得ざる所以の者は何ぞや、余は心窃に之を訝る者なり。

曾て聞く明治四年穢多非人の稱を廢せられし時に於て新たに平民籍に編入せられし者は參拾八万貳千余人と

算せられ爾來次第に蕃殖して今日現在せる新平民族は約六拾万人の多きに達せりと云ふ、今假に此概算を誤らざる者とすれば六拾萬人は全國の人口五千萬人に對する約百分の一强にして未だ甚だ多しと謂ふ可からざるも又甚だ寡しと謂ふ可からず、蓋し六拾萬の人衆は優に儼然たる一大都市を形成するに足り之を政治上、社會上若くは經濟上の勢力となすも亦頗る大なる者なればなり、况んや之を提げて團躰的行動をなすに於ては如何なる團躰にも對抗するを得可く以て全國を震撼するに足る者あるをや、既に然り、諸君は此侮る可からざる勢力を有し又最も能く團結す、而して未だ大いに爲す有らざるは何ぞや、余は心窃に其腑甲斐なきを憾む者なり。

勿論此六拾萬人中には半數以上の婦人小兒ある可しと雖も尙少くとも其三分の一以上は倔强なる男兒なる可し、况んや婦人は生産し分身し小兒は成長し發達して並びに漸次活動圈内に入り來るべき勢力的分子なるをや、六拾萬人は則ち六拾萬人として算じ來り之を其全勢力と視做すも敢て不可なきなり、若し夫れ六拾萬人中半數以上の婦人小兒あるが故に勢力甚だ振はずと爲し之を以て敢て奮起せざる理由となすが如き者あらば其心事を陋とせざるを得ず、而して余はたとひ五十萬人なるも三拾萬人なるも將又一二拾萬人なるも猶以て優に活動し得べき勢力となし諸君の奮然蹶起せんことを迫(敢て「望む」と云はず其時は已に過去りぬ)らずんばあらざるなり。

然れども上の如き大團結は初めより之を望み得可きにあらざれば先づ部分的運動を開始し而る後全國同族の間に聯絡を通ず可きなり、而して此部分的運動を開始するには所在其便宜ある可し、蓋し諸君の同族は汎く全國各地に散居せるが故に首を打てば尾の揚るが如く一部の動搖は忽ち全部の響應を伴ひ來る可ければなり、乃ち余は新平民有志大會の反響として必らず此部分的運動の各地に開始せらる可きを豫期せしなり、しかも今に至る迄闃寂として聞ゆることなく陣中人なきに似たる者あるは何ぞや、余は是が爲に訝り是が爲に其腑甲斐なきを憾まざるを得ざるなり。

余は初め檄して諸君に告ぐる所ありし以來深く望みを諸君に屬せしも今實情此の如くなるを觀て寧ろ事の甚だ意外なるに驚き殆んど將に失望せんとす、然れども世上の事都て言ひ易く行ひ難きを常とす、乃ち又新平民有志大會は他の點に於ても局外漢たる余をして苦き

經驗を嘗めしめたり、想ふに大會出席者中にも余と感慨を同じうせるの人或ひは之あらん、請ふ余をして忌憚なく其苦き經驗に付て語らしめよ。

世間人道を說くの士多し、而して新平民有志大會は是等人道を說くの士に待つ所多かりしならん、しかも彼等は幾許の同情を寄せたりしぞ、彼等の是が爲に言ひ是が爲めに行ふ所ありし者は殆んど之なかりしに非ずや。

更に看よ、新聞紙は屢々人道を說く、而して新平民有志大會の狀況を報道するに於ては、如何か盡力したる跡ありしぞ、其多數は寧ろ冷然として看過せしに非ずや。

我が日東帝國中、百千人道を言ふの士ありて、而して未だ多く諸君の爲に計るの士あらざるは何ぞや、人道の上より見て先づ匡救すべきは諸君が現在の境遇にあり、故に余は人道を說くの士が夫の不可實行的理想を說くの空疎迂僻を捨てゝ、何故に此仁慈義俠の事をなさゞるかを怪しむ者なり。

且それ天下の新聞紙は、刑餘の一婦人を紹介するに二段三段の餘白を塡むるを吝ます、又殺人拐盜乃至情死の如き三面記事を掲載するに四段五段の紙面を費すを厭はざるにも拘はらず却つて目的高遠事業善美なる新平民有志大會の狀況如何を傳ふるに吝なるが如きは憾みても尙餘り有るを覺ゆ、而して偶々之を傳へたる者も甚だ冷淡なりしが如きは余の深く憾みとする所なり。

しかも斯の如くなりしは別に又其理由なかりしに非ざるか、余は不幸にして此に想ひ到らざるを得ざるを悲しむ。（勿論同會開設の事を周知せしむる方法に於て未だ至らざる所ありしも其一理由なりしならん）

世或ひは敢て諸君に媚るの言說を弄する者あり、余は諸君が滔々たる浮薄の習俗に感染して彼の輕佻なる幇間者流の追從に惑はさるゝ者にあらざるべきを信ずるも諸君に媚る者は徃々にして非倫失當の言說をさへ憚ることなく披露して以て其歡心を買はんとす、是の如きは間接に諸君を愚弄する者にして漫に世人の嗤笑を買ふに過ざるのみ、新平民有志大會には果して斯の如き言說なかりしか、若し之ありしとせば幵は確かに大會の價値を落し世人をして大會を輕視せしむべき一理由たりしなる可し。

新聞紙の傳ふる所に依れば、大會は又新たに一會團を組織し其總裁には華族若くは博士を戴くの議を決したりと、是れ果して事實なるか。若し事實なりとせば特

に博士を指稱せるの可否は姑らく措き華族を指稱して之れを招致せんとするは殆んど其理由の在る所を解するに苦しむ、華族何爲る者ぞ、咄々華族何爲る者ぞ。階級制度は華族を造れり、華族は階級制度に由て生れたる者なり、彼等は此に居りて之を守る、何の日か其制度を打破し來るべき。

諸君の祖先が曾て久しく凌辱侮蔑の中に生活せしは實に此階級制度の爲なりしに非ずや、而して今日諸君の大いに伸ぶ可くして未だ然るを得ざるも亦是が爲ならずんばあらず、即ち階級制度は永久に諸君の仇敵たり、諸君は之と兩立す可からず、しかも新平民有志大會は其階級制度の守り本尊たる華族を拜戴して厭はざらんとするか、余は寧ろ其無頓着なるに驚かざるを得ざるなり、乃ち余は其大會の決議の必らず誤傳なるべきを信ぜんとす。

幵は兎も角も、外部にあらはれたる所に由りて之を觀察するに情況上の如くなるより余をして竟に左の想定をなすの已むを得ざるに至らしめたり。

一、新平民諸君に對する同情者は割合に少數なること。

二、新平民諸君に對する同情者の中には奇矯自から衒ふの風ありて常識に由りて事を處せんとするもの、特に少數なるべきこと。

三、新平民諸君の中には階級を打破せんとするよりも寧ろ階級の推進を望むが如き人の割合に多數なるべきこと。

是の如きは新平民有志大會が余に嘗めしめたりし苦き經驗なり。

余が今之を胸中に包藏せずして敢て諸君に告る所以の者は諸君の深思熟慮せんことを望むが爲に外ならず。然ども諸君の勢力は余が既に述たる如く諸君をして自任せしむるに足るべき一大勢力なり、諸君此勢力を以てす何事か成し難からん、乃ち余は諸君が當代の缺乏いづれに在るかを察知して進んで之を滿さんことを切望す、而して其の之をなすは必らずや確乎たる主義定見の中より來らざる可からず、諸君の社會の同情を博するも亦當に此に在るべし、之を是れ思はずして徒らに世の浮薄に倣ふあらば却つて胡盧を書くに終らん、豈に猛省せざる可けんや。

天下の新平民諸君、願はくば余が微衷の存する所を諒せられんことを、敢て告ぐ。

（明治三十六年十一月十五日稿）

人口上より觀たる世界の國勢

（其一）

布川靜淵

世界の國勢奈何を知らんと欲せば、先づ政治、社會、經濟幷に人口等の各方面より觀察する所なかるべからず、單に人口の移動より之を檢するの誤謬たるは多言を費さずして明かなり、印度は殆ど三億の人口を有するに拘らず僅々四千万の英國人に壓抑せらる、一に人口の移動に執するの價値少なきを以て知らるべし、さりながら人口の移動は萬事を決するの根本問題にして千百の論議觀察も若し此一事を除外し去らんには空中の樓閣に均しからん。

由來西力の東漸するや歴史的事情あり、海上權勢の競爭あり、民力膨脹の結果あり、近世產業の發達あり、而かも人口の增殖も亦其の主要の一因たらずんばあらず、余等は過去百年間に於ける歐米諸國の人口增加に就き千八百年の人口を百と假定して計算し左の結果を得たり。

	獨逸	墺太利	伊太利	瑞西	佛蘭西	モナコアンドラ	西班牙	葡萄牙	英吉利及威斯	蘇格蘭	愛蘭
一八〇〇年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一八一〇年	一〇四	一〇四	一〇二	一〇三	一〇五	一〇〇	一〇四	一〇〇	一一四	一一二	一一三
一八二〇年	一〇七	一〇九	一〇五	一一〇	一一二	一〇〇	一〇九	一〇三	一三二	一二七	一二四
一八三〇年	一二一	一二〇	一一五	一二〇	一一九	一〇五	一一六	一一〇	一五二	一四三	一四〇
一八四〇年	一三四	一二七	一二三	一二七	一二四	一一〇	一一九	一一五	一七三	一五二	一四九
一八五〇年	一四五	一三四	一三二	一三七	一三〇	一一五	一二六	一一八	一九五	一七四	一三一
一八六〇年	一五四	一四三	一三八	一四三	一三三	一二〇	一三六	一二六	二一八	一八四	一〇五
一八七〇年	一六七	一五二	一四七	一五三	一三七	一二五	一四二	一三七	二四八	二〇二	九八
一八八〇年	一八五	一六三	一五六	一六三	一三九	一六〇	一四六	一四六	二八二	二二四	九四
一八九〇年	二〇二	一七三	一六六	一六九	一四三	一八五	一五五	一七三	三一四	二四二	八五
一八九五年	二一三	一八一	一七二	一七二	一四三	一九〇	一五八	一八六	三三二	二五〇	八四

一九〇〇年	二三〇	二七二	一七九	一八九	一四二	—	一六二	一八六	三五二	二六七	八八

	ジブラルタル及マルタ	ルクサンブルク	白耳義	和蘭	丁抹	アイスランド及フヮーレル	諾威	瑞典	芬蘭	四欧計
一八〇〇年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一八一〇年	一〇九	一〇三	一〇八	一〇五	一〇八	一〇二	一〇二	一〇一	一〇三	一〇五
一八二〇年	一二一	一〇六	一一七	一一二	一一九	一〇四	一一一	一一〇	一一六	一一二
一八三〇年	一四六	一〇九	一二五	一二三	一三〇	一一三	一二八	一二三	一三二	一二三
一八四〇年	一五四	一一一	一三六	一三五	一四〇	一二三	一四一	一三四	一三九	一三二
一八五〇年	一七三	一一五	一四六	一四四	一五五	一二八	一五七	一四八	一五七	一四〇
一八六〇年	一八五	一一九	一五六	一五五	一七五	一四三	一八二	一六四	一六八	一四八
一八七〇年	一九三	一二三	一六七	一六八	一九四	一五一	一九七	一七一	一七〇	一五七
一八八〇年	一九五	一三一	一七四	一八九	二一四	一五八	二一八	一九五	一九八	一六八
一八九〇年	二一二	一三二	二〇二	二一二	二三六	一五八	二二七	二〇四	二二九	一八〇
一八九五年	二二一	一三六	二一四	二一七	二四七	一五八	二三一	二一〇	二三六	一八七
一九〇〇年	—	一四八	二二三	二三七	二六五	—	二五三	二一九	二五四	—

	露西亜	ガリチエン及ブコヰナ	匈牙利	ボスニア及ヘルチゴヰナ	ルーマニヤ	セルビヤ	希臘	モンテネグロ	土耳古及ブルガリヤ	東欧計	欧洲総計	北米合衆國
一八〇〇年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一八一〇年	一〇九	一〇八	一〇五	一〇〇	一〇七	一〇六	一〇五	一〇三	一〇四	一〇八	一〇六	一三六
一八二〇年	一二一	一一六	一一二	一〇〇	一二〇	一一四	一一三	一〇五	一一〇	一一七	一一四	一八一
一八三〇年	一三六	一三〇	一二二	一〇五	一三二	一一七	一一五	一〇五	一一一	一二九	一二五	二四二
一八四〇年	一四六	一三八	一二八	一一〇	一四三	一二八	一三〇	一〇八	一一四	一三八	一三四	三二二
一八五〇年	一六一	一四一	一三三	一一五	一五五	一三九	一四五	一一〇	一一六	一四九	一四三	四三七
一八六〇年	一七四	一四七	一四四	一二〇	一六一	一五二	一六〇	一一五	一一六	一五九	一五二	五九二
一八七〇年	一九八	一六三	一五六	一二八	一七九	一七七	一七五	一二〇	一二一	一七八	一六四	七二六
一八八〇年	二二七	一七六	一五七	一二八	一九三	一九〇	二〇一	一二〇	一二三	一九七	一七九	九四五

一八九〇年	二五九	一九六	一七五	一四〇	二一四	二四〇	二二五	一二五	一二六	二二三	一九五	一、一八〇
一八九五年	二六六	二〇五	一八三	一五八	二二四	二五七	二三七	一二八	一二七	二二八	二〇二	一、二九九
一九〇〇年	—	—	一九三	—	一八〇	—	二四三	—	—	—	—	一、四三八

如上の事實に就て之を見るに北米合衆國の十四倍となれるは各國より入移住の多大なる結果にして本國固有の自然的増殖にあらず、從て例外とすべきものなり、實に千八百年は五百三十万八千人なりしが千九百年には七千六百三十万三千人となれり、此急速の増加も其の土地面積に比すれば未だ密なりとせず、しかも布哇比律賓キユバー、ポルトリコ等を領して太平洋上に於ける權勢は年と共に増加するの一方にして、本國に於ては黄色人排斥の熱未だ醒めざるなり、蓋し最近十年間同國に移住せしものは

一八九二年	六二三、〇八四人	一八九七年	二三〇、八三二人
一八九三年	五〇二、九一七	一八九八年	二二九、二九九
一八九四年	三一四、四六七	一八九九年	三一一、七一五
一八九五年	二七九、九四八	一九〇〇年	四四八、五七二
一八九六年	三四三、二六七	一九〇一年	四八七、九一八

右の如くして少なくも二十二万多きは六十二万の移民あり昨今特に多大を致せり、余輩は信ず、米國の太平洋上に權勢を大ならしむるは一は土地の廣大と經濟の豐富なる關係より來ると共に人口増加の趨勢より來ることを、人口の増加果して憂ふべき乎。

歐洲を東西に分てば東歐は西歐に比して人口増加の割合著るし、人口千に付毎十年の平均増加を示せば左の如し、

年次	歐洲	西歐	東歐
一八〇一年—一八一〇年	五・八	五・〇	七・三
一八一一年—一八二〇年	七・〇	五・九	八・八
一八二一年—一八三〇年	九・五	九・五	九・六
一八三一年—一八四〇年	七・〇	七・三	六・六
一八四一年—一八五〇年	六・四	五・八	七・四
一八五一年—一八六〇年	六・一	五・五	七・一
一八六一年—一八七〇年	八・〇	六・二	一一・一
一八七一年—一八八〇年	八・四	七・一	一〇・四
一八八一年—一八九〇年	八・九	六・八	一二・一
一八九一年—一八九五年	七・〇	七・四	六・五

日本國の位地よりして特に着眼すべきは米國の外、英、獨、露、佛等の四國なるべし、西歐何故に増加率少なきや、東歐何故に多きやは一言以て之を掩ふと能はずと雖も、アングロサクソン人種の減少は早く既に世の耳目を惹かんとし、之に反してスラボニヤンの増殖

は滿洲朝鮮の方面にまで溢れ來れり、噫、人口の增加之を社會問題よりは憂ふべしとし、國家問題よりは慶すべしとするの正反對論を見るは即ち此故に非る乎。

試みに西歐の中堅たる獨佛を對比せんか、

獨、	一八〇〇年	（一〇〇）	二四、五〇〇千人	一九〇〇年	五六、三六七千人	（二三〇）
佛、	一八〇〇年	（一〇〇）	二六、九〇〇	一八九七年	三八、五一七	（一四三）

佛は獨に比して初め二百四十万の多きものありしが千八百五十年以後年々減少して約二千万の差を見るに至れり其變遷驚くべきに非ずや、佛の殖民に失敗して其外交手段以外、實力之に伴はず、文豪ゾラをして「多產」の幸福を歌はしめたる豈に故なしとせんや、之に反して獨の產業益々隆盛に東漸力の愈々大なる、之れ人口增殖の勢ひの然らしむる所ならざる乎。大國民は大人口を有するものたらんとするは古今に通ずる法則として認め得ざる乎。頗る疑問に屬す。

東歐中、露國の人口增加の勢ひ最も盛なり、カウカサスを除きて一八〇〇年を百とすれば一八九五年は二百六十六にして歐洲中其比を見ざる所とす、蓋し露國に於ては土地配分の制度ありて男子あれば必ず土地を配分せらるゝが故に婚姻は最も重んぜられ、多子は家族の生活を豐かならしむる事情あり、爲めに人口の增加は制限なく行はれたり、此の村團の習慣より來りし結果は二十世紀を通じて尙ほ行はるべきやは未決の問題たるも、兎に角百年前の三千八百万人は九十五年間に一億百二十四万九千人（カウカサスを除く）となり、歐亞全部にては一億二千九百万人（千九百年）となりて年々急速の增加を見る、其の滿洲方面に勢力を振ひ朝鮮をも掌握せんとする如き野心は、現時に於て之を遂行し得ざるものと假定するも、其の人口增加の結果は自然に移住せしめ遂に其勢力範圍を擴張するは免れざる所なるを信ず、人口の溢れ來りて土着したる者は其勢力強く容易に人爲を以て掃ふべきにあらざるなり。

英國の所領は東西に跨り現時の强勢他に比すべきを見ず、則ち千九百年の調査によれば其所領面積人口は左の如し

歐羅巴	面積	一二五千方哩	人口	四二、〇七八千人
亞細亞	同	一、九二七	同	三〇〇、五六六
亞弗利加	同	二、八七五	同	四八、七〇六
亞米利加	同	三、九二〇	同	七、五〇六
濠太利	同	三、一八九	同	五、一三〇
計	同	一二、〇三六	同	四〇三、九八六

約四億四百万の人口を有す、此現狀は必ずしも永久に渉るにあらず、歐洲の本國は我日本よりも少數なり、而

かも其の優勢にして文化の開けたる未だ以て痛心すべき障害を見ず、之れ各方面に擴張したる所以。而して英吉利及威斯の人口は過去百年間に三倍以上、蘇格蘭は二倍以上となりしが獨り愛蘭土に於て其の減少を見る、是れ米國への移住多大なる結果にして年々少なくも二万五千多きは七万八千の人口は米國に向ふて移住し、本國の生活亦頗る低度にして悲況を呈せり。

我邦の人口は年々五十万宛を增加すと稱す、如上の觀測に徵して此人口の增加は大國民たるの吉兆とすべき乎、社會家は之を憂ひ愛國者は之を喜ぶの傾きありと雖も、國勢の消長は一に人口を以てトすべきにあらず、要は其の增減する內容、事情の繼續如何にあり、故に其多少を以て直ちに斷定すべからず、而かも獨、佛の正反對に出づる如き、露、米の急進する如きは一層愼重の觀察を要すべしと信ず。（以下次號）

本號は主筆の都合にて十日間延刊をなせり伏て讀者諸君の寛容を希ふ

（編輯局）



海外大勢

日本兵の眞價を論ず

（九月十五日 MNG. ADVT）

フレデリック、コレマン

（一）北清事變に依て得たる名譽

軍事上多少の批評眼を有し、一千九百年北清事變の際、親しく日本兵の行動を觀察するの機會を得たりしほどの人ならむには、彼等が取りし行動進退の態度に就いて何人も賞讃の語を惜むこと能はざるべし。

北清事件の數年前にありし日清戰爭に於ては、日本人がなしたる功績は固より是に數倍するものありしかど、其一部の行動の稍や文明的ならざるものありとせられしが爲め、充分之に相應するの光榮を受くること能

はざりしは何人も今尙ほ記臆する所也。されば一千九百年の北清事變に際して來れる數多の外人は、此點に關して日本人を卑めるもの丶如く、やゝ冷淡の態度を以て彼等に臨めるなりき。然るに何ぞ計らむ、年を距つる僅々數年にして日本人の行動態度著しく變化し來り、殆んど全く昔日の面影を脫却するに至りしならんとは、これ頗ぶる吾人の意外に感じたる處にして、今時にまた甚だ愉快を覺ゆるところなり。彼等は其軍規を守ることの嚴格なるのみならず亦戰闘に與らざる支那人に對する專ら慈悲を主とし寛容の德に於て間然する所なく、他の自ら誇稱して文明國民と號する軍隊をして、其謬る野蠻的なる傾向を愧ぢしむるに至れり。これ吾人が極東に於ける新同盟國として我國に取りても非常なる光榮とする所也

此北清戰役はけだし日本軍人の價値を試驗すべき絕好の機會なりしなり。何となれば數多の同盟軍の間にありて、最もめざましき働きをなし尤も光榮ある行動をなして、人の視聽を聳てしめたるものは日本の軍隊なりければなり。是には固より種々の理由あるなり。思ふに是等の理由の一つは此戰役に於ては日本が主として其衝に當るべき地位にありしことゝ並びにその諸般の供給最も便宜なるものありし事とに存するならむ。今一つの理由は日本人が唯だに敵軍の形勢のみならず、倘ほ敵國其物の事情に對して有する智識の最も細密精確なりし點に存するならむ。日本政府が調製したる地圖に依れば、天津より北京に至る間、橋梁、道路は云ふも更なり、如何に矮小なる小屋掛の如きものと雖、一々之を指摘することを得たりと云ふ。唯だ此一事を以てするも如何に日本人の手に成れる地圖の同盟軍の間に信賴せられたりしかを想見するに足る也。

（二）日本軍人の一特徵

日本軍人の有する第一の特徵として擧ぐべきは、彼等が常に悠々として迫らざるの態あることなり。彼等は如何なる大事の己れに臨み來ることあるも、平然談笑常の如く毫もわるびれたる如き振舞ある事なし。こは只だに其勇敢剛毅の性にのみ基くものに非ず、亦實に其本來快活の國民性を有するに依る也。

日本人は之と初めて接する際には、何人に對しても同樣に親愛の情を有するものゝ如く思ゆれど、實は甚だ然らざるものあり。彼等は特にアングロサクソン人種を好愛す。而して更に英米兩國民の間に於て何れを尤も好愛するかと云ふに、恐くは彼等は米國民を撰ぶものならむと思はる。

從來日本の新聞紙は露西亞に對して是非の言をなすこと屢々なるが、其言ふ所若し其公言するが如く露西亞軍人に對する日本軍人の意見を代表するものなりとせば、彼等はたしかにコサック兵に對して寸毫親愛の情を有せざるもの丶如し。

然るにこゝに稍や不可思議と思はるゝは日本人が支那人に對する感情の頗る冷淡にして輕侮の念をすら挾めることなり。されどこは多少の理由あることなるべし。蓋し日本は特に輓近長足の進歩發展を其文明に加へて以來、此老大垂死の隣邦に對して輕侮の念禁じ難きも亦自然の勢なればなり。

然れども之を個人的に觀察するときは、日本の軍人は支那人に對するも好意の情を欠がざるなり。されば彼等は戰爭中は全く露西亞人に對すると同樣の敵愾心を以つて戰ひしかど、ひとたび戰爭の終結するや、之を遇すること丁寧親切、殆んど前日互に砲火の間に相見えたりしことを忘れたるが如きものありき。

余は今尙ほ之を記臆す、同盟軍の北京に向つて進軍しつゝある間の事なりき。一日、日本兵の一隊が支那人の囚人——勿論戰闘に與らざる數個

と共に道傍に居して食事をなしつゝあるを見たり。彼等が時々頭を集めて筆頭を動かしつゝあるを怪みて近づいて之を見れば、こは彼等兩國民は相互に言語を通ずること能はざりしかど、なほ文字を砂上に書して相語らむと勉めつゝありしなりき。

倘北清事變の際見聞したる事にて今に記憶より去らざるは、同盟各國の軍隊の手中に歸したる地の住民は、それ〴〵家屋の棟上に外國の國旗を揭げたるが中に、とり分けて數多く目立ちたりしは實に日の丸の旗なりし事也。支那人のかく外國の國旗を揭げたるは全く其家屋の、國旗が代表せる國の軍隊に保護せられ居ることを示さむとするにありき。而して其揭げられたる國旗の四分の三以上はたしかに日本の國旗なりしと云ふ。

（三）　其節制と勇敢

日本軍人の戰場に於けるや其華々しきこと他に類を見ざるものあり。其精神の剛毅にして堅忍不拔なる、暑氣の發する所となりて將さに途上に倒れむとしつゝも、尙ほ衷心に燃ゆる一片熱誠の感情は、彼をして强ひて其步行を止めしめざる也。日本兵は極めて粗末なる小量の食物を以て足れりとす。而して一般に節制を重むずるの風あり。されば一日僅かに三個の握り飯を以て滿足し、毫も元氣衰へず、却つて他國の軍隊よりも偉大なる働きを爲し得るなり。

日本の軍人に於て最も重寶なる一事は、彼等が凡べて事物に對して狐疑躊躇せざるの性癖也。彼等の其上官より命令を受取るや、殆んど無意識的に之を奉じ、遂に其理由効果に就いて疑問を夾むことなくして直ちに之を遂行する也。アングロサクソン人の立場よりして日本人を判斷する時は、余は斯くの如き彼等の態度を以て本來怜悧の性質を表はせるものと云ふを得ざるなり。彼等を觀察せる人々の中、之を誤解して、悠々寬闊の風と快活の性とを以て卓越せる智慧の輝耀せるものと考ふる人ありと雖、是れ其觀察の皮相的なるに基く所の誤解なりとす。

何はともあれ勇敢と云ふ一語は日本軍人一般に適用せらるべき形容詞なり。彼等は自己の使命の存するところ、如何なる困難危險をも顧慮することなく、泰然自若として之に向ひ、又たやすく失敗によりて意氣を沮喪するが如きことなし。同盟軍の北京に入り込みたる際に於ひて幾回となく余は彼等が毅然たる勇氣、不拔なる忍耐力に驚嘆したりき。彼等はひとたび事敗るゝや益々奮激し來り必らず其目的を貫徹せずむば止まざらむとするもの也。

日本の軍人は生れながらにして好個の英雄崇拜家也。されば軍隊に於ては務めて、此傾向に投合するが如き手段を以つて彼等を鼓舞奮勵せしめむと計る。彼等に取りては勇敢なる戰死者に對する壯大なる祭祀の禮、凱旋者に對する光榮ある賞讃の辭よりまさりて努力發奮せしむるものなきなり。

日本の士官も他の諸國のそれと同じく充分の餘裕ある生活を送り、兵卒の訓練に於てもあまりに多く勞するの要なし、蓋し兵卒等も漸く普通敎育の進步普及につれて、自修の氣風盛となり、多く他に須つ所なくして技術に熟達するを得ればなり。されば彼等の職務なるもの實際は理論上云ふ程どに煩鎖なるものに非ざる也。

日本の軍人は概して勝負試合に類する遊戲を好むもの丶如く、特に角力は尤も愛好する所にして、機會ある每に之を試みむ事を望むものなり。一對の角力者を眞中に圍みて、士官並びに兵卒の共周圍に集合せるは余も亦屢々見たる事ありしが、此際彼等が現はせる熱心は非常なるものにて、殆んど同時に烈しき傳染病に罹りしかと思はるゝ許りなりき。

（四）士官よりも兵卒

個人的に云ふ時は余は日本の軍隊を以て、共に、く戰場に馳驅すべき好伴侶なりと信ずるものなり。兵卒も士官もともに寬容宏量にして、とり分け前者は一般に尊敬するに足る、只だ士官は稍や自己の品位を過重視し、形式的に其威嚴を失はざらむとに汲々たるが如きものあり。是れ固より日本の社會全躰が官吏なるものに對する見解の正しきを失へるより來れる自然の結果なるべしと雖、吾人歐米人の眼よりして見るときは少しく慊焉たるものなき能はざる也。然りと雖日本が今日の文化を誇るに至りしは極めて最近の事に屬し、多少舊時代の遺物の殘存せるものあるは、到底止むを得ざるのこととせば、這般の陋習もまたあながちに深く咎むるに及ばざるべし。

戰鬪上の技量に關しても日本人は優秀なる地位を占むるものなり。其軍隊に於て用ゆる所の所謂戰術なるものゝ性質は暫く措いて問はずとするも、兎に角戰場に於ては彼等は第一等級の軍人たるなり。彼等はひとたび上官より命令を受くるや、何等の逡巡する所なくして之に從ひ、全く恐怖と云ふことを知らざるなり。彼は唯だ、其同僚と、士官と、並びに其故郷に居る人々、一言にして云へば全日本の視線彼が行動に對して注がれたりとの考よりして、其勇壯なる向上的精神を全身に瀰漫せしむ。此精神こそはあらゆる戰爭の歷史を通じて見らるゝ所の幾多の血戰苦鬪をもたらし得たるものなれ。

彼はあく迄も戰ひ、あく迄も突進して止まず。是れ一に其頭に浸潤せる美くしき信仰——彼は勇士の中の勇士にして勇敢なる國民の爲めに戰ひつゝありとの美はしき信仰に原づくものなり。此信仰は彼をして眞兵士たらしめ、亦彼をして善良なる人間たらしむ。將來に於て如何なる事を彼等がなし得るやは暫く云はず、兎に角、大英國は東方の新同盟國によりて其地位と名勢との上に何等の損壞を加へらるゝ事なかるべきは、吾人の玆に斷言して憚らざる所也。



The Manchurian Question.

日本の死活此一局に在り

モーニング、ポスト紙

極東の時局に關して東京並びにセントピータースブルクの內閣より絕えず公表せらるゝ稍や樂天的なる證言は、少しく東方問題に對して眼識を有する人々の社會に於ては、何等の信用をも獲ること難かるべし。平生此問題に就いては平和なる解決の速かに來らむことを希望せる人々の間にありても、今や此死活問題とも云ふべき大葛藤の到底劍戟に訴ふることなくして終結せむことは不可能なるべしと

信ぜらるゝに至れり。固より出來得べくば斯かる危險を冒して、平和の享樂を犠牲となすが如きは、何人と雖好まざる所なるべけれど、若し此敵意にして早晩破裂に終らざるべからずとせば、今日までの外交的手段すらも已でに〳〵無用無意義のものに非ざりしか。

吾人は此葛藤を以て、少くとも此切迫し來れる國際的爭鬪の當事者たる日本に取りては、たしかに死活の大問題なる事を斷言するに憚らざる也。蓋し日本が商業上に於て其權力擴張の絶大なる機會と便宜とを獲得するか、或は亦、憐むべき制縛の境遇に陷りてつひには將來の繁榮を企及しがたきに至るかは、繋りて一に此際取るべき最后の決斷に存すればなり。

露國政界の大立物

ウイッテ氏

(一)　ウイッテとチャンバレイン

(モーニング、ポスト紙)

サージアス、ジュリアス、デ、ウィッテは疑もなく露國政界に於ける大立物なるべし。吾人は我が國の政界に於て、ジョセフ、チャンバレーンが占むる地位を考ふる每に、必ず亦魯國政界に於けるデ、ウイッテのそれを聯想せずむばあらざる也。此二人は共に所謂事業の人にして、しかも現今の如き商業的競爭の時代に於て、各國家が與ふる政治上の最高地位に據り、つひに斯くの如き赫々たる功名を負ふ事を得たるもの也。更に亦奇異なる事實として見るべきは、彼等二人のひとしくその政敵よりしては已に勢力の頂上に達せるものなりと想像せらるゝに係はらず、その黨人同志の徒よりしてはウイッテもチャンバレーンと同じく尙ほ一層高き地位を占むるに至るべく、恐くはつひには魯國大宰相として希代の功業を全くするならむと豫言せられ居ることなり。

若し此ウイッテが讃美者の豫言せるが如きことの果して事實として現はるゝに至らむか、そは思ふに國家が今の時代に於て彼等にまさる所の有爲の人物を產せざるによらずむばあらず。遮莫、チャンバレーンの如何なる人物なるかに付いては、恐くは何人と雖多少の知る所あるべけむも、デ、ウイッテに至りては尙ほ一個のミステリーとして殘り、多數の人々は恐くは唯だ其名を耳にせるのみならむ。されば、吾人の今茲に述べむとする所の此大政治家の傳記と性格とは、思ふに英國民全躰にとりて一たび必らず研究せらるべき價値あらむ。蓋し其爲したるところの効果如何は暫く措き、ともかくも彼が、其名を自國の歷史に特筆大書せしめたるのことは何人と雖、之を疑ふ能はざればなり。彼れが或ば遞信大臣として或は大藏大臣として國政の要路に當りしもの通じて十有一年、此間に成されたる財政上の大改革たるや實にめざましきものあり。其中或るものは疑ひもなく魯國の爲めに大に利する所ありしならむも、亦或るものは、世の批評家と稱せらるゝ人々の言に從へば、明に損害を招くに至れりと云ふ。

彼が財務に長として其局に當りし際の如き、其元氣の壯にして勢力の大なる、つひに其友人をして戯れに彼を呼ぶにサージアス、デ、ウイッテ第一世の名を以てせしむるに至れり。蓋し此時に當つてや、魯西亞帝國はもとより、間接に云へば歐亞兩大陸の平和も、殆んど彼が掌中に繋れるが如きものありしなり。されば チュゲラに於ける災禍の際の如き、若し魯帝と此頑强なる政治家との二人あらざりしならば、魯國は必ずや印度及びアフガニスタンに於て我等に一大打擊を加へたりしならむとさへ云はるゝなり。余は曾つてピータースバーグに於てある高級の軍人と談

れることあり。彼れの云ふ所に依れば、當時露國參謀本部に於ては巳にも〻作戰の計畫を立て、アフガニスタンの國境に於て軍隊の臨時召集をもなしたるほどなりしかど、唯だ皇帝とデ、ウイッテとの頑固なる態度のつひに移し難かりしが爲めに、此事件も其儘に進行を止めたりしなりとぞ。

（二）彼が排戰論の眞意

大藏大臣ウイッテが軍人等主戰主義者の意向に反對して戰費の支出を拒絕したる主要なる理由は、露國が英國との交戰に依つて受くべき財政上の大頓挫、大損害は少くとも將來一世紀間を通じて影響するならむと思ばれたるに依る。彼は英國民族に對して何等特別なる愛憎の念あるものに非ず、只だ自國の爲めを計らむとの一念よりしてこゝに至りし也。されば彼が戰費支出を拒絕したる事に不滿を抱くの人と雖、かのいたづらに輿論の激昂を恐れ、無謀なる軍人等の鼻息をうかゞひ、又は人民を煽動して戰爭熱に狂奔せしむる新聞紙の勢力を憚りて、はかなき一時の輿望を獲むが爲めに、國家の大事を犧牲に供するが如き卑劣漢に比しては、彼が品性の高潔にして又偉大なる、到底同一の談に非ざるを思はゞ、必ずや當さに彼が人物に對して多少尊敬感謝の念を抱く所なき能はざるべし。

デ、ウイッテは固より英國に對して何等の好意を有するの人にはあらざれど、彼が識見の高邁なる、干戈に訴ふることなくして、容易に財政上、商業上の利を制し得べき國家に對しては、求めて無用の戰端を開くの愚を欲せざりし也。吾人の見る所を以てすれば、當時露帝自身が英國に對して取りたる好意的態度は、此大藏大臣のそれよりは數層高尙なる動機に原づきたりしもの〻如し。されば、若し今日ウイッテにして一旦職を退かむとするが如きことあらむには、或は之を悲むものと之を賀するものと相半ばするやも未だ知るべからず。

回顧すれば、ビシユニグラドスキーが局部痲痺を以て倒れしは、今を去ること十二年前なりき。彼の死は直ちに彼に代つて當時の財政上の難境に處すべき十分の手腕ある後繼者を要求せし也。かくして此撰に當りしものは實に、デ、ウイッテなりき。彼が存在せしことが露西亞に取りて究竟賀すべきことなりしかはた悲むべきことなりしかと云ふが如き問題は、輕々に斷じ難きものあり、恐くはまた、世の所謂棺を覆ふて後初めて知るべき事ならむも、彼の事業に對して尤も公正なる觀察を下せる批評家をして言はしむれば、少くとも今日までの經驗に依れば、彼が政策は露西亞帝國にとりてあながち祝すべきもの〻みにはあらざりしが如しと斷ぜむ也。

（三）彼がなしたる公共的事業

サージアス、デ、ウイッテに依つて成されたる數多の大事業の中、特に擧げて云ふべきは、金貨を以て巨額の軍用資金を調へたる事（一億スターリング以上に達せりと稱せらる）と、ルーブルの價格を確定し、伯林其他の都市に居る投機師をして露國の財政界に投機的事業を企つること能はざらしむるに至りし事と、及び多額の流通紙幣を回收して之に代ふるに金銀貨を以てするに至りし事となり。彼はまた、國內の鐵道敷設實業學校の創立並びに世界に於て最も大なる延長を有する西比利亞及び滿洲鐵道の敷設に對して力を致したるもの少々にあらず。而して露淸銀行を起し Kharbeen, Dalny に築きて支那と財政上ならびに商業上に密接なる關係を生ぜしめたるもの亦實に彼の力なりき。先づ初めに他の領土を貫通する鐵道を敷き、しかる後滿洲に商業銀行を起して露國政府支配

の下に置くに至れるが如き異常なる外交上の政策は、彼が如何に創業的天才に富み且つ剛膽不敵の精神を有するかを證してあまりありと云ふべし。彼が曾つて旅順港に赴ひて自己の計畫の如何なる成功を來しつゝあるかを見むとしたるが如き、何ぞ我がチャンバレーンの南亞に於てなしたるところと相似たるの甚しきや。

露國の農民等をして大地主の壓制より免れしめ、酒類製造の權を收めて專ら政府の官業となし、之によりて歳入六百萬スターリングを増加したるのみならず、尚ほ人民をして從來獲たるものより一層良好の酒類の供給を受くることを得せしめたるものは亦デ、ウイッテの功なりし也。彼がなしたる今一つの大改革は、露國鐵道の租税を變更したることなり。此改革の結果として露國は歐洲各國中最も安直なる旅費を以て旅行し得らるゝものとなれり。たとへば僅々二ポンドの費用を投ずれば人はよく全露西亞本部を横斷することを得べく、更に約拾六ポンドを投ぜむにはピータースバークより太平洋岸に至る間、可なりの安樂を以て旅行することを得べき也。

彼は非常なる熱心を以て極東に於ける露國の海軍力を擴張せむことを計りしのみならず、また太平洋、黒海、並びにバルチック海の沿岸に於て新しき良港を作らむことに意を注げり。かのムールマン海岸に於て露國海軍が今日占むるところの位地は、一に此非凡なる頭腦を有する人物の功に歸すべきものなり。有名なるピーター大帝は其後繼者たるサージアス、デ、ウイッテと同じく、よかれあしかれ其後代の國民の運命に非常なる影響を及ほせるの人なるが、思ふにデ、ウイッテは此大王に私淑するもの頗る深く、自らひそかに之に倣はむとするところあるものゝ如し。されば彼がひとたび心中に決する所あるや、何等の反抗妨害に遭遇するも毫も意とする所なく、斷々乎として其計畫を行はずむば止まざるもの誠にピーター大帝のおもかげありと云ふべきか。蓋し、全帝國内に於ける酒類製造の權を悉く收めて政府の專業となすが如き大事業は、到底尋常一樣の勇氣を以て爲し得らるべきものに非ざれば也。

可及的あらゆる私設鐵道を買收して、悉く之を中央政府の管轄支配の下に置かむとしたる彼の計畫は、果して其効を奏し、國内に於ける貨物及び旅客の運搬力は忽ちにして非常なる進歩を示し、國庫の收入に莫大の増加を來せり。尚ほ露國が今日の如き大工業國となりしこと、及び傭主等が其職工に對する待遇を著しく變ずるに至りしことも亦主としてデ、ウイッテの力に依れり。露國は實に彼が稽策に原づきて外國貨物に重税を課し、自國の製造業者を奬勵し、尚ほ精巧なる器械を英米獨より輸入し、熟練なる職工を英獨の兩國より致したる等の事によりて、今や亞細亞の市場に於て我が英國及び獨乙と角逐せむとし、時としては我が英國の綿布、紡布等を驅逐して之れに代ふるに自家の貨物を以てせむとするの形勢を示すに至れり。露國は實にデ、ウイッテの力に依りて、世界に於て最も多額の鐵、石炭、鋼鐵を産出する國となりつゝある也。蓋し彼は白耳義及び佛蘭西の資本家を勸誘して是等の産業に投資し以てその巨大なる富を開發せしめむことに鋭意其全力を致したれば也。

此異常なる人物の指導の下になされたる財政上の活動の凡そ如何なるものなりしかは、下に掲ぐる所の事實に就いて見る時は容易に想像し得らるべし。デ、ウイッテがひとたび鐵道局長に任ぜられ、轉じて大藏大臣となれりし以來、露國國債の償却せられたるもの無慮四億スターリングの巨額に上ぼれりと云ふ——（利子の割合六歩よりして四歩に減じたるなり）。而して鐵道線路の延長千八百九十二年に於て二万哩なりしもの、千九百〇二年に至りては四萬哩以上に達せりとなり。

以上述ぶる所は是よりデ、ウイッテが過去十二年間に於てなしたる大活

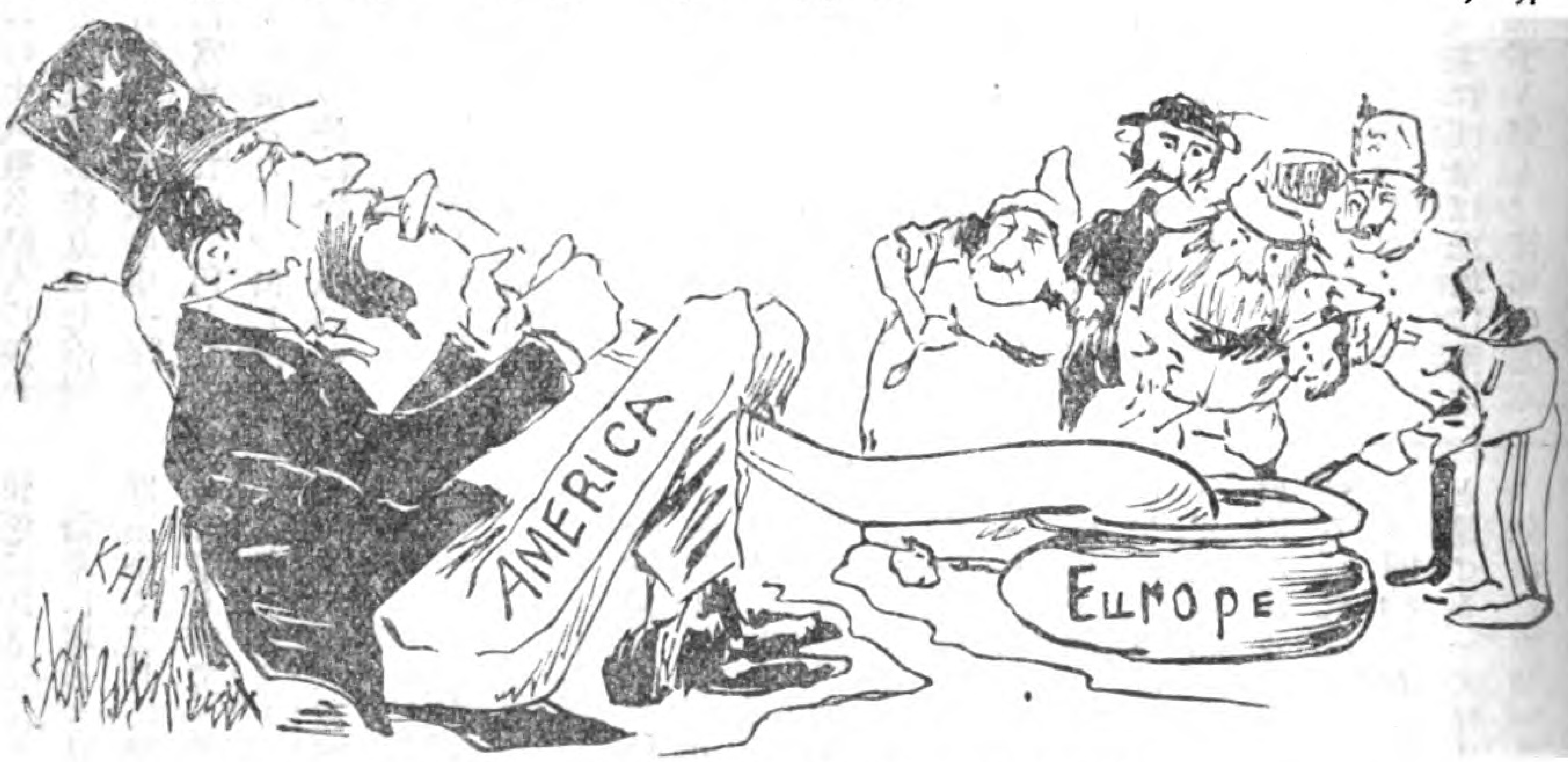
動の只だ一部分に過ぎずと雖、亦以て露國政界の大立物たる彼が性格事業の一端を世に紹介するに足るものあらむ。

海外雜纂

南阿非利加は不老不死の國なり

獨逸のプロフエッサー、ドープ氏は近日のドイッチエー、モナーッシュリフトに於て、南阿非利加の氣候を論じて曰く。

阿非利加西南部を構成せる一帯の高地は、其氣候一般に温暖にして急激の變化を來すとなく、從て諸種の疾病特に肺病患者の最上療養所となす、是れ全く其の天然の位置宜しきを得たるに基因するものにして、其の主要なる源因は、(第一、)其流水の多量にして、且つ滯溜の殆ど皆無なるに依る、　即ち南半球に於ける流水の過賸(プレポンダーランス)は、赤道直下に位せる北部地方よりも均一なる温度を齎らし、夏季は一般に清涼にして、冬季は亦暖氣滿てり、今一例を以て之を證せんに北緯三十五度に於ける盛夏の平均温度は攝氏二十五度八分なるもの南緯三十五度に



AMERICA DRAINING THE STRENGTH OF EUROPE.

CHORUS OF POWERS: "The rascal is drinking up all our soup,—From *Wahre Jacob* (Berlin)

於ては僅かに十九度三分となり、又冬季に於ける前者の平均溫度は攝氏八度八分なるもの後者に於ては十二度四分たり、以て南阿非利加の諸地方が其氣候常に均一にして變動少なきことを證するに足れり。

(第二、)其の高原の海面より直ちに隆起せるに依る、　南阿非利加及び濠洲諸地方に於ける高原は常に平地の漸々其勾配を増して形成せられたるものなれど、南阿非利加の高地は、之等に反して其の地層必ず水面より急に高まりて、毫も其間に低地を抱くことなし、故に此等高原の清澄なる空氣は、他の低地に於けるものよりは一層深く自由に人の肺中へ流れ入ることを得べし。故に生來健康なる人と雖も猶、數年間此地に住居する時は、其胸廓次第に膨大して愈健康の加はることを覺ゆるは幾多移住歐人の實檢せる所なり、啻に之等移住民のみならず、既に本國にありて諸種の運動と操練により十分其胸廓を發達せしめたる兵士すら尙此處に數年間駐衞する時は更に其胸廓を發達せしむることを得るといふ。此地の空氣は常に乾燥して濕氣を帶びず、故に盛夏の日中と雖歐洲諸國に於けるが如く空氣重苦しくして堪へ難き等のことあらず、且つ其地盤高きがため、夜間は非常に清涼にし

て、安靜なる眠を樂しむことを得べし。嘗て此地の土人數名歐人に連れられて英京倫敦に來りしことありしが、英の溫度は彼等が棲息せし南阿に比して遙かに低下せるに拘はらず、彼等は終日倫敦の暑氣の堪へ難きを呟やきしといふ。是れ實に其空氣著しく濕氣に富めるため、何となく頗苦しく、從て其暑を感ぜしむること特に甚しきに依るなり。但し冬季の夜間は其冷氣を覺ゆること稍烈しと雖も、猶歐洲の冬に於て濕潤せる空氣を吸ふが如き不快を感ぜず。

更に此地の大なる特徴となれるものは大氣及び土地を溫むる太陽光線の饒多なることなり。砂漠地方を除きては、全世界中未だ南阿非利加の如く多量の直射日光を有する所あらず。

戶外生活に適する地なり

空氣の清涼、溫度の平均、濕氣の欠乏、氣候の不變、日光の多量、是等諸種の特徴は戶外生活の最も完全なる條件を具ふるものといふべし。戶外生活とは終日終夜、屋外に住居して以て恣に新鮮なる大氣に浴するにあり。之れ身躰の健康を增すの最良法にして風邪などに襲はるゝの憂は斷じて意に介するに足らざる所なり、余（プロフエッサー、ドープ）の實檢せし所に依れば、南ヘレロランド（獨領南阿非利加）に於て、夜間戶外に立つ能はざりし程爽冷を覺えたるは冬季中、只三日ありしのみなりと、亦以て其氣候の如何に溫和にして、人の健康に適せるかを推知するに足らん。

肺病患者の療養所

余（プロフエッサー、ドープ）は醫師にあらず、されば余は此地に轉地療養せる幾多患者の病理的經過を詳細に語る能はずと雖も、彼等の悉く快癒に赴きつゝあることは、余の親しく實驗せる所なり。生來虛弱にして俗學に堪へざりしため數年前此地に移住せる余の知己朋友等は今や其健康全く昔日に異なりて、每日八時間の騎旅（殆ど四十哩の道程）を試むるも毫も疲勞を覺ゆることなしといへり。特に肺病患者の如きは輕きは一二年、重きものも數年を出ですして平癒に向ふことは、經驗ある世の醫師の明かに證明する所なり云々。

死海には果して魚類棲息するか

是は極めて容易なるが如くにして、而も學者間に屢論爭せらるゝ大疑問なりとす、エミール、メイソン氏は近日のコズモス紙上にそを論じて曰く。

死海の水は終年沈滯停溜して毫も動搖せずと信じたるは、早計にも其名の「死海」なるより推測したる昔時の謬見なり。此の謬想は既に、親しく同地を遊歷して、其海岸に巨浪の碎れるを見たる旅行家の記錄に依て全く破られたり。即ち死海なる名は如何なる動物も——唯極めて下等なる有機躰を除きては、魚類は勿論、甲殼類及び軟躰動物すらも——其水中に生息する能はざるより起りたる名稱にして、此事實はジヨルダン川より死海に流れ入る魚類は、即時に斃死して、悉く水面に浮び上り、常に腐肉を漁る鳥類の餌食となるによりて明かに證明さるゝ所なり。

然るに此處に頗る奇しむべきことあり、そは近日世に刊行されたる有名なる博物學者の紀行文中に見出されたる『魚類は鹹水湖に於ても發育す』と題せる一文なり。今其一節を左に錄すれば、

死海に魚類の生息する能はざることは、今日まで世人の信じ來れる所

なり、即ち其海水の鹽分は非常に濃厚にして爲めに魚類の發育を許さずと、然るに今や死海に注ぐ小流の河口、及び他の鹹水湖に於て夥しく魚類の捿息するを發見したり、更に合衆國の漁業商會はユターの大鹹水湖に無數の鱒魚を放ちて、他日の暴利を期せんことを企てつゝありといふ、之に依て見るときは、鹹水湖と雖も之に注ぐ河流のため漸次其の鹽分を消滅して遂には魚類の生息に適するに至れるものなるべし云々、

と、之れ果して眞實にして世人の信用を買ふに足るべきものなるか、吾人は先づ其鹹水の成分より論ぜざるべからず。

凡て之等鹹水湖の水は之を熱すること攝氏百〇五度(華氏二百二十一度)に至りて初めて沸騰す、而して、たとへ其水面は澄明なるにせよ、其成分に少なからざる鹽化マグネシュムを含むが故に其の味甚しく苦味を呈す、加ふるに多量の鹽化ソヂューム、鹽化カルシューム、及び臭化物をも含有したれば、淡水魚は云ふも更なり、外海に生息せる通常の鹹水魚と雖も一度此れに投ずれば立處に窒死するに至るべし。

一度此死海の水に浴したるものは直に其海水の密度が他の外海水又は淡水湖の密度に比して、著しく異なれるを認むるなるべし。鷄卵は其水面に浮び、人體は此の海水よりも非常に輕きが故に、高く水面外に浮き上り、從て其の重き頭部のみ水中に傾かんとするに依り、自由に游泳する能はざるべし。

然らば合衆國の漁業商會が、死海に注ぐ細流の河口に於て魚類の捕はれたるを聞き、早計にもユターの鹹水湖を以て魚類の養育所となさんと企てたるは誠に笑ふべき事ならずや、こは疑もなく、漁人がジョルダンの河口に立ちて釣り得たる魚を以て、直に死海より上り來れるものと早合點せしに外ならず、要するに、死海は到底魚類の生息を許さゝるなり云々。

昆虫と人類との筋力比較

昆虫は凡て其の躰軀の微々たるに拘はらず、通常其の身躰に幾十倍より驚くべき筋力を有す、例へば蚤が其身長に數十倍する距離を飛躍し、又蟻が其躰量に十數倍する重物を引き行くことは世人の日常目擊する所なり、今若し人類が是等の昆虫と同比例の力量を有するものならば、彼等は正に十數間の距離を飛躍し、數十貫の重荷を負ふことを得べき理なり、エム、レオ、ロピダ氏は、近刊の『ラ、ナチユール』紙上に此二者の筋力を比較して曰く。

人間の筋力と昆虫の筋力とを、單に機械的の立脚地よりして比較研究をなすは頗る興味あることに屬す、此點より精密に論及することは此兩者の比較は決して雜駁不規律的のものに非ずして、そは只「平面と立躰との反比例」なる形式の一に屬するものなることを知らん、即ち其の法則とは次の如し、曰く、

容積は平面よりも一層速かなる比例を以て其數を減ずと。

凡て筋力の働き得る力量は其截面――換言すれば其表面――の廣狹に準じて增減し、而して其の仕事をなす廣袤は筋肉の容積の多寡に準じて增減す、之を說明せんには先づ昆虫が有する驚くべき力量を說かざるべからす、一例を以て之を檢せんに、今、昆虫の一筋肉と人間の一筋肉とを比較するときは、其大さ前者は、恐らく後者の百分の一にも及ばざるべし、即ち知る、昆虫の筋肉は人類の筋肉に比して百万倍――百の立方――だけ輕きことを、然るに其截面の方より論するときは昆虫の筋肉の働き得る力量は人間の筋肉の一万分の一――百の平方――に過ぎざること明瞭なり。是に於て 次の如き 結論を得 べし、曰く、

人間が其の筋力を以て百キログラム（＝六十二ポンド）の重物を捧げ得るならば、昆虫は其一万分の一、即ち十グラム（＝穀粒百五十四個の重量）の物を捧げ得べしと、即ち昆虫は其躰量よりも百倍以上の重荷を運び得るの割合となるべし。而して昆虫の身躰が小さければ小さき程、愈身躰不相應の大力を出し得べきことは、前述の理よりして容易く推知することを得べし。

然りと雖も、吾人若し此兩者の機械的働作を試驗するときは最早同一の結果を見出す能はず、例へば今、昆虫の筋肉は、其大さ人間の筋肉の百分の一と假定するときは、其筋肉の收縮に依て起る力量は人間の筋力の一万分の一にして、其働作し得る區域は亦人間の百分の一に過ぎざれば也。

且つや、昆虫の筋肉は人類のそれに比して其性質の頗る劣れるものあり、猶、機械の小なるものは其大なるものに比して比較的脆弱なるが如し、今、蚤の飛躍を以て其例とせんに、蚤の筋肉が收縮するときは其身躰を三十センチメートル（十二インチ）だけ跳躍せしめ得るも、人間の筋肉は其身躰を一・五メートル（大凡五フイト）の高さに運び得るが如し、之に依て見るときは、同一の重量に對する人間の筋肉の收縮は、蚤の筋肉に比して殆ど五倍の働作をなし得ること明らかなり、云々

清國及露領土耳機斯垣と印度との通商

此通商は主に、カシミールにあるレー市を通じて行はる。レー市は其初め、蕞爾の一村落に過ぎざりしが、其位置頗る安衝に當れるがため遂に今の大市場となるに至れり、一千九百一年より二年に亘る印度及中央亞細亞間の通商總額は十五万一千ポンドにして、之を一千九百年より一千九百一年に亘る貿易額に比して二十四パーセントの増加なりとす、而して此増加は主として印度の市場に藥材の輸入夥多なるに因る。

英領印度の輸入品は、主に藥材、生糸、及金にして其一年の總額は七万八千三百ポンドに達し、又其の輸出品は、主に木綿製造品、珊瑚緋糸細工及び藍等にして其一年の總額は七万二千九百ポンドに達す。露領土耳機斯垣に於て多量に需めらるゝ珊瑚は、主として伊太利より輸入せらる、而して是等の珊瑚類はカシュガルに於て一ポンド毎に四・七ルーブルの重税を課せらるゝと雖も尚其通商は依然として此路を取れり、印度の茶は、若し支那産の紅茶の供給せられざるときは、又中央亞細亞及び西藏の市場に於て、屢々見出さるゝ所なり。

英國の木綿製造品に對する露國の競爭は近年益々激烈ととなり、盛に模造品を製造して、英國よりも安價に販賣せり、其主なるものは綿紗並に手巾等なり、土耳機斯垣に於ける更紗の專賣權は、露國の製造所の有する所にして、該地の土人は一般に更紗を常服となせるため、其利益頗る大なりといふ、獨逸人は主に天鵞絨及び雜貨を供給す。

▲歐眼に映ずる東亞の風雲

記者の都合に依り本號に限り休掲



盲人の讀書機關

英國牛津にて　好本督

盲人敎育及び盲人狀態改良について、何か書いて見たいものであるとの余の宿望は、殘念ながら未だ果すことができない。それには忙がはしいといふ申譯もあるが第一には余の取調べが尙ほいまだ不十分であるといふゆゑである。こゝには余の狹き見聞の一分部を記し、かつは我國の敎育家、博愛家の御盡力をも仰ぎたいと思ふ。

▲國民盲人用圖書貸出館(National Lending library For the Bhlind)　當館は倫敦にある、其目的とする所は盲人用の點字書の貸出を司ることて、此種類の圖書館ては世界第一といふ事である。現在の藏書高は五千冊ばかり、毎年新らしく增加せらるゝもの五百冊に上り歷史、文學、詩歌、小說、哲學などに關する古今の大著述は、ほゞこゝに備はッて居る。かくて本館の圖書は英本國は言ふまでもなく、獨逸、佛蘭西、乃至南阿の領地へまでも貸出しに從事しつゝあるのである。されど、此世界最大の盲人用圖書館も、其起原に溯れば極めて微々たる組織のものであッた。名譽ある歷史の傳ふる所によれば、今を距ること漸く二十年ほど以前、アーノルドと云ふ貧しき一盲婦人の創立したものであるとのことである。アーノルドは幼少の時より盲目であッた、それ故自らも點字書の缺乏、即ち讀書機關の不備より享くる苦慘を嘗めて。深く此事を遺憾に思ひ、盲人用圖書館を設立して、是等の不便を補はんと思ひ立ッた、時は西歷一千八百八十二年のことである。もとより餘裕ある身ならねば思ふに任せず、藏書とても僅かに五六冊を有するに過ぎぬのであッたが、此一盲婦人の企ても漸く世に知らるゝに至り、或る慈善家がアーノルドの義氣に感激して、若干の寄附金を投じ其の事業を助くるのであッた。これよりアーノルドは小さき家屋を借り受け、新たに書物をも購入して、稍々圖書

館らしきものが成立ッに至ッた。こゝに至ッてアーノルドの熱心と勇氣とは幾層倍した、朝は早くより夜は晩くまで、あらゆる力は悉くこゝに費され、圖書館に關する萬般の事務はもとより、自ら點字書を作り、又篤志婦人等の手に成れる點字書の校正の勞をも執るといふのであッた。創立者が此熱心なる奮勵は、益〻圖書館の事業を擴め、且ッ一層弘く世人の注意を惹き起し、從ッて多くの同情者を得て、或は自ら點字書を作ッて寄送する者もあり、或はまた寄附金を以て事業を助くるものもあり、直接に間接に、尠からず人々の盡力をも得ることゝなり、今日の如き好結果を結ぶに至ッたのである。こゝに此圖書館の事業に關聯せる最も美はしき記念物は、是等の數多き藏書である、其大部分は巨額の金錢を投じて購入せるものでもなく、又別に印刷せるものでもなく、皆當國の篤志の婦人達が其の家庭に於ける仕事の餘暇を以て、或は遊散の時間をさきて、或は其衣裳を節儉して作られたものであるといふことである。例へばビックウイックペーパーにせよ、又ゼ、レディ、オブ、ゼ、レーキにせよ、かゝる大部の書物をペンにて寫本することすら、なか／＼容易の事ではない、況んや例の針の先でコチコチと寫しもてゆかねばならぬのであるから、其の勞は推しはかれる。全く愛の仕事でなければどうして克く此のやうなことを成し遂げられやう。而かも此美はしき事業は必ずしも此アーノルドの圖書館にのみ行はるゝのでは無い、英國の大都會で盲人用圖書館の設けの無い所はない、かくて何處の圖書館にも必ず此美はしき記念物——愛の塊である——を以て惠まれつゝあるのである。しかも、かゝる篤志の婦人は全國を通じて一萬人以上もあらうとの事である。

▲盲人用圖書館の必要　　不幸にして我國などにては下のやうな論者もある。『日本にはめあき（具眼とは云はず）用の圖書館すら殆んど皆無といふべき程稀れてあるのに、どうして盲人用の圖書館などのことを心配して居られやうか』と云ふのである。一應道理のやうに思はれるが、實際に於ては大反對で、圖書館の必要はめあきよりも一層盲人に感ぜらるゝのである。第一點字書などの出版さるゝものは皆無である、第二、點字書を作らせんとすれば非常に高價のものとなる、一般の盲人の需要に應ずることができない。第三、點字書は非常に嵩が高い、殆んど普通の書物の十數倍もあるこれを各自の書室に備へおくことは頗る困難である。

是等の諸點より見ても、盲人には必ず貸出圖書館（Circulating Library）を設けて閲覽に供するより外に、便利なる方法は無いのである。若し又讀書が盲人に及ぼす影響の如何に大なるかは、英國の著名なる盲人アルフレッド、パースト氏の實驗上の所感を見るに若かず、余の直譯は下に示す如くである。

『余の小なる點字本ライブラリイ‥余は讀書家に非ず、多讀を厭ふ‥には、希臘語及び英譯の聖書、沙翁の傑作、ミルトン、ウオツヅウオース‥之は余の特愛の詩集なり‥シエレー、バーンス、キーツ、テニソンの詩集、ホーレース、アルバート、ワトソンの文集、ピックウイック、ペーパーなど、其の數漸く五十を超えず。而かも、業務の爲に疲勞せし時、又精神の快からぬ時も、是等の書物に接すれば、疲勞去り心爽かに、再び余の業務に盡くし得るなり。余は再び言ふ、余は藏書家にあらず、而かも余の有する藏書より享くる利益は僅少にあらず、多くの益なき書を讀まんよりは、若かず、かゝる傑作を熟讀玩味せんには』

また、先日余の知れる倫敦盲人高等師範學校の生徒某氏より送ッて來た手紙の終りに、左の如く記されてあッた。某氏は十六歳の一少年である。

『近頃新らしく閲讀せし書物は、Farrar's Lives of Seneca, Epictetus, and Marcus, Aurelius, Paley's Evidences, Rosebury's Pitt, macauley's, Essays, Jevons Economics などに候』

十六歳の盲少年が、學業の餘暇に於ける短期間の讀書としては、誠に賞讃を値するものと云ふ可きではないか。盲人としては、僅に塙保巳一のみが學者と心得たる人々には、必ず異樣の感があるに相違ない。盲人に對する讀書機關の設備は盲人を救濟するの第一步である。

▲圖書館の設立と余の希望　倫敦には國民盲人圖書館に五千冊、盲人高等師範學校圖書館に三千冊以上の藏書がある。殊にガードナー盲人協會には、希臘及び拉典語の點字圖書館が附屬して居る。是等の他にも。尚ほ盛大なる盲人圖書館が、幾つも設けられてあるのである。又倫敦以外にも立派な盲人圖書館は尠くないが、こゝには其の一例として、北英リーヅ市の例を擧げて見やう。リーヅ市には盲人が凡そ四百名ほどある而して其圖書館に備へつけられたる點字書は既に千餘冊に上り、且つ毎月新しき書物を增加しつゝあるので

ある。是等の圖書は悉く篤志婦人の寄附ゆゑ、もとより閲覧料とてもとらぬ。或る篤志婦人の一人は過ぐる三年間に、Cameos from English history, History of the English Church, The Five Great Oxford Leaders, Guy Mannernig and Donovan などの大部の書籍を寫本したとのことであッた。又余の住んで居る所は人口纔に一萬二千の小都會であるが、立派な點字圖書館が設けられてある。種々の有益なる良著書は云ふまでもなく、新刊の雜誌などに至るまでなかく〱に完備して居るのである。余が見聞を記すことは暫くこゝに止めて、余は我國にも早く盲人圖書館の設立せられんことを希望する。點字圖書館の創立につきては、大に人々の盡力を煩はさねばならぬ、が、敢て巨額の金錢を投ずるには及ばぬ。余は曩に倫敦の盲人圖書館の名譽ある歷史について記した、而して我が國に於てもたゝかくありたいものだと思ふ。まづ數冊より始む可き事、資金の不足を顧慮するのあまり實行を躊躇せざる事などは、此事業の基礎を作る上に於て最も好き模範である。殊に我國の婦人達も、かの英國の婦人と同じく點字書の作製に力を盡されたいものである。盲人の爲めに點字書を作るなどゝいふことは、婦人のなし得る慈善事業の中にても最も美はしく、最も簡易なるものであらうと思ふ。余はこの一事を深く我國の婦人方に切望すると共に、英國の婦人が、如何に熱心なる盲人の同情者であるかといふことをも、お知らせしたいと思ふ。先日余は倫敦の盲人圖書館を訪ねていッて、誰か篤志の婦人て我國の盲人の爲に、英語の點字書を作つて下さる方はあるまいかと尋ねた。館員はありますと答へた。而して、目下我國の盲人の爲に其家庭の餘暇を以て熱心に善良有益なる英書の寫本に從事しつゝある英國婦人を得たのである。外國の婦人ですら日本の盲人の爲めを思ふこと實に此の如くである。早く日本の婦人たるものが、徒に饒舌や、午睡や、間食や、お化粧や、三文小説の亂讀に費しつゝある其時間を以て此の貴き事業の上に貢獻せられたきものである。たゞし此點字書を作る方法は極めて容易く、めあきの人ならば二三時間も費さば、一通り覺え得らるゝことである。偏に我國篤志家の御盡力を願ふ、(點字書を作る方法は、盲啞學校にお尋ねにならば、喜んで教へてくれませう)たゞこゝに、最も注意すべきことは、點字せんとする原本の撰擇である。必ず最も有益なる本を撰り抜くといふことを、忘れてはならぬ。

▲盲人の來英留學　この事をも併せ記したいと思ふ。

盲人の來英留學することは、從來とてもあながち見込のない企てゞはなかッた。當國の按摩院の按摩をしながら、其餘暇を以て學問を研究するといふならば、或は其方法もあッたてあらうが、これよりも我國の體面を保ちつゝ留學することができるやうに、又、容易いやうて其の實は困難なる按摩院にて働くことは、博士カムベル氏なども大に反對せられるところである。余の望む所は働かずに、しかも乞ふことをもせず、特待生として留學し得るといふ特典を得させたいといふのである。幸ひに此の願ひは成就したものと云って宜しい、たゞ、直ちに行はれ得べきやが疑問である。去る十月一日、カムベル博士から來信があッて、目下倫敦市長と交涉中てあるとのこと、いづれ近日返事をうるてあらう。若し東洋の少年盲教師中村氏が、幸に當地に留學の便を得て、カムベル博士の下に、學問を研究することができるやうになッたならば、我日本國の盲人界に大なる光明を添へ得ることてあらうと信ずる。

右　盲人の事業に關して篤き同情と熱心なる注意をなしつゝある社友好本氏が英國より山縣悌三郎氏への近信中に書き添へられしもの特に乞ふて本誌の光彩となす。

中學罵倒論

青柳有美

▲第三段　中學倫理▼

中學生徒に愛國心ありや。曰く、無し。中學生徒に同情心ありや。曰く、無し。しかも、中學教科目のうちには、修身の一科ありて、毎週少なくとも一回、必ず人倫の大義を教へられ、天皇に對する義務國家に對する義務人類に對する義務其他あらゆる義務に關する教訓を說き授けられ、中學生徒の耳膜は義務又義務の聲を以て聾せらる。而して、之を說き教ふる人は、辱くも校長に非ずんば、老實德望を以て全校に鳴る好箇の教諭先生なり。然るを、何ぞ中學生徒の義務の觀念に乏しきこと、此くの如くそれ甚しきや。

われの月給五十五圓を頂戴して中學先生となるや、其最も驚かされたるは、中學教員にありしと雖ども、續ひて我を驚かすこと甚しかりしは、實に中學生徒が倫理思想の缺乏せる一事にあり。苟も既に學に中學の門に入れるものは、少なくとも高等小學二年級を卒業せるもの、其上級生に至りては、早や徵兵檢査を受け終

りたるもの無きにしもあらず。その齢や、必ずしも東西是非を辨じ難き無分別の時季にあらざるなり。されど、就て其倫理思想を具に撿すれば、野蠻人と雖ども恐らく此くの如くに非るべしと思はるゝまで、しかく甚しく幼稚なるものあり。

夫れ、人の社會に於て最も簡單なる道德ありとせば、こは、他人に有形無形の損害を蒙らしむることの惡德にして、苟も社會の員に備はるものゝ力めて避けざるべからざるところなりとの一條なるべし。然るに今の中學生徒の、倫理思想に缺乏せるの甚しきや、此くの如くしかく簡單無二なる道德をだに解する能はざるなり。丁年未滿の學徒に向つて。身を殺して仁を爲す如き高尚なる倫理に會心せんことを望むは、それ或は却て望むものゝ無理ならざるに非るべきも他人に損害を與ふる勿れと要求する如きは、是れ唯誠に人道の普通を勸むるに過ぎず。之を強ふるものの酷なるには非るなり。然るを嗚呼何事ぞ中學生は、かく勸められ此く強ひらるゝに奇異の感を起し、寧ろ此る勸告と奬勵とに驚愕の色あらんとは。あゝ驚愕の色あらとんは。他なし。

今の中學生は今の英學生が英學を學ぶこと三年にしてしかもGodの一字を知らざる如く、修身の道と有らゆる義務とを說き聽かせられて、しかも、道德の如何なるものなるやを解する能はざればなり。今の中學生が其ハートにまで浸み渡りて終始念頭より葬り難きは、たゞ亂暴無智なる生徒取締或は舍監の掌打擲（鐵拳に非ず）と、姑根性なる校長敎師の親切なき叱責とにして、中學生徒の朝に夕に日常行動思念するところは、たゞ斯の二大動機によりて左右せらるゝものなり、其喧騷せざるも（鐵拳ならざる）掌打擲を恐るゝが故なり。その勤學するも受持敎師が『鏡山』の岩藤然たる叱責を怖るればなり。倫理思想と道德觀念との如きは微光だも、到底之を其間に見るべからず。聞く、北歐和蘭の地、水多しと雖ども飲むべきの水少なしと。今の中學生が授け敎へらるるところの倫理は、誠に複雜なりと雖ども、あゝ是れ唯聽くべきの倫理にして、抱くべきものに非るなり。是に於てか、人より今の中學生に倫理道德の眞義を說ひて、之を生命あるもの權威あるものとし、以て今の中學生徒のハートに植え付けんとすれば、今の中學生徒はその『道德』の名を甚だ耳新らしくして珍奇なるものとし、之を怪み之をいぶかりその生命あり權威ある『道德』に對すること、宛然淺

草『珍世界』を觀るが如くにす。蓋し、今の中學生は中學に在學すること五年にして、遂に一たびも此種の道德——詳く言へば生命あり權威ありてハートに抱かるべき意味の道德に接する能はざればなり。あゝ今の中學生の接するところは、たゞ聽くべきのみの道德なり。豈又悲しからずや。

然り而して此る奇怪至極なる現象の、今の中學生徒の間にある所因のものは、全く今の中學倫理教育が、人の行動と觀念との根本たるハートの教養に力めずして、たゞ『何々する勿れ』『何々せよ』と其末葉たる行動と觀念とに薄弱なる命令（否な寧ろ嚀）を傳ふるに過ぎざればなり。動力無くして機械は運轉せじ。ハートの先づ倫理を抱くことなくして、如何ぞ今の中學生たるもの、能く倫理思想に豐富なるを得んや。其の有形無形の損害を他人に加ふるを以て惡德なりとなす簡單にして初歩なる道德をすら解する能はざる、又宜なる哉。

此くの如く、しかく簡單なる倫理上の修養をすら缺くを以て、今の中學生徒は、學校附屬の器具器械を破損し其造營物を破壞して、毫も恥づる色なきなり。蓋し今の中學生徒がハートのうちには、之れによりて縣財政の蒙むるべき損害を氣の毒なりとする同情心なければなり。又同室者が兀々として學に耽りつゝある間に於て、其傍に喧騷し踏舞し角力し擊劍し放吟し吹笛し、その學習を防害するを以て、敢て惡事なりといふに氣づかず、同室者が受くる損害に同情する能はずして、寧ろ好んで之を爲すなり。是れ又蓋し倫理上の根本的教養を缺くが故ならずや。あゝ此くの如くにして、なほ且つ中學に倫理の支配ありといふを得べき乎。否な、あゝ倫理は今や足の塵を拂つて中學より去れり。

何を以て然る乎。宗教なければなり、中學に宗教なければなり。

宗教は文部省の禁制なれども、中學教育に宗教を加味せざる一事は、實に此くの如き失躰を來せるものなり。然り而して、茲に所謂宗教とは禮拜心を意味す。又中學教育に宗教を加味するとは、禮拜心の涵養を意味す。それ、修身の道は、之を授くる者に歸命の念なく、之を聽く者に禮拜の心なくんば、全くの空理空文たるに終るものなり。その人心奧底のハートに入りて、其人の生命たるに至る如きは、禮拜歸命の心ありて後に、始めて之れ有るを得む。かの勅語捧讀の如き、又御眞影に最敬禮を表する時の如き、其間に宗教的禮拜心の

加味せらるゝあれば、倫理教育の上に今日よりも更に著大の効果を收め得るものあるや疑なしと雖ども、今日の中學にありては、此る拜禮心を其教師と生徒との間に索むること實に難し。たゞ敬するのみ。たゞ崇むるのみ。されば、三大節に御眞影を講堂に奉揭せんとして、之を其御安置所より取り運び來らんとするや、校長教員或は時に書記の、たゞ貴重なる天下の珍寶に對する如く戰々兢々として之を捧持することあるのみにして、かの佛僧が如來の像を捧げ、或は羅馬教僧が聖躰と稱せらるゝ餅酒に對する時の如く、之を生命あるものとし權威あるものとし、歸命頂禮する『南無』の心を以てせざるなり。是に於てか、又生徒の如きも自ら禮拜心を喚起せらるゝこと渺く、たゞ僅に喇叭の吹奏によれる音樂の功力に依り宗教心を高められたる時に至りて、漸く御眞影の權威と難有さとを其ハードに感得するものあるに過ぎず。勅語の捧讀また之に等しく、同じく其人禮拜心なくして之を捧讀するを以て、其効果を生徒の間に得る誠に充分ならず。此くの如くにして、折角倫理教育の基本として、御下賜せられたる御眞影と勅語とを苟もするに至ること、全く中學に宗教無きの致すところならずや。

論じて是に至れば、今の中學倫理教育の病根と無能とは、全く宗教なきにあること掌を指すが如くなるを知るべし。あゝ、形式的なるかな今の中學倫理。

▲第四段　中學校長▼

桑田熊藏氏と其内助

天涯茫々生

歐米に在りては、富豪にして貧民の友となり、勞働者の味方と爲る者多し、然かも我國に在りては、社會問題が搖籃の中に在りて、尚未だ實際社會の活問題と爲らざるが故にも之れ依るべしと雖も、富豪にして、社會問題に注意を置き、之に熱心なる者極めて少なし、否、殆ど之なしと云ふも敢て不可なからん、唯一人有り、桑田熊藏氏即ち是れ。

一般讀者の間には、或は桑田熊藏氏の名を知らざる者あるべし、蓋し今日の社會は、唯跳ねッ返へり騷ぎ廻れば、世間の注目を受け、多少の尊敬を博す、之に依りて甲某は社會問題の一ト手專賣者とは爲れり、之に依りて乙某は勞働社會の守本尊とは爲れり、之に依りて丙某は、貧民の救濟主と爲れり、之に依りて丁某は書生間の人氣役者と爲れり、而して渠等の言論文章に

依りて、實際我日本の貧民及勞働者は、何等の利益も何等の幸福も之を得ざるなり、蓋し渠等の說く所の勞働者は書籍の勞働者にして、生活に苦しみ、不幸に泣ける日本の勞働者は、實に渠等の言論の外に在り、然かも滔々たる社會論者は、概ね此の書籍の勞働問題者にして、眞個に我國の勞働者を愛ひ、貧民を憐れむ者少きは、豈其れ慨すべきにあらずや。唯一人有り、桑田熊藏氏即ち是れ。

桑田熊藏氏は、余輩の知れる範圍に於て、最も勞働問題に智識を有せる一人也、氏は素封の家に產れて、早くも社會問題に注意を置き、大學に在りても專ら之に心を潜め、或は貧民窟を訪ふて貧民狀態を明らかにし、或は穢多及非人の著者柳瀨勁介氏と共に、新平民の部落に入りて、其の風習を極め、常に身を以て貧民及勞働者の實情に致せり。而して大學を出でたる後も、尙各工業地を漫遊して、職工狀態を調査せる等、未だ嘗て怠ることなかりき、是れ我國に社會主義なく、勞働運動の事なかりし明治二十七八年以前の事にして、當時社會問題を論じ、社會政策を說く者、僅に金井延氏と酒井雄三郎氏が、時に白耳義の勞働運動を紹介し、或は佛蘭西人的感情を以て、特種の社會論を爲せるを外にしては、外人には、ペマイエット氏が、我國農民の救濟方法を說けると、ボアソーナード氏が、勞働問題を論議せる者ありたるのみ、此間に在りて桑田氏は、勞働問題講究の必要を唱導して、世間の反省を求め、依て以て社會運動の萌芽を起せり。後明治二十九年、社會問題專攻の爲に、獨逸に赴き、ミユーヘンの大學に入りて社會政策を修め、留學三年、ドクトルの學位を得、更に英佛墺伊等の諸國に遊び、親しく社會運動者に會し、或は勞働組合の實情を盡して歸朝せるは、高野房太郎氏等が初めて我國に勞働運動を起こせる明治三十二年の翌年なりしと記臆す。爾來『歐洲勞働問題の大勢』を著はして、社會改良主義を明らかにし、或は社會政策學會を起こして、社會問題に關係ある學者を翕合し、或は經濟叢書の發刊に參加して、經濟學の普及を謀り、今日に至れり。而して君の知己友人は君を起こして實際運動に從事せんことを勸むる者あるも時期の到らざるを理由として輕々しく應せず、官人中最も勞働問題に忠實なる窪田靜太郎氏を助けて工場條例編成に加はり、或は日本鐵道會社の囑を受けて、職工保護規則を作り、寧ろ世間の虛名を避けて、專ら實際の成蹟に力を盡し居れり。然るに、昨年來君が身に

變動起れり、屢次郷地島根に歸りて、又屢次東京に出で、殆ど郷地に在りても、東京の地に於ても席温かならざりし也。余輩は同氏が地方と東京とに相半はして暫らく書齋と勞働者とに離れつつあるを見て、同氏自身の爲に、勞働者の爲に、窃に其の安全を祈れる也。

昨月下旬、偶々君が東京に在るを聞きて、一日落葉堆き千駄木の邸を訪へり、平日の温容に似ず、暗然として憂色あり、故を問へば、久しく病床に在りし內君は此日を以て醫師の宣告を受け、到底全癒の見込なきに至れるなりと、余は餘りに事の意外なるに驚き、深く君の胸中を諒として匆々にして辭し、歸路大學敎授高野岩三郎氏に會し、同君の不幸を語りて相別れたり、越へて數日、一葉の手簡來る嗚呼桑田氏の令閨は逝けるなり。

余は桑田氏を知れると今に數年なりと雖も、未だ深く令閨の人と爲を知らず。併しながら、令閨を知れる友人の言に依れば、君をして能く學問に專らならしめたる者、令閨の力與りて多しと、余輩は僅に此の一事實を以てして、桑田夫人の尋常婦人と類を異にする者あるを認めんと欲す、平凡なる人物記者は、人の美を爲さんが爲に、種々の事實を作り逸話を挾みて、其の人を粧飾す、余輩は一二の事實を知れりと雖も、殊更に桑田夫人の美を吹聽せじ、才能、學識、人の妻として何かあらん、唯其の夫をして、志を爲さしむるに補あらば、即ち其の婦人は尋常を拔ける者あるを認識せずんばあらず。

嗚呼桑田夫人逝けり、余は玆に謹んで勞働者の忠實なる友人たる桑田氏の不幸を吊す、是れ一私人としてにあらず數十年來勞働者と侶なる一の勞働者として、氏の不幸を吊する者なり。世の社會運動者流、氏の著書を忌み、氏の事業を喜はずして、殊更に氏を抑へんとは爲す、敢て氏の事歷を發表して眞面目なる勞働者及勞働運働者に告ぐると爾り。附言す、氏はカールマークスの經濟說を取れる社會主義者には、最も反對なる一人にして、而して社會改良主義首唱の急先鋒たり、一派の人、資本と勞働の調和を稱道するを見て、資本家に阿附する者と爲すが如し、君の應接間には、匈牙利の義人コスートの肖像掲げられ、書齋には常にベーベル及リープクネヒトの寫眞飾らる、君はベーベルの辯舌を喜び、リープクネヒトの學識を稱すと雖も、蓋し君は人物を喜ぶ愛憎の念よりも、實際を喜び、眞理を愛する人なるべし。（十一月七日記之）

思潮

實業學校の獨逸流と亞米利加流

「教育公報」文學博士　三宅雄次郎氏

此頃東京でも實業學校がやかましい、英國では長く捨て置いたが外と競爭に叶はぬから矢張り實業の學校で技術を進めなければならぬと云ふので獨乙や亞米利加へ人をやつたりして居りますが、御承知の通り此二つはまるで方向が違つて居る、獨乙の方は專門々々に出來るだけ分けてする、同じくビーヤを拵へるにしても、ビーヤの拵方も何處々々を專門にしてやる、それを卒業すれば一部を担任して長く職業として行く、皆な一部を專門としてやるから技術が發達すると云ふことになつて居りますが亞米利加はさうでない、さう專門に分けては將來伸びやうがない、成だけ澤山一緒にやらせる、スチープンスインスチチユートテクニカリー工業學校是等は隨分評判でありますが一ヶ所しかない誰も彼もそれを卒業することになつて居りますが、彼の廣く何でもやつて居ると云ふことは直ぐ出て事に當るには獨乙のやうにうまく行きはせぬけれども、段々大きく仕事をやると云ふ上には初から澤山一緒にやつて置かればならぬ、卒業近くに多少まごつくことはあるにしても、是はどれだけかやつて居る中には慣れが附くもので思つた程むつかしい者でない、大抵一と通り心得て居れば其先きそれで練習さへすれば行くものであるそれで往かぬものならば往かぬ、若し良く出來るものがあると、大きな事業を一と纏めに管理すると云ふやうな時は廣く知つて居る方が大層都合が好い亞米利加に大きな仕事が出來るは小さな事をやらさずに大きな方からやらして居るから何處までも展びて行くとが出來るのであると云ふやうなことに育つて居ますが、是は是まで議論のあることでありませう、此方の高等工業學校の校長は初め亞米利加で育つた人で今學校に採り用ゐて居る所は重もに獨乙の式に依つて居るかと聞きますが、機械を入れたりする所は亞米利加と獨乙と色々混つて居りませうが、日本では是等はどうであるか、どちらが宜いか混ぜるが宜いか、どちらに一番重きを置く方が宜いか、其處は考へものである。

美人に就ての理想を一變すべし

「東京教育時報」法學博士　鳩山和夫氏

此體格を良くするに付きましては種々の方面からして之を良くする手段を計らなければならぬと思ふ、學校に於ける體操も宜し運動も宜い、併ながらそれだけでは足りないのである、我々の理想を一つ變更しなければならぬ、男子に付ての理想、女子に付ての理想を變更しなければならぬ、從來行はれ來つた所の男子に付ての理想、女子に付ての理想と云ふものは體格と云ふことに少しも重きを置いて居らぬと思ふ、極く普通の

例を引いて見ますると日々輸入新聞紙に出て居る所の美人の畫がある、例へば報知新聞にはお艶和とか云ふ美人が出て居る、それから讀賣新聞にも此頃露伴の作のなにか續物か出て是にも畫が現はれて居る、其外「都」であるとか云ふやうな輸入新聞、それから雜誌です、諸種に現はれて居る所の美人の畫がありまするけれども私の眼から見ると一つも氣に入つたものはないのです、皆美人として掲げられてある所の畫が美人とは思へない、殊に三日か四日ばかり前の都新聞にナニかの廣告が出て居りました、女の形が五つ六つ並べて出てあつた是もマア美人の積りであろうと思つたが私は是は化物の廣告かナニかではないかと思つた、何處かの寄席かナニかで珍しい化物でも觀せるのではないかと思ふ程に生きたものとは見へない、無論是等の新聞の版下が下手なものであるに違ひない、下手ではありまするけれども丁度アレが今の普通の日本人の理想を代表して居る、先づ畫て見ると吹けば飛びさうな女の畫と云つたらはケニヤ〳〵として居る、立つた所が柳のやうだと云ふのが美人の形容になつて居る、顏色は多く蒼白い赤いと結構だが蒼白い、赤いのは昔からお[illegible]の色と相場が極つて居る、美人を形容する所の文學者の言葉がどうであるか、どうしても美人の形容と云ふと少なくも肺病患者で以てモウ入院せんとする位の資格を備へたものでなくては美人には及第が出來ないどうしても今の日本人の理想と云ふものは頰ッぺたが赤いとか臀が大きいとか書いては美人とは思はれないのである、矢張り臀は小いさくて有るか無いか分らない位でそれから其顏色は赤味を帶びないのが美人である、指はどうかと云ふと細くて丁度白魚のやうな指が宜いとか殆と太陽を見たことかないやうな指が宜いと云ふさう云ふ日本人の理想であつて見ると矢張り女と云ふものは人に好く思はれたい好く思はなれければ、嫁にも行くことが出來ぬと云ふ考へ、指は日に燒けたやうな指はイケない、顏も日に燒けたのはイケない、ナンでも蒼ざめた顏色が宜い、其證據には病氣と云ふことを日本人は耻にしない、隨分もの〻分つて居らなければならぬ上流社會の人が自分に病氣の有ると云ふことを耻辱と思はないどころではない、ナンだか少しばかりの病氣の有るのを自慢のやうに話をする人がある、男には少ないが女にはさう云うのが隨分ある、上流社會の人であるならば頭痛のするのを自慢にするとか腰の痛むのを自慢にするとか一町歩くと息が切れるとか云つて自慢して居る、それよりは三里も男と一緒に郊外に運動しやうと云ふやうな勇氣が出て來れば宜いのであるが、僅か一町歩くと息が切れる、汗が出ると云ふやうなことを恥かしいとも思はずにさう云ふことを云ふ婦人があるのである、で世間是を又少しも怪しまないのである、それならば男に付てはどうか、矢張り同じ間違つた考が行はれて居る、私は芝居は隨分好きであるが、近頃忙がしい爲に少しも行かない、十五六年前に芝居を觀たことがありまする、ソコに好男子と云ふヤツが出て來る、矢張り是が男の標本なんでせう、好男子？美男子、芝居に勢力の有る所の好男子と云ふヤツは意思の弱いヤツで大底赤いやうな襦袢を着てヒコ〳〵と泣て居るヤツだ、所謂色の青白いヤツ、普通の人間からイツもイジメられて弱つて居るヤツ、矢張りアレなどが一番男に取つての日本の理想であらうと思ふ。

我國民が食物の不足

「中央農事報」　農學博士　横井時敬氏

現今の我社會の需要は、我農業の進歩に待つと、極めて切實である、我人口は年々に大なる増加をなしつゝある、約五十万人づゝ年々増加する割合である、此の如き人口の増加に對して、我農業の生産は幾何を増加

石六斗とすれば、一百四万石强に當る、是れのみでは甚だ大なる増加ではないが、併し之に加ふるに、農事改良より至る所の收穫の増加を算入するときは、決して少額でない筈である、併し統計表は全く此事を示して居らぬ、年々の豊凶の差が、獨り著るしく統計上の數字を左右するのみにて、此十年の間何程の増收量ありしかは、少しも顯れて居らぬ。

之を實際の事に徴して考ふれば、農事改良の效果は必ず多少の増收量を來たして居るに相違ない、是れ決して疑はざる所であつて、何故にかく農事改良の效果があるかといへば、農事試驗場や、農業教育や、農會や、其他農政上の施設が大に興つて力あるに相違ない、然れども一方より觀察すれば、此の如き農事改良の進行も、人口增加より來たる需要と、奢侈の進歩より來たる需要とに應ずるには足らずして、近年に至り輸入の輸出に超過する年々漸く多くなつて來た、明治二十四年より同三十三年迄の間、四、五、六の三年間は輸出超過であるか、廿七八年には輸入の超過である、八、九兩年間は輸入超過であるが、翌年には一大輸入超過を見た、其翌年も同樣である、其翌年三十二年は輸出僅に超過することが出來たが、其翌年はまた輸入の超過であつた、然らは右十年間の前半に於ては、五年中四年は輸出超過であつたが、後半は五年中三年は反て輸入超過であつた、而して結局の處輸入超過が年平均四十九万石餘で、前半は輸入超過が年平均僅に二十六万石餘であつたもの、後半には百五十六万九千石餘になつた、後半には凶年か多かつたといふてよいやうであるが、併し食物の不足の年々加はりつゝあることは敢て疑なき所である。

俗曲の消毒

「友愛」　理學博士　田中正平氏

我國音樂の不振に就て社會は速にその不振の原因を除去し、之が培養發育に力めねばならぬのであるが、さて差し當り注視すべき點は如何といふに、是固より多々あるべけれども目下大に其缺陷を感じ、之が救濟改善を急務とするは、(一)歌詞に不穩當の點多きと、(二)樂譜の缺乏、及び(三)教授組織の不備の三點である。

先づ歌詞の惡しきこと、これ從來俗曲の害毒として數へられ、之に對する

をも叙する必要が出て來る。即ち高師直の戀慕、「ペックメッセル、」丈八の眷戀など、美術上の一手段として用ひられたるなどは、この類である。さりながら、吾人が美術的に沒趣味の極として排除せねばならぬ醜は、肉慾に關するか、又は直接に之を聯想せしむる言語、並に遊里、醜業婦に關する事項である。右の二者は即ち俗曲中に蟠る害毒であつて、善良なる家庭に用ゐるべき音樂中には、右の二者は斷じてその存在を許すべきものではない。以上の意味に於て、俗曲に消毒を施すことは、目下の急務である。但し之に際しては、在來の曲中不穩當の部分のみに改刪を加へ、語呂合ひ風の替文句を用ゆる如くしてなるべく大體の意味を害せぬことが肝要であらう。又その歌詞、餘りに卑野にして、殆んど全部改作を要するものは、或は廢曲とすべきものもあるであらうが、是等の曲と雖も、專門家の參考として保存し置くの必要があらう。右歌詞改刪の業たる、元來音樂の範圍外に出づるものであるが、而も我邦音樂の消長に、重大なる關係ある事柄たるを以て、此際世の文士文豪が奮て之に當らんこと、希望に堪へぬ所である。然るに茲に反對論者が出て、俗曲は其歌詞卑猥なるは勿論、曲節も亦之に適合する樣作られたれば、歌詞を離れても、その曲調既に鄭聲なりと主張するかも知れぬ。此論たる、音樂美の眞價を知らざるに坐し、深く論ずるに値せず。

思

青年の危險と大任

「警世」　伯爵　大隈重信氏

日本の社會は混亂無極に達した、新秩序未だ起らず、舊秩序は既に破壞し了つた、人心は惑ひ、氣の弱い人は落膽し、時勢に投ずることの出來ない者は頑固になつた。併しながら此の如き大運動は一世紀も二世紀もかゝらなくては成就するものでない、そこで今日新教育を受け、將來の運命を荷ふべき青年が、この大變動大紛亂の後を承け、其の重且つ大なる責任を盡さねばならぬ、この古今無比の風雲に乘じ、世界無比の好運に遭遇した日本の青年は、非常な好運兒であるが、其の好運の後には非常な危險が伴つてをる、青年の時代は人生の危機である、其の意志の定まらぬ、軟弱なる身を以て、最も危險なる時代に遭遇し、將來の運命を託せられてをる、青年が爲すべきこと、指を屈すれば限りはない、世界優等の國民と文明を競ひ、兵力を競ひ、富力を競ひ、



足袋

繞石選

足袋はいて七寸の草鞋力あり　不也房
此日より足袋はくならひ夷講　辰生
足袋ぬいて踵小さき女かな　擘天鶴
ぬかるみや氣づかふ足袋の新らしき　撫子
冬の日や出格子に干す足袋二足　同
椽端や紺足袋の泥揉み落す　縱横
醉ひふして足袋ぬぐ夜半の寢覺哉　同

干足袋の紐の細さや吹かれけり　虚牛
爐火箸に足袋干してある山家かな　同
爪つんで新らしき足袋穿ちけり　琶湖舟
コールテンの足袋と申して流行振　同
白足袋や禮儀かしこき女の子　鳳梧桐
白足袋や佛事に集ふ女客　同
乾足袋の小窓釣菜の軒端かな　同
白足袋の丁稚小僧や夷講　丁堂
炬燵して霜燒けの足や足袋をぬぐ　同
古足袋の粉炭にまじる木小屋かな　同
紺足袋の市に物買ふ女かな　同
足袋つゞる古女房や置炬燵　同
足袋を干す竹垣寒き薄日かな　芒生
足袋選む江戸は若衆の奢り哉　同
足袋はかぬ佛尊き御足かな　同
古足袋の緒磨れも見えて爪の穴　同
學寮や垢につめたき足袋をはく　同
一同に足袋たまはるや大晦日　萩生

還暦の赤き足袋はく祝ひかな　同
厚紙に足袋形切つて貰ひけり　同
新足袋に下駄の滑りや苔の道　同
自炊子の足袋洗ふ日もなかりけり　同

人

絹足袋に一門の榮華極りぬ　萩生

地

椽先や尿する稚子の赤い足袋　丁堂

天

新らしき足袋に立居や客の前　萩生

選者吟

靴ぬいて靴足袋の穴面はゆき
配膳や足袋ちよと見ゆるお引摺
霜やけの小指いたましかたき足袋
とばしりや足袋にはねたる泥悲し
地謠の足袋足いたき板間かな
ぬかるみや紐足袋の紐ほどけたる

正月分課題　萬歳。。(十二月二十日限)

二月分課題　春の川。。(一月十八日限)

夕雲集

光風選

○　村狩有無子

秋の雨細き三笠の麓茶屋夕の野寺の鐘の聲きく

○　富士山琵琶舟

都より忍び車のきしり着きて賀名生かり宮秋の雨ふる
秋山のよき人こもる庵見えて紅葉の奥に小鹿泣くなり
病む妹を駒に乗せつゝ湯のやどへいそぐ夕ぐれ春の雁なく
筆投げて小椽に妹は夕山にかくるゝ春の雁を見送る
貝擢の文宮開きてまたしても春の怨のたへぬ夕や

○　羽田叢雲

秋の蝶の行方ながめていつしかも月の傾ぶく山寺の庭
紅梅のかげうつしたる竹椽の小猫の夢を春の風吹く
暮六つの鐘つき終へて石段を下るみ僧に紅葉ちるなり
桃の花ほろゝこぼれて池殿の小簾もる灯水にうつれる

下鴨のやしろに笛を納め奉りかへる夕月鳴く子規

○　正富汪洋

覗き見て崖を恐れぬ盲目（めしひ）なり葉蔭に露の美くしき花

戸の内に我や語ると廊に聲をおほへる前髪の君

未だわれ袈裟を斬らざる盛遠か戀に凝る今日菩薩を強ひな

○　磯野魯佛

かたそみは苦しきものゝ名なりとは玉の指環の光りに知りぬ

亡き人のかたみ秘めたる玉くしげ見れば泣かるゝ見ねば憬（こが）るゝ

野狐やみやま烏が小ざかしく道をしへんといふがをかしき

なりならぬそはたゞ神の聖旨（みむね）なり清き希望よわれを離るな

われにのみ光り送ると見ゆるかな希望（のぞみ）もつ子がむかふ夕づゝ

など神の大御懐（おほみふところ）に就かずしてうきよを憂しと泣くや人の子

世の秋をうしはく神や妬みけんもろくも散りし山の紅（もみぢ）葉（ば）（紅葉山人の夙折を悼みて）

○　尾崎岐川

思ひ餘り椽に出づれば星一つ長き尾ひいて南へ飛びぬ

燒鎌の利鎌の月を仰ぎつゝ夕露野路を歌誦してゆく

松黒く朝靄こめし犬山の城を左に木曾川くだる

美濃白川の郷白山神社に詣でゝ

御堂古れど色どりあせぬ繪天井鶴に隣りて牡丹と梅と

○

拾遺

松が根に小雨に濡れて泣きながら見送りし人遂に嫁ぎしと

こゝろみにバイロンの詩とわが歌と比べてみませ心にくき君

舞姫の一とむれ過ぎておほろ夜の月かたむきぬ祇園のさくら

うつゝなく春の夕ぐれ椽に立ちて病む身につらき桃の

花みる
天地に胸の大さたくらべて笑むやそゞろに富士のいだだき

駒たてゝ妹が家遥かにかへりみぬ山路にかゝる松の木陰に

ほとゝぎす一聲なきて雲晴れぬ山の端の月いよゝ涼しき

末の兒を尼に託して夕月夜門を出づれはほとゝぎす鳴く

京立ちて春の雁きく並木みち月かげふみて石山につく

笛とりて童はまたも出でゆきぬ春や夕月梅咲ける門

關とをみ驛路の鈴の音もたえて山みち三里雪しづかなり

村長の家をいづくと我とへば白菊かどに咲くと馬夫いふ

わかれては晝も夢みつ夜もすがら泣く子あはれと母もろともに

見も知らぬ人の名を戀ふわれやそもあはれこの秋文二百通

二十五年戀に朽ちたる我骨はシベリアならで捨つる野もなし

こがらし

夕べ木枯吹き初めて
落葉ふりしく裏の門に
鳴くや小鹿の聲悲し
あゝ森林に詩人が
なれの叫びをきゝしより
心の緒琴うち捨てゝ
かへり來にけり里近く



權力を擴張し、航海を盛にし、商船を保護するには軍艦を造らねばならぬ、日本民族が段々増へる、國際間の問題が起る、其忙がしいことは、恰も婚禮と葬式と旅立ちが一所になつた樣である、世界のあらゆる方面に發展し、競爭し、活動しなければならぬ、而して此の力を養ふのは結局教育に外ならぬ、今日の顯要の地に立つて威張つて居る先生たちも、早晩閻魔の廳から執達吏を差向けらるれば、いやでも應でも冥府に往かねばならぬ、そこで天下を取るものは青年である、然るに何事ぞ、政府が何であるとか、元老がどうのと、其日暮しに是等に支配されて、青年の本領を失つて居る、政治の組織も、法律の編成も完全して居るけれども、之を活かすものは人物でなくてはならぬ、社會の制裁道德の制裁も弛んで、舊秩序は破れて新秩序はできぬ、而して青年の教育は甚だよろしくない、一たび學校の門を出づれば、恐るべき危嶮道に横はり、四面暗憺として咫尺を辯ぜぬ、青年の此中に飛び込まねばならぬ、一生の浮沈を此の間に決せねばならぬ、實に今日は恐るべき危嶮の時代である。

▲最深の湖水

從來知られたる世界最深の湖水は西比利亞のバイカル湖にて、海面より千三百五十呎の地にて海面下三千呎、都合四千三百五十呎の水深を有す、然れども近來カスケード山脈中にて發見されたる長さ十五哩幅八哩半の小湖は、バイカルよりも猶深しと稱せられ其水深探檢中なり。



慈善を名とせる強賣

氷峰

凡そ物を賣るといふことは、買はむとするものゝ便利を計るといふことを以て、第一要件とせざるべからず。世に、要もなきものを買はしめらるゝ程、迷惑なることはなければなり。然るに、近時、苦學生と稱するもの、貧民學校生徒と稱するもの、若くは各種慈善團體の下に保育せられつゝある青年少年等が、樣々の物品を携へ來りて、「どうか買つて下さい」と强請するものゝ、漸く將に多きを加へむとするは、吾等の頗る憾とするところなり。特に、これ等の年少行商人が携へ來るところの物品は、その價格法外に高く、少くとも市

價の二三割以上の暴利を貪らむとし、而して彼等は、「慈善」の名の蔭に、巧にこの曲事を隱了せむとす、一言なかるべからざる所以なり。

遊人や、ゴロツキの徒が、手拭一本投げ出しての强請には、厘とも云はないだけの勇氣は則ち在り。しかも、可憐の少年が、「どうぞ」と賴む聲を聞き、好個の青年が、苦學の狀態を察しては、ツイ不用のものにも高い金を拂ふに至るは、蓋し人の弱點なり。これにつけ込んで一もうけせむとするものあらば、豈憎まざるべけむや。今の苦學生を監督して、成業の道を授くと稱するもの、貧民の子弟を集めて、これを敎育すと唱ふるもの、慈善何々會の看板を掲ぐるもの、多くは、これによつて己の慾を肥さむとするものなりと言ふ、用心せざるべからず。

賣るといふことは正しきことなり、しかも少年少女をして、賣らしむるといふことは、考へ物なり。何となれば、賣るは造るより容易にして、且つ利を見ること早ければ、安逸を求むるの風を馴致し安ければなり。暴利を貪るといふことは曲事なり、已に曲事なり、人間の爲すべきことにあらず、殊に况や少年少女をや。人一たび暴利の味を知らば、彼は遂に乞食根性を増長して、全く額に汗する考を消耗せむ、實に國家社會の禍なり。

世のこの種の事業に從事せる諸氏、冀くは、彼等年少の子弟をして、斷じて賣らしむることなかれ、而してこれに造ることを敎へよ。以て將來彼等が、獨立生活の地盤を固めしむれば、諸氏の任こゝに全く、諸氏の効長へに傳ふべし。

大學生と特典

彼も大學生なり、我も大學生なり、彼にのみ諸種の特典ありて、我にこれなきの道理あらむや、我に特典を與ふるを肯はずば、彼の特典をも奪ひ去るべし、彼の特典を奪はずは、我にも特典を與ふべしとは、各私立大學の要求するところなりと聞く、蓋し當然の申條なり。されど、頑冥狹量なる赤門大學は、遂にこれを容れざるべし。縱令若しこれを容れて、赤門大學生も、悉く私立大學生と同樣の試驗を經ることゝすとも、そこにはまた底があつて、結局たゞこれ一種の形式にとどまり、何の効をも奏せざるべし。

これを最近の事實に見むか、夫の高等文官試驗に於て私立大學生の筆記試驗と口述試驗との成績は、全く反

此例をなし、筆記試驗に於て優等なりし私立大學生が、口述試驗に於て多く落第せり。この間、何等の消息かなからざるべからず。果せる哉、吾等は奇怪なる風聞を耳にせり。

試驗委員は、殆ど全く赤門大學の敎授なり、學閥根性の旺盛なる彼等は、自己の敎へ子にのみ幸あれかしと念じて、これを曲庇すること頗る甚だしく、曾ては受驗者番號を奇數偶數に區別して、一時世の物議を惹起し、昨年は口述試驗に於て、私曲を行はむとし、口述試驗問題を赤門大學生にのみ漏洩したりとの說さへあり。本年はまた、私曲に一段の巧を加へ、熟面の赤門大學生に對しては採點を寬にし、官私甄別し難きものには、問答中英語又は獨逸語を挾みて、これを聽取し得るや否やを試みてこれを區別し、以て縱橫にその手加減を施したりと。

嗚呼、これたゞ風聞のみ、風聞といふと雖も、しかも亦、帝國大學の狹量と、學閥の勢力扶殖に餘念なきとを窺ふべからずや。

已に此くの如し、縱令各私立大學の要求するところを容れて、判檢事辯護士の登用試驗も、悉く私立大學生同樣に受驗せしむとするも、此の如き私曲行はれむには、たゞます〳〵私立大學の價値を失墜するの恐を增すのみにして、毫末も得るところはあらざるべきなり。賢明なる私立大學の諸氏、要するに、今後は實力の競爭なり。馬鹿を相手にして、あたら暇をつぶさむより、孜々として硏鑽を怠らず、事實に於て赤門大學を壓倒するに至らむこと、吾等の切望に堪へざるところなり。

▲新聞評壇▲

新聞記者嘆

龍岡先生

◉龍岡先生、新聞記者となつて、可惜十年の歲月を空々寂々に送つて仕舞つた。これ實に生命なき新聞記者嘆てある。

◉新聞記者となつて、殖えたものは、曰く借金、曰く面友、曰く反古、曰く雜誌雜書、曰く古郵便切手はがき、曰く愛兒、曰く垢、曰く何、愛兒ばかりは手製だが、他は皆他働的じや。厚くなつたのは面の皮、薄くなつたのは足の裏、學び得たのは、酒を飲む事、藝娼妓を買ふ事、待合にしける事、夜深しする事、朝寐する事、法螺を吹く事、心にもない文章をかく事、人を

擒縱殺活する事、實力以上に買被らせる事、不規律な生活、亂讀亂筆、ア、くたびれた。それで十年贏し得たるは、只是れ虛名。

●はじめて新聞記者になつたのは、明治廿七年の秋、月給はたツた拾壹圓。卅六年の夏、新米の主筆と小ぜり合の末、辭職を申出ると、ハイ左樣なら。埒は早いもの十年勤續の社員を見ること、古草履を棄てる程にも思はぬ。序にいふが、此時の月收は車代や手當や俸給を併せてやつと七拾五圓、拾壹圓で雇はれて十年目で七拾五圓、辛い浮世じや、尤も貳圓五拾錢の文撰職工から累進して、現に貳拾年精勤して五拾貳圓しか貰はぬ先生も居る。

◉ツイ此頃入社した某外交先生は、某校優等の卒業生じやが、月給が拾八圓、車代が拾六圓、併し拾六圓では車夫が雇へぬといふので貳圓自腹をきつて漸く抱へられた。車輛に、意氣揚々、外見は如何にも立派だが內證のさんだん、いつか主筆の耳に入つて、氣の毒と思つたか貳圓の增給、記者先生是に於て太白を浮べて祝して曰く「ア、、お蔭でやつと車夫と全給になつた哩」

●龍岡先生入社の當時は今とは物價も廉かつたが、併し大の男一匹月額拾壹圓では迚も下宿代にも足りぬ。足るを知れ、分に安んぜよと踏張つた所でなかなか側がそうはさせず、煙草は吸ふ、酒は飲む、牛食はする西洋料理もかじる。拾壹圓皆喰つて仕舞つて、まだ喰ひ足らぬといふ始末。尤も自分ばかりではない、人も手傳ふので、借金はそろそろ出來る、三度の辨當が貳度となる、だんだんに來なくなる。まゝよ、其うちには何うかならう、何うかならうで過すうち、身は旣に自墮落の境界に陷つて居る。

◉其年の十二月、四圓增給されて、年末の賞與金も出た。仝僚から聞けば、異數の恩典じやそうな。此時會計監督の者宣告して曰く「着物を何うかしたら宜いでしやう」と成程煮〆の樣な双子織の布子一枚、出るにも入るにも此れ限り、新年は來やうが着物などの考は起らなかつたが、こういはれて見れば、幾分氣恥かしい。併し賞金の五圓丈てはどうにも手が出ぬので、株主の一人に相談して會計から貳拾圓借用し、之を內金として新調した着物は、黑羽二重五ツ紋羽織、琉球紬二枚襲、五仙平の袴、白縮緬の兵子帶。無鐵砲によくも誂へたものだが、さて此あと始末はどうする。社の會計が監督して、月賦拂として白木屋から受取つた。

◉明治二十八元旦。鳳暦茲にあらたまつて、龍岡先生も亦新年を迎へた。新調の衣裳、新調の帽子駒下駄、ニコ〱然として編輯局に出現まし〱たる風采、餘所目には何と見へたらう。昨日の窮措大は今日の紳士先生の身にとつては實に非常な劇變である。何事も劇變の後には幾多の葛藤が埋伏する。それよ、柄にもない菩薩顏を作つては居るが、腹のうちは苦面、澁面、夜叉の面、實は皆借金の塊で、借金を着て、借金を喰つて、借金を穿いて、それで何が面白かつたらう。思へばコヶの至りサネ。『イヤお目でたう』と小使にまで世辭をまいたはよいが『先生序にお頭もどうかなさらなけりやア』ホイ、しまつたり、無性者の本性見透されたり。蓬頭亂髮、頸筋の垢積ること一寸。

◉新年の編輯局は太平無事なもの、三ヶ日の新聞は、何の記事を掲げるの、何の書を挿むの、社外の誰れと〱には何の論説を頼んで、あれと是れには何を書かせるのと、二ヶ月も以前から準備して、大晦日までには既に一日平均三十頁乃至四十頁の新聞は刷上つて居る。故に元日早々かくものといつては、當日の市中雑況位で用事がないから、社員は何れも微醉を帶びて、優々としてやつて來る。中には醉歩蹣跚として居るのもある。おい〱雑談が初まる。編輯局は賑やかになる。

◉何處の令嬢は素晴しい風をして居つた。それは三井へ新調して意匠を凝らしたもの、裾模樣は暈染で何、帶は大和錦で京都の川島が別機で織つたとやら。新橋の誰は奴凧のこんな模樣の三枚襲を着て居つた。あれもやつぱり三井じやそうな。イヤ今日石黒忠悳の所へ往つたら、例の通り玄關にテーブルを置いて、葡萄酒一瓶、巻煙草一函、一吹一杯年賀の客を犒ふとあつたが、まだ誰も手をつけない樣だつたから、僕はコレこの通り強奪して來た。近衞公の床飾りは實に立派だつた。軸は何て、置物はどう、何れ家例によつたものだらう。僕は黒田侯へ往つたが、あすこの床飾りもなか〱見事だ、イヤあいつの家の見そぼらしいこと、政界の貧客はお話にならないネ。所が彼奴は某富豪の令嬢と舊臘結婚して、今ホネー、ムーンだつていふじやないか、君は留守の處へ往つたのだらう。ウム、そうか、金満家だつてアノ令嬢は菊石ッテいふじやないか菊石ッて君の御面相は、そりやア何だ。所謂自己瘡痕の凹凸を説かずして、徒らに他家の聲譽昂低を嘲けるの徒、恁んな話で無中になつて居ると、最前より無言

て耳を傾けて居つた主筆先生、君等はなか〳〵宜い材料を探つて來たじやアないか、服裝のこと、床飾りの樣子、一ツ〳〵それを雜報に書き給へ。床飾りの方は續き物になるネ。『當世名士の床飾り』と題して毎日二三軒宛探して來給へ、正月の讀物にやア至極だよ。と鶴の一聲、微醺居士、早速席に就いたもの丶、何分心こ丶にないので、どうにも書けぬ所から、話の筋を聞いて龍岡先生が筆を執ることになつた。（つゞく）

▲新聞樂天觀

磯野魯佛

●『よく見れば薺花咲くかきね哉』で何事も悲觀主義の人間の眼には暗黑の方面ばかり映りて他の短所欠點のみ見出されるのであるが、また一方樂天主義の人の眼には兎角光明の方面のみ映りて他の美所長所のよく認められるものである、僕は元來偏狹なる人間で何事も自分の主義主張に協らぬものは一も二もなく言ひくだす癖があるが、近來大に佛陀の慈眼視衆生と云つたやうな風に餘り悲觀を振廻すことなく創世の始め神が『善し』と宣ひし大御心に躰し成るべく凡てのもの丶美所長所のみ視やうと思ひ、まづ手始めとして此の新聞樂天觀を草したのである、併し果して之が永續するや否やは一大疑問である。

●中央新聞　流石に大岡硯海氏の主宰する新聞だけあつて兎角伊藤侯を崇拜し現内閣に反對するの筆鋒あるは是非なきこととして、隨分此新聞が其紙面の經營に骨を折ることは僕等の樣なしろうとにも分る、目下此新聞の呼物は水田南陽氏の『六人婿』、『お局生活』、『家庭の女王』などである、南陽氏の飜譯小說は先年二三冊讀んで見たが孰れも探偵ものて丁度都新聞時代の涙香ものを讀むやうて中々捨てたものではない、六人婿は其始を見ないから分らぬが隨分面白さうである、併し其話題は念入の背德亂倫を以て經緯されて居る、且其筆にも思ひきつた警句がある、若し夫れ十一月五日の末文の如きは的是れ梅暦か八幡鐘中のものである、お局生活に至つては僕等の樣な平民には九重雲深くして窺知ることが出來ぬが丸きり想像說ばかりでもあるまじ、僕は之を讀んで如何に貧苦に迫ればとて可愛き娘を針妙などの奉公はさせまいと思つた、小林蹴月氏の小說は全然朝日の仰天霞亭桃水等と雁行すべきもので古風な奥樣などには定めし受けられるものであらう、それから僕が此新聞に大々的贊成するものは附錄の『家庭』て

ある、是迄のツマラヌ講談なぞから比べると殆ど月と鼈の差である、益々材料を精選して好個家庭の讀物となせ、僕はどの新聞に限らず斯かる向上的改良には滿腹の同情を禁ずることが出來ぬ。

◉東京日々新聞　知泉氏の文がどうて晨亭男の說がこうてと云ふのは樂天觀の勢力範圍外に逸する虞あるを以て云はず、此新聞の特色は報道の早きと政府者の意向を（積極に消極に）知るの便あることであるさうだが、僕等はそれより澁柹先生の小說と近事片々の冷嘲熱罵と一葉庵氏の輕妙なる俳文的筆致を喜ぶものである、殊に上田巖南氏が露國新聞の飜譯は他に一二の類例はあるが最も本紙を以て翹楚とするのである、由來我邦の新聞が露國の事を云へば大抵英米の新聞を通じて彼等の色目鏡の反映を取次ぎて得々然たるに反して本紙は直接露國の新聞より飜譯するのであるから敢てX光線の作用を假るに及ばず直ちに其眞相を伺ふことが出來る、其處に至ると本紙と東朝の飜譯は十分憑據をするに足りるのである。

◉日本　雜誌的新聞と云へば日本と讀賣新聞であるが併し日本は十年其特色を改めざるの操持の固い新聞だけあつて總てが男性的であつて彼の讀賣新聞が「當世百人娘」の「好きと嫌い」の「滑稽問答」の「はがき集」のと云ふ樣の俗受專門の種を以て紙面を飾るに反して本紙は今日に至るまで傍訓を施さず主筆を更へず主張を變ぜず一種の蠻から的筆鋒を振廻す所いはゆる北方の强なるものである、且つ其記事も新古に關らず一連に二三百回の長篇を揭ぐるの勇氣は所詮賣らんかな主義の他新聞に眞似の出來ない所である、目下の『露國の內幕』、『戰爭と經濟』の如きは是れである、『私立大學評判記』は讀賣の東西大學の比較評論と共に多數の愛讀を博すべきもの、『風俗統計』は趣味と實益とを併有せしもの益々各方面に其手を延ばさんことを望む、『古今笑話』や『新題柳樽』の如き硬中軟あり時に讀者の頤を解かす事がある、人は言ふ日本は小說を載せずと、然れども曩に永く續きたる『猛獸つかひ』の如き近頃の『愛國心』、『親子』の如きは好個の小說である、小說と云ふものが單に戀愛情事の葛藤にのみ限られるものならば知らず、複雜なる人事を具躰的に書き現はしたる（美文的に）ものを小說と云ふ何の不可かある、勿論傍訓なし挿畫なしと云ふ小說は目下我邦の新聞中には他に類例がないから人の注意を惹かぬも尤もの事である、月曜附錄の『辯護士』の如きは國民の溫亭や紫草

から專賣侵害の訴訟でも起しさうなものである、先月十日の評林『猶可斷』『易水秋』の如き挑發的文字は僕も小癪では無いが「慷慨悲憤氣則氣、恐於邦家無稗益」と謂ひたくなる。

◉國民新聞　毎號八頁添ふるに市の公文を以てし隔週附錄を以てし中々紙面の經營に盡力の跡歴然見るべきものあるにも拘らず世評今以て好からざるは何の爲ぞや、曰く知る者は知るべしてあるがそんな事をすつぱ抜くは樂天觀の禁物であるから云はぬ、目下水陰の『海底の寶庫』、鏡花の『風流線』の二小說は本紙の四頁五頁に大々的光彩を放ちて居る、此等二大名家の新作小說を一新聞に併載するなぞと云ふ事は當今都鄙の新聞を通じて恐らく其比を見ずてある、且つ停春氏の『明治文學史士の尾崎紅葉』史眼自ら一頭地を抽ける氏の評論醫科大學以外更に此文豪の錦心繡腸の剖解を見るなるべし、其他本紙の呼物は主筆氏の『東京だより』と『日曜講壇』であるが近來少々振はざるは僕の樂天觀のひがめにやあるらん。

◉京華日報　京華日報はこれ休暇日報なりとのありがたからぬ尊號を博したる本紙も暫く其尊號を實現して週報の名の下に隱現し來つたが今般彌々平田前農相の手に歸したとかにて再び新裝否寧ろ小なる形を以て現れ出てたが、執筆者は矢張り二宮瀧本氏などとの事てある、其主張は日々國民中央などの兄弟分てある樣てあるがそんな事はどうでも善しとして此新聞での讀物は大村教授の『獨逸の畵家メンツェル先生』の評傳である、實の所僕はメンツェル先生の事は始めてゞあるから中々面白く讀んで居る、それから海外だよりも獨逸種が多いやうであるが、定めし社中に獨逸語に堪能な人が多いからであらう？小說『歌』の作者海紅堂主人とは何人てあるか知らぬが雜誌「ほとゝぎす」の報ずる所によれば碧梧桐氏であるそうだが、成程そう思つて見れば例のすら〳〵とした寫生的筆致が澤山見える事件も小說としてよりは矢張り「ほとゝぎす」一派の寫生的自敍的のそれてあつて一寸面白く出來て居る、子規子物故の後日本派俳壇の雄鎭たる氏の筆硯も益々多事と云はねばならぬ。

◉東京朝日新聞　電報種の多きを以て報道の迅速なるを以て新聞社會に嶄然たる頭角を現はす本紙は其他にも隨分特色の多い新聞である、ひと頃講談流行の際讀賣や國民あたりでさへも講談物を掲載して紙面の飾りとしたが頑然此流行にかぶれず未だ一回も之を紙面に

登せぬは本紙の特色である、絶えず二個の小説を掲げて一回たりとも執筆者病氣の爲め休揭云々の虚僞的廣告を以て讀者を欺いたとの無いのも特色である、三面記事の艶筆若し其比を求めるならば讀賣子のそれ位てあらう、陳い語だが光彩陸離とでも云はふか、彼の抱一庵主人が一種の文躰を以て續々西洋の奇文を紹介するのも本紙てある、併し目下種切れかして見當らぬは遺憾てある、遺憾はこればかりてはない草村北星氏の文學評論の見えざる、西海枝漁舟氏の露文飜譯の見えざるは實際僕等の遺憾てある、願はくは續々拜閲の榮を賜はらんとを、次に本紙の特色とも云ふべきは竹の屋主人や柳塢若翁が一回交代の記行文であるが、之を輕妙なりと譽める者は笹の雪あたりの料理で腹を脹らしてオホンと濟ます高楊子の連中てあつて、なんだあんなものと貶しつける人は大道的精養軒あたりの一品料理の立食に口なめづりする未來の名士諸君てあらう。目下の『會津の東山』は此種の好標本てある。之を要するに本紙は海老茶式部出身以外の奥樣連に愛好されべきものてある。

◉二六新聞　都新聞の續物に隨喜渇仰する者は本紙の青々園氏が『毒芙蓉』を愛讀すべき義務があるのである由來青々園氏の作物は探偵趣味四分、演劇趣味三分、文學趣味三分と云つたやうに確に一部の人をチャームするの力がある、この毒芙蓉も例の惡奸毒婦を點綴するに無垢なる少女を以てし事件の發展と共に彼が悲しむべき未來の運命を偲ばしむる底のもの新聞小説として最も恰好のものであらう『萬里長征娘子軍』の如き目下尙その發足點にあれども史的觀察却々侮るべからざるものあり、爪紅氏の評論文學宗敎科學哲學其他なんでも來いの勇氣當るべからず且つ聽くべきもの決して尠からず、論評に上れる内治、外交の議論少々激越の嫌はあれども近來大に見るべきものがある、後の月影、僕の沒後若し其稿を續けるも之に應ずる良細君の僕になきを恨みとするのである、花柳界家號僕は其標題だけて讀まぬからとかうの評なし、本日（此稿を草する時は十一月の十七日なり）の本紙に靑柳有美氏の煙草屋開業の廣告があるが藝者研究の開山たる有美氏何ぞ其對象たる藝者屋を開業せざるか、勿論資本金たつた十六圓では三毛猫一匹の代にも足らぬと故煙草屋位が丁度よからう、何れ中村夫人の『麵麭屋店頭の感』に次て有美子夫人の煙草屋店頭の感がどこかに出るてあらう。

◎尚此に洩れたる新聞及び各新聞を通じての歌壇俳壇の評論は次號に讓ることとなして一先づ癸卯文壇の筆を擱く、めでたし々々々々。

▲新聞縦覧所（二錢子投）

▲二六　新聞の一大白白何かと思へば一大他白であつた、金の延べ棒以前勸業債劵以後の發行數其自白が聞きたい

▲萬朝　の寶探がし、報知の字探がし、二六や中央の眞似が段々殖へる

▲都下　の各新聞今に悉く富くじ業の會社となるであろう

▲東京　各新聞の勢力範圍が知りたい、喩へば朝日は何縣に最もよく賣れるとか、萬朝は何町に最も多いとか同じ市內でも區に依て新聞の捌け方が違ふと思ふ

▲都新　聞は藝者屋と遊廓と床屋で二万の定客があると聞いた

▲書生　の最も多く手にするは讀賣で妻君の最も多く手にするは報知官吏實業家の多く讀むは時事と日々と朝日、萬朝丈けはいづれの階級にも満偏無く行き渡て居る

▲完全　な夕刊の新聞が一ッ有てもよかろうと思ふ、其日午前の出來事を其日に知る機關が欠けて居る

野蠻趣味

有美

世は今や漸く文明に謳歌するものを減じて、野蠻趣味に感興ある人を増さんとしつゝあるものゝ如し。これを以て天下の憂ふべき徴なりと爲すものあらば、これ未だ人情の本然を解せざるものなり。昔の代、法王權の壓制あり專制君主の暴逆ありし日に於て、これに抵抗蹶起せし民主家あり反教家ありしと同じく、今の如くしかく文明の暴力と壓制との微甚くして其嗜好せざる形式を人類に無理强ひし、これを好み斯の權力に服從する意なきものを目して、漫りに人非人なりと爲し、徒に不德漢の名を加へて天下皆な之れと齢するを恥るが如き時に至りて、茲に猛然として文明に反抗するものゝ起り、その號呼により天下を擧げて文明の軌範より脫し、野蠻の情態に無限の趣味感興を抱かしむるに至る、又實に止むを得ざるなり。

それ文明は煩瑣なるものなり。迷惑なるものなり。文明の生めるものは、道德なり、禮儀なり、代議政躰なり、トーンを重ぜる描寫法なり、複音々樂の最絶とも觀るべきシムフオニーなり、欧西の長たらしき詩歌なり、五もくの多き小說なり、山鳥の尾の如き紀行文なり、又歸納法なり、ノーメンクレーチユア哲學なり。是等のもの何れか皆な煩瑣ならざる。人間たるもの、たゞ時の少間は其珍らしくして躰裁よきに釣り込ま

れ、拍手之を歡迎し又これに隨喜すべしと雖ども、此くの如き煩瑣と強壓とは、到底永久へに堪え得らるべきところに非ざるなり。重きを支へたるものは、何れの日にか毀れざるべからず。是に於てか、まづ起れるものは、道德を破壞し其束縛より脫せんとする聲なり。かくして、其歸するところは、野蠻にあり。道德未だ地に現せざりし以前の野蠻にあり。續いて起れるものは、シヴアンネの如く、トーンに重きを置かざらんことを欲する新畵派なり。かのアルヌボー式の如き、又所謂進步せる歐西の線畵が、あまりに煩瑣なるに反動し、これを歷史に就て言へば、十四五世紀のフレスコ畵或は埃及希臘時代の線畵、又之を地理に就て言へば、今の進步せざる蠻民の間に有する描畵法に並行せんとするものにして、全然野蠻趣味の發現せるに外ならず。今や、歐米の諸雜誌に於て、切りに小品文（ストーリーレット）の歡迎せられ、モーパサンの悅ばるゝ如きも、實は文明の煩瑣なる長篇小說に飽きて、野蠻の簡易なる文學に歸らんとしてあるが故なり。此くして、野蠻趣味の勃興は其停止するところを知らざるべく、音樂にありても、文明の複音々樂は却けられ、野蠻樂の特徵たる單音々樂を迎へ、詩歌の形式の如き、日本の短歌或は俳句の如きもの、人類社會の最も嗜好歡迎するところとなり、又無禮講は最上の禮となりて、今日の歐米に行はるゝ辭禮は其の跡を絕つに至るべし、蓋し、是れ實に人情の自然にして又た本來なるものなればなり、誰か、今の道德を以て絕對の人道なりといふものぞ。道德の極致は是れ不道德にして、複雜の極致は是れ簡單、文明の極致は是れ野蠻なるを知らずや。

是に至りて思へば、誰か日本現時の音樂、繪畵、詩形を目して、進步せざるものなりといふものぞ、又日本の道德を稱して發達せざるものなりといふものぞ、今日世界の大勢が歸せんとして悶きつゝあるところは、實に日本現時の如き音樂と繪畵と詩形と道德とにあり。人よ、日本の墜落せりといふ道德を誇れ。又その進步せずといふ繪畵と音樂と詩形と衣服と家屋とを誇れ。能ふべくんば、代議政躰をも棄てよ。露國の專制主義が今や、まさに世界に喝采せられんとしつゝあるが如き、これ又實に政躰に關して人類が野蠻趣味の感興あるを證し得て餘りあるに非ずや。哲學の如き又野蠻時代に並行して、所謂實驗哲學なるもの廢れ、直覺哲學の勃興するに至る、實に期して待つべし、あゝ野蠻

なる哉、不道德なるかな、簡單なる哉、垣松進行博士曰く『簡單〳〵』世界の民衆は曰く『野蠻〳〵』。

紅葉歿後の宙外

紅葉の死は滿天下に悲まれたり。「われも、又之を悲むもの丶一人なり。されど、稍々天下と其趣を異にし、又其因るところを異にす。

世に敎育家なるものあり。されど、又その中に於て特に敎育行政家なるものあり、純然たる敎育家に非ずして、敎育行政のことに關はり、敎育者間の調和統一を計り、或は學制のために謀を立つ。既に敎育者の間に敎育行政家なるものあらば、文學者のうち豈に又文學行政家なるものなからんや。

紅葉は實に一代の文學行政家なりし。われの紅葉が死を悼むは、實に此る大文學行政家を失ひたればなり。世に日本の文學者ほど、神經過敏にして抱容力に乏しきもの少なし。互に排斥し互に衝突し、しかも、蕩然たる和氣の後進をして溫かならしむるものなし。此る冷酷なる間に立ちて、身を起し世に出づるは、夙に文藝志篤く、斯の道に秀でたるものなりと雖ども、誠に至難とするところなり。

然るに、紅葉なるものあり、今の純文學者に珍らしきまでの抱容力に富み、能く後進を誘掖して其技能を助長せしめ、天下に立脚地を得るに至らしめたり。また人に接するや、溫然春風の如きものありしと傳へらる。されば、この紅葉の引立によりて、其才名を斯界に知られ、又其手腕を磨きあげたるもの、鏡花風葉以下其數少なしとせじ。されど、此る抱容力に富める紅葉は、今や遂に逝けり。これより以後、後進有爲の文人が天下に推選せられ、其技能を發展するに至ること、漸く少なかるべし。豈に悲しからずや。

坪内逍遙先生なる古先進あり、近かく又後進を天下に紹介するに留意するところ多しと雖ども、稍々早稻田一門の者と近世學術の素養あるものとに限るが如し。未だ、百物語に觀らる丶如き怪しきエタイのわからぬ化物然たる千百の所謂文學者を操縱し、これを融和し統一し、又そのエタイの解らぬ化物の卵子を愛撫誘掖する如きは、忍ぶ能はざるところなり。

是に至れば、紅葉の歿後に及んで、假りに紅葉の坐に就き、文界の妖魔を繰縱し後進の來るものを溫めて蕾を花に開かしめ得るもの、それたゞ先進後藤宙外乎。宙外は今の多くの文學者に比して、抱容力に富むもの

なり。されど、其抱容力たるや、稍々人工により鍛練せるものにして天賦自然のものに非る如きは、甚だ惜むべしと雖ども、滔々たる世間の文士が此る德量の修養に力(つと)めだもせざる間に立ちて、これを力むるに熱實なる宙外は、實に文學行政家たる資格あるものなり。殊にその據るところの『新小說』の如き、文學行政家としての最大好機關ならずや。

されば、紅葉歿後に於ける今後の宙外に望む處は、益々その抱容と寬宏とを大にし、後進の誘掖指導に力め、その人工の鍛練より成れる抱容力と寬宏の德量とを、かの人工的なる濱離宮の庭園が時間の祝福によりて天然化せられたる如く、全く天然自然のものと寸毫の差違なきまでに發達せしめられんことなり。

『ハムレット』の大入

川上音二郎一座、本鄕座に『ハムレット』を興行し、所謂改良五ヶ條なるものを標榜す。滿都の士女恰も迷はされたるもの丶如く、油然としてこれに集まり、本鄕座の木戸口夜々市を成し、每夜木戸どめの盛況を呈す。其十四日目に於て、開幕前の演說を爲さんとするや、音次郎感激極まりて舞臺に泣く。川上の得意實に思ふべし。然れども、此くの如き大入の『ハムレット』によりて得られたるは、必ずしも、改良五ヶ條の實行によれるものに非ず、又素より世人の多くによりて誤信せらる丶如く、山本芳翠が背景書の麗美にもよらざるなり。川上夫妻以下藤澤佐藤の諸俳優の技藝に至りては、共に皆な醜劣賞するに足らず。これによりて滿都の士女を引きつけて雲集せしめんことの如きは、到底能はざるところなり。然るに、此くの如き大入を占めたる所因のものは何ぞや。勿論脚本『ハムレット』の力に非るなり。

高田實は非凡の伎倆を有す、秋月桂太郎又然なり。されど、高田秋月の一座にして、本鄕座に於ける川上一座と等しき脚本を用ひ、これと等しき背景書を仕掛けこれと等しく改良五ヶ條なるものを實行するも、到底川上一座の如き大入を占め得るものに非ず。蓋し、川上一座の大入は、その脚本の伎倆と背景書と改良五ヶ條との結果に非ずして、其れ以外に原因を存すればなり。何ぞや。

曰く、川上一座『ハムレット』の本鄕座に於ける成功は、川上夫妻が多年注げる心血(エナルヂー)に對する應報なり。又、川上音二郎が偉人物(グレートマン)

たるの致すところなり。天下、人間のエナルチー詳く言へば心血と根氣とに敵するものなく、又之に制せられざるもの無し。音二郎は俳優たる技藝に於ては、天下稀に觀るほど拙劣なれども、其俳優たる根氣と其注ぎ出すエナルチー即ち心血の多量なるとに於ては、今の世多く其類比を見ず。音二郎や艱難の襲ひ來るものある毎に、勇氣益々百倍し、これを餘人ならしめば、到底屈せざるべからざる時に於て、意氣愈軒昂なり。この意氣とこの多量の心血とによりて、或は前の川上座を建て、或は衆議院議員の當選を爭ひ、或は妻と共に端艇により横濱より神戸に航し、或は米國より歐大陸に渡り、或は本郷座の出方と茶屋とより、一千圓の保證金を捲き上ぐ。是れ、川上が俳優の伎倆に於て最も拙劣なるものなれども、一のマンとして偉人物たるを證するものならずや。諺に曰く、『大いものには捲かれろ』と。此く如くにして滿都の士女は『ハムレット』興行を唯一種のオッケージョンとし、この偉大なる川上の根氣と勢力とに捲き込まれ吸ひつけられ、殆んど爭ふが如くにして本郷座の木戸口に群がれるなり。エネルギーの不滅は物理界の定則なれども、人間の注げる心血も又不滅にして、音二郎の如き應報あるに至るものなり。音二郎が感激極まりて泣けるは、天の音二郎を棄てざるに泣けるものなるべく、世の成功にあせるもの又よろしく偉人川上音二郎に就て學ぶところあるべきなり。

藝者の居住區域

滿天下の馬鹿者共が、味噌と糞とを混同せんとするの愚、あゝ遂に及ぶべからず。味噌は糞と混同することによりて糞臭くなるべく、これによりて折角の淸きものをして汚れたるものたらしむ。世の藝者と娼妓とを混同同一視するものは、これ、實に味噌と糞とを同一視するものなり。近く、藝者の居住區域を或る一定の區畫内に限らんとする說を爲すもの丶如き、實にこの種の盲徒にして、藝者の神聖なる職業に對し、侮辱これより大なるは無し。この種の徒は、常に藝者を目するに娼妓と同一なるを以てするが如し。されど娼妓は娼妓なり、藝者は藝者なり。娼妓は婬を賣るものなり、藝者は藝を賣るものなり。藝者にして若し眞に淫を賣るものならば、よろしく之に娼妓の鑑札を與へ以て廓内に追ひ込み檢黴を施すべきなり。何を苦んでか、特に藝者の爲に一區畫を作る要あらんや。徒に人の陰事を

想像して、これに公けの制裁を加へんとする如きは、是れ實に大義名分を無視するの甚しきものなり。これ藝者をして、愈々墮落せしめ、日本の麗美なる國粹を凋落せしむることとなり。われは、娼妓の如きをも、その居住所を一廓内に限らず、これを良(?)民の間に伍せしめて、良(?)民と等しき自由を與えんことを切望するものなり。賣婬の果して惡事なるや否や、これ既に研究問題なり。曖昧なるは總て輕きによりて罰すること、これ刑の精神なりといふに非ずや。

▲稿餘錄▼

●近來出版せらるゝ書籍の製本、漸く贅澤ならんとする傾向あり。されど一時値上げに値上げを重ねし理髮料の、近頃に至りて急に下落の傾向甚しくなりし如く、かく新刊書籍の製本著しく贅澤になりし結果は、これが反動として著るしく粗惡なる製本の新刊書現はれ來りて、驚くべきまでの安價を以て發賣せらるゝに至らんこと必定なり。

●桂月、今の文士批評家に科學の素養なきを歎す。然り、今の批評家なといふものゝ科學の素養なきは全くの事實にして、少しく科學的智識を基礎として立論せる論議に對しては、全く注意を拂はず。蓋し、殆んどこれを解する能力なければなり。かのエマルソン將たゲーテなどの面白く讀まるゝ實は全く科學的智識を配合する故なり。近頃に於て邦人の論者にして、科學的智識の配合に力するもの、先づ以て黑岩涙香と伊藤銀月と位いのものなり。かくの如く、一般の文士批評家に科學的智識なきは、是までの私立學校中、たゞ唯一の京都同志社以外、一として科學に重きを置けるもの無かりし結果なり。慶應義塾といひ早稻田專門學校といひ、近來までは數學をさへ其必須學科となさざりしに非ずや。

●『帝國文學』その十一月の號に於て、切りに其青年雜誌と目せらるゝものあるが故に、辯解大に力む。然れども、決して御心配めさるに及ばず。蓋し、『帝國文學』は、一見青年雜誌に非ること明瞭なればなり。即ち、青年雜誌には片假名少なけれども、『帝國文學』には、片假名頗る多し。

●藤澤の『ハムレット』役は、甚だ以て、拙の拙なるものなれども、これも止むなし。蓋し、藤澤は自ら煩悶苦絕して、死せんか生きんか「To be or not be」との境涯を實驗せしことなかるべければなり。かのハムレットの如き複雜なる心意狀態は、到底一たびハムレットと等しき、悲運に遭遇せしものに非ずんば、到底巧に演じ得らるべきものに非ず。たゞ、瘋癲狂院の病室を窺ひし位にては會得せらるべくもあらじ。

●貞奴の『オフエリヤ』役も、世間の噂ほどなる上出來に非ず。その狂亂の狀の如き甚だ以て務らぬところ多し。これを畢竟其身の女たる故なり。若し、假りに此の役を一座の兒鶴にフリたらんには、今少しく面白く見られたるべし。又貞奴は舞臺面に於て取るべき位置に不注意なる觀あり。可成、滿場の觀客に我が身の背面を示さゞる樣注意すべきことなり。

●『ハムレット』全劇中にて最上の出來榮は、福井の『ポロニアス』役たり。これは、其役を歌舞伎劇化したるだけ、それだけ上出來なるを得たりしものにて、之を所謂正劇眼よりすれば、稍々外道に陷れるものなるべし。又一座中にて最も有望なるは、藤川にて現に藤澤以上なり、又川上の『クロウデ井ヤス』役に至りては、實に評外なり。されど、その十四日目の演說に流せし涙は貴重なる涙なり。その川上の涙たる故を以て笑ふ勿れ、

●さがのや主人、十一月の『太陽』に『黒龍江畔のニコライスク』なる一文を出せり。さきには、丸善書店に入れる内田魯庵あり、又大江敬香が『實業界』の主筆となれるあり。今また嵯峨の屋主人のこの文に接す正岡藝陽の鹿爪らしく經濟論を喋々し、有美の煙草屋を開く、又宜なる哉、兎角文士も專門ては食へぬ世の中なり。

●大塚楠緒子が同じく十一月の『太陽』に出したる短篇新躰詩『夜』は、語調美はしく、しかも、人心の苦悶を歎び出して痛絶を極めたるものなり、その短きが故に又其作者が人妻なるが故に、棄つるが如きこと勿れ。

●或人曰く、由來秋田の地山師を出す。即ち上は平田篤胤より下大久保鐵作に至るまで、比々然らざるは無しと。それ或は然らんか。曾て、第二の『新著月刊』を出し雄渾の文を以て當世の文士を評隲せし山方秀峯子が、近かく十一月の『新小說』に出せる『あきは物語』によりて、公にせし研究の結果によれば、安政の頃早く既に洋畫の術に通じて、驚くべき新畫法論を稱道せしものは、秋田の藩主佐竹義敦なりしと。この殿も山師なりしか。

●我當あらたに歌舞伎座に入りて、大坂臭を撮り撒くこと、實に夥し。これ、たゞ舞臺面のみには非るなり。見物までが何處となく大坂臭くなり行く傾きありて、場内一般の觀客が、觀劇に當りて敬意と質實とを欠くるに至りたること、實に驚くまでにて、何となく亂騷の傾きあり締りなきに及べり。是れ團十郎なる壓力の取り去られたるに因る乎、將た我當の大坂臭輸入によろ乎。何れにしても、目出度きことに非ず。

●吉田國五郎、本鄉座に人形芝居を興行して失敗す。是れ江戶人の趣味に適せざるものなり。紋十郎の人形か喝采を博せるも、大坂下りといふためにて、又明年、更に重ねて來るが如きことあらば、到底今年昨年に於ける如き成効を見る能はざるべく、素より東京に居すはりとならば、過日の國五郎ほどの入だも見る能はざるに至るべし。

●『審美綱領』以來、梗概の叙述に得意なる森鷗外先生は、近かく『人種哲學梗概』なるものを公にせられたが、先生自らの申さるゝ如く、ゴヒノオなる人のこの人種論に果して歐洲近時の流行となるだけの價値あるものなるや否や、實に合點し難いところである。所論の梗概中の梗概は、離婚殊に優等人種と劣等人種との婚姻は、前者の退化を來たすといふにあるものらしいが、これは信じられない。其の證據は接木によりて明白である。今假りに李の臺に林檎を接ぐ、この接木によりて林檎は榮へるが、李にヘピコラるゝ様なことは無いのである。林檎は自然其儘て接木を見合せ居れば、寧ろ良き果を結ばぬのである。よりて、地球上の人種は今こそ多くに分れて居り、かく分れて居る間に各々一角に秀てゝ其特質を發達さしてるが、追々離婚によりて、渾然たる最多角質の新人種を作ることになるだらうと思ふ。扨鷗外先生のこの梗概を讀む間に於て知られたるは、ヲクネルなる人の近世思想界に於ける一大事件なりといふことてある。又歐洲て近頃流行になる程の大思想大著述を、四號活字六十頁にコンデンスせられた先生の消化力の强サは確に明かなことてある。

●小杉天外先生が『戀風戀風』前篇の細評は次號に於てすべし。

（十一月廿六日稿了）

尻馬主義を排す

（文士劇について）　久良岐

人情の輕薄に流がれたことは、昔々の其昔爺と婆々と

あつたとサの元始時代に、川上からドンブラ平と、桃の實の流がれた時より流がれ出したは云ふまでもなくいつの隨筆を見ても、人情の浮海に流がるゝを嘆ぜざるは無けれど、昔は昔で何所となく應揚な區域も廣く、同じセチ辛くとも、雞を營めても鼓腹撃壌の民多かりしが、廿世紀の今日では輕海の風天下を吹まくり、隅から隅まで行屆いて、物質の勢力に泥るゝことと無ければ、從つて、坐なり、おはむき、其場丈のウソは普通の挨拶と變じ、責任を人に背負はせるとなぞは、屁の屁とも思はざる進歩に、僞善結構、虚榮熱心の大流行、人がやつて當たれば、スグと猿眞似の、寄つてたかつて利益分割、叉手々々危險の世なるかも、昔しは人が釣してゐれば、ソコへ網を打込まぬ信義は有してゐたものなれど、今時の沒曉漢何の遠慮もあらされば、到底弱い者は强い者、短い者は長い者に卷かれて、ヒリッピンが亞米利加の屬國となり、滿州が露國の勢力範圍に繰込まれんとする次第なり、

さらば、生存競爭の活戰場に、一ツ勇氣を皷して、大に自我を發揮し新生面でも劈けばよけれど、そんな手合は一匹も見當らず、人がやッた跡へ／＼と出シヤバツて、人の犢鼻褌で角力を取らんとする、ケチ臭い野郎斗、滔々として天下是れなりは、チト情け無き世の有様ウヌは懐ろ手して人に働かして、其甘い汁丈吸はうといふ寄生虫根性の、繁殖することそうたてけれ。

尻馬主義も露國程。ズウ／＼しく、フテ／＼しく、轉んでも只は起きず、火事場泥棒のソレに似て、騷動の持上がると同時に、氣の付かぬ片隅を、ソロリ／＼と占領し、何喰はぬ顏して、タクシ込む程の勇氣あれば格別、ソレ程の尻馬にも成らず、ツマリは人がやつて景氣好ければ、お餘り頂戴と出掛けんと云ふ、キタナイ了見、利益は自分しめて、不利益を人にナスリ付けんとする、隨分と虫のいゝ譯柄にて、露國はサスが貧乏でも、何億万の借財しても、東清鐵道に金を繼こむ丈膽力あり、從つて其權利も主張さるゝなれど、これが今日吾國に流行する尻馬主義で行けば、露國の鐵道を半口乘ッ取らんとするが如く、ソウは烏賊の睾丸は天明頃の洒落とかや。

かゝる海ツペラの主義が流行し出したのは、つら／＼惟みずとも、弱を扶け强きを挫く江戸ッ子の敗北より芋堀侍肥田子黨の跋扈となり、サシモの花の都も土臭い風斗吹まくつた揚句が、好色宰相の全盛となり、責任を逭がれるをもて唯一の處世法と心得て、お手本を

示めされてから、其宗旨の信徒グッと繁殖して、先づ貧乏政治家から、腐敗し出し、次が實業家教育家、次いて文士といふ連中までに波及したる次第なり。

筆を取つては、王侯をも賤しとすべき、文士ともあるべき者の、人の名聲を利用しやうの、人の尻馬に乘らん抔、サモしき根性見るも癪の種ならぬはなし、近き例を取りて申さば、藝苑革新の氣運に乘じ、大分文士劇とか新々劇とか名乘ッて出たき野心ある手合多きやうなれど、君ヤレ貴樣ヤレにて、大に文士劇を起せなどお互にケシ掛け合ひ、虛名は欲しいが、叉手口も可愛いとは、叉手々々煮え切らぬ次第にして、余が川柳に

　　文士劇教員兼俳優が願ひなり

と申したるも、確かに彼等の弱腰兵と射て取つたりと信ずるなり、學問させては文士に及ぶ壯士役者一人もあるまじけれど、何しろ向は本氣になッて、タトヒ拙くも無學でも、多年の經驗、川上、高田と目ざゝれるまでには、馬の足ともなり、御注進とも取扱はれ、腹の減ッたも一度や二度にあらず、どうしてノッケから、新々俳優樣と歡迎され、王室附屬のオペラ座で、年俸六千圓の一万圓のと、夢に見たやうな甘い話には中々まゐらぬが、天道樣のお思召、天の將さに大任を斯人に降さんとするや位は、千年も昔に孟子のおとッさんが、大きな印形ついて證人に立たせられてござる、川上其技は拙なりとも、遠州洋を乘切り、外國三界へウロックこと前後三回、どうして今時の文士連が、劇は沙翁にガジルと稱し、シエキスピア全集を二圓五十錢出して、買ッて見たが、トテも六ッケしくて、十頁は讀かねるので、空しく書棚に塵を頂くソバからして川上正劇派など到底語るに足らぬ、我れ取ッ代るべしとの大氣焰、口斗エラクとも、演劇は口では出來ず筆で芝居が出來るなら、誰れ高い木戸錢拂ふ間抜も世にはあらざるべし。

ヤルならヤルで、一身を犧牲にし、天下の笑を屁と思はず、ウンと突ッ張る確信なくして、雜誌の上のカラ元氣、お仲間に太皷を叩かせても、イザ舞臺に上ッて大向から、拙イ引こめの一言でも喰ッたが最後、顏を赤くしてトチッて、カスを喰ふやうな了見方なら最初より先づ消極主義がよさそうなり。

天下の爲めに大難の端を發し、己れ是れを收めずして、他人にナスリつけんとする大ダワケと、罷錯てすら蘇子瞻に一本喰ッたは、文章軌範の一冊でもカジ

ッた人は、誰れも承知、惟仁人君子豪傑之士、爲能出身爲天下犯大難以求成大功、此固非勉强朞月之間、而苟以求名之所能也と、コンナ事は、古人は正直、眞理に二樣なき以上は、尻馬主義の一時的成功は、到底最終の勝利にあらずと、尻馬主義の大嫌ひな久良岐入道、チヨッと皮肉を申す。

▲英國郵政の起原

一千四百八十一年、エドワード四世の時代、初めて政府より郵便局長を各地に任命し、馬背にて貨物をのみ運搬せしめたり、書信の取次は其後一千六百三十五年に、チヤーレス一世の時、イングランドとスコットランドの間に、やはり馬にて書面の取次をなせり、然れども此事永續せずして止みたり、これを英國郵政の太古史とす。



雜評

今物語

三遊

(一) 遊民

◎今日日本に、一番多かるべしと思はるゝものを、先づ言へよと問ふ人あらば、われは遊民なりと答へんとす。ゆるせ神田の兄哥(あにい)よ、暫らく其拳骨を收めて、おちついて我が言ふ所を聽け、曰く、遊民とは公等袁彥道に分入るの人のみにはあらず。

◉利子て飯食ふ奴、花引いて飯食ふ奴を、人は紳士と呼べるもあれど、お蠶ぐるみが紳士でなければ、自用車が紳士でもなし。凡そ心得違ひは、此邊より起り易ければ、如何なる字書にも、紳士のミーニング丈は、

間違へぬ樣に書入れて貰ひたし。

◉さて世俗の謂ふなる紳士の仲間には、余が謂ふなる遊民多し。而して彼等は曰く、公共の爲なり、慈善の爲なり、敬神の爲なり、崇佛の爲なりと。斯る殊勝なる名の下に、他の懷ろの金を掠むるもの蓋し尠しとせず。

◉何を不經濟なりとて、不生産者の全然消費的なるほど不經濟なるはあらじ、准乞食の屑拾ひも、其爲す所は生産せんとするに在り、咄、何者の紳士ぞ、汗水垂らすものゝ金を捲上げて、不生産的に太らんとはする。

◉公共の爲と云ふを、口癖にする男あり。いかばかり公共の爲にせしかと問へば、いつとても走り廻りて、たゞ人の涙錢を乞集め、云はゞ體のよき乞食をなし。さて己れは更に我腹をいためず、人の衣を着、人の物を食ひて、容體ばかりはゑらさうに構へ居るのみ、かゝる者の、本職は何ぞと問へば、之ぞと云ふ事もなき故、しばらく雜の部に入る可きも、實は是れ一種の遊民なり。

◉かゝる者の所爲を『結構て厶ります』などと乘せ掛けたが最期、當人いよ〳〵得意になりて、我なくば公共の事を談る可からずとなし、一町一村を我有にして身勝手に切廻さんとす。さて其内實を聞けば、實は樣子のよき羽織ゴロを極込み、體よく世渡りをなさんとするなり。

◉かゝる不心得なるもの、往々市町より郡村より飛出すが故に、われは商人にして算盤を彈かず、農夫にして鋤鍬を把らず、唯ウツ〳〵として暮せる、胡倫なる連中を喜はず。古人云々。無事之人好生事、ほんとに其通りなり。

◉今の日本に、一番多い人は何ぞと問へば、懷ろ手をして、忙しく働けるものゝ上前はねる人なり、此人達は、軀の閑なると同時に口も閑なり、故に理屈多し、故に小言多し、故に苦情多し、故に議員などになりたがるなり。

◉今の大小諸種の會議を看よ。その多くは、先づ小言にて持切り居るなり。年中唯ブツ〳〵言ひ居りて、大いなる不平を鳴らし得ず。大いなる革新を成し遂げ得ず。小不平に對する小刀細工を以てして、一時を彌縫せるのみにては、何の時か大いに國勢を振張するを得べき。常に小言多き家の、唯それにのみ草臥れ、家運の次第に衰へ行くを看て宜しく自から警しむべきな

り。

◉小言の國家に害ある、それ斯の如し。而して沒分曉漢は之を曉らず、この小言を好みて、漫に舌を皷し、以て一種の遊民たるを甘んず。現今多數の政客は、盖し斯類の徒のみ。其死生存亡、豈に國家民人の利害得喪と相關する所あらんや。

◉しかも之が一面には紳士、一面には政客として、土百姓素町人を賤めるも、其實は、一日紳士政客なくして濟むべし。一日土百姓素町人なくては濟むべからず。

◉曰く大小の會議費、曰く神社佛閣の無制限なる寄附曰く募集、曰く何、曰く何、凡そ是等一種の遊民を養へるものに就て、嚴密なる調査を遂げよ。而して勞働を卑しみ、怠惰を好める遊民其者は、如何なる美名の下に潛み、如何なる善行の裏に伏して、其寄生蟲たる生活を遂げつゝあるかを檢し來れよ。是れ少くとも、今日の日本に於て、最大喫緊の一なり。

◉この最大喫緊事の外にして、疣上疣を生ぜしむるが如き愚爲を敢てし、彌々事を繁くし、益々累を多くし以て得たりとなせるは、日本今日の通弊、才子尤も斯病を患ふるが如し、われは博徒よりも、寧ろ他の多くの遊民に付て、大いに社會的若くは法律的制裁を加ふるの必要あるを思ふ者なり。

新へなづち

久良岐

外つ國は八十綱掛けて引寄せんと詔らしゝ御言思へば畏こし

八十國を一ツに統ぶる日の本の大和御國の行末おもほゆ

久方の天の依任の昔おもへ今はたいかに大日本國

罪の世の國のこと〱救ひあげて一ツに統ぶる國は此國

事新へなつちの久良岐大人に呈す

後學 晉 佛

煑えきらぬ田樂なせる珍派劇さこそこつてり味噌をつけゝめ

海月なす久良伎の朝臣が珍派劇たゞよふ〱とほめておかまし

へなつちのへな〱歌にへな〱のへな〱文士へな〱になる

ほろ〳〵とこぼす文士の空涙拾ふて〻だの泣澤少女

鬼神はとまれかくまれヌタ讀みの食へぬうらみにひたなきに泣く

文かきてかつ〳〵食ふ其人をシミたれ人と世にはいふなり

ニーチエ何ゴルキイ何となまよみのやッかひ者が請賣をする

犬ころのたはわざすなる珍々派人まねならぬ犬まねぞこれ

雜誌國の一夜

文明堂の小僧

所は本鄕區本鄕四丁目勸工場の前、文明堂といふ御馴染の雜誌屋の店頭『太陽』の廣告にある吉沼の時計がボン〳〵と二時を打つ音に一冊賣れ殘りの『中央公論』が眼を覺し身躰を反らして欠伸をしながら「俺の仲間は發行當日から賣切れて了つて俺だけが居殘りとは心細いね、明日は誰の机の上に買はれることやら、やッ彼處に妙なものが起きて居るぞ、君、オイ、君は何故寢ないのかね、此聲を聽いて振返つたは先程より頻りに首をひねつて居る被布姿の青年「オホン、エヘン、拙を呼び玉ふは尊公か、拙は『卯杖』と申してな、あのそれ一前生『秋の聲』といつた時分から御別懇な俳偕師でげす、今夕な、『新小說』の月の表紙が餘りに見事なので一句沈吟致し居る所で」、「フン、俳偕師か、それは感心だ、併し君、夜間寢らないのは可けない、君も矢張三大國病の一つで山根君や高木君から小言を頂戴する方だね」「ナニ、小言でげすッて、そんな事は歲時記にも五百題にも見えやせん」、「ハヽヽヽ、君は國病の意味が解らないと見えるな、時に君、俳句は面白いかね、俳句や新躰詩は金にならぬから商賣換をしろと僕の所の青柳といふ大先生が論じて居たよ」、と得意氣に有美先生を振り廻す、すると「さうぢやないやい、咀ひの子」と朗讀調の早聲で遮りながら起き上つた『明星』、「小生の詩は自我の發揮です、ローマンチシズムです、舊思想の俳句と同視されては憾です、又、新躰詩で飯が食えないとは無禮です、御覽なさい、イプセンを、御覽なさい、ニヰチエを、トルストヰーを、モーパッサンを、マーテルリングを、ゾラを、バイロンを、ツルゲネフを、ゴルキーを、それから、エーと、あのゴロ……、オイ細君、本鄕座でやつたのは何とかいつたな、ア、忘れた」、「ゴーゴルとかいふのは、貴

方、さう誰でも並べ立てゝは神秘の扉の内幕がわかるわ」「並べろ〳〵、わーい〳〵」、と遙か彼方で囃すものがある、一同驚いて誰だと見ると『新聲』が寢ながらいつて居るので『明星』はギヨツとして話を中止する、此時、眼のギヨロリとした顔相の好くない『成功』が目を覺し「今の金といふ聲で眼を覺して見たら何の事だ、大嫌いな貧乏神の文學の話さ、あゝ金が欲しいな、夢にでも見やうか」と獨語して間もなく寢入る、此の間暫く靜穩、一同皆夢に入つて鼾の音ゴオー〳〵、切歯の音キー〳〵、「遼東半島」、「強硬」、「早くやれ」、「開戰」などゝいふ寢言が聞える、折柄、突然、「あれー」といふ聲、續いてバツタリといふ音が、「何だ」、「何です」、「恐いわ」、「恐いよ」と一同眼を覺し打寄つて調べて見ると『女學世界』が蹴つて泣て居る側に一部、綴糸が切れて氣絶して居るものがある、一同介抱して『日本人』が活を入れ呼び覺して見ると『文藝界』、『警察協會雜誌』が一番前へ出て「クヤ〳〵、貴様は何ちふもんぢや、アーン、又、何ふしたんぢや、クヤ、御婦人、さう泣いて計り居つちや可かん、事實を陳述してくれさい」、「は、はい、わ……妾が伏つて居ると誰か足を踏みまして……は、はい、それで覺えず聲を立てまして、は……はい、洵に相濟み……」、「クヤ、御婦人の申す事に相違ないか」、「はい」、「ぢや如何なる理由を以て踏んだぢや」、「彼方へ行かうと存じまして、ツイ」、「何處ぢや」、「あの鬧珍の處へ」、「アーン、クヤ、鬧珍、此者は知らンか」、「一向に存じません」、「クヤ、存ぜぬと申すぞ、存ぜぬ所へ何で行かうと致した、アーン、事實を具陳せんば法律に照すぞ」、「はい、イヤ、僞りは申しませぬ、實は其、エー何てす、美人廻國を致すので……………」、「ハ、、、、美人廻國ちふか、アーン、過刻より一什の様子を聞き居たる『外交時報』「イヤ、君露探かも知れんぜ」「何だ露探」、「露探やつつけべえ」、「なぐれ」、「クヤ〳〵さういふやうな亂暴を實行しては可かん、長田ちふと別人ぢやぞ」、と切りに制する折柄、「あら長田さんだつて」、と『文藝倶樂部』が顔を出す、

（つゞく）

▲世界第一の歴史的椅子

龍動のブリチツシユ、ミユジユムに埃及王ハタス女后の用ひし椅子有り、基督の生れしより千六百年前にて、モゼスよりも二十九年前に作りしもの、其脚には金銀を鏤め、世界第珍奇の椅子として有名なり。



讀者之文壇

美術學校革新論（上）

蓮華草堂主

現今我邦藝術界の狀態は外觀上實に盛んなものである。春秋兩季の各種展覽會共進會、小結合の研究會、個人の作品展觀等、見來れば其盛況實に驚くべき勢である。然れども今日は既に實質研究の時代で、徒らに外觀の旺盛に滿足して一時の安を偸んでは居られぬ。建築に彫塑に繪畫に其他一般工藝に、宜しく精神的實質的研究を遂げて、眞實の發達を期圖せねば、到底圓滿なる好果は得られぬ。而かも其圓滿の好果を收むるには、勢ひ人智開發の淵源たる敎育の力に待たねばならぬ。

翻て、我藝術敎育の內容を觀察するに、美術學校は我が帝都に只一校あるばかり、高等工藝學校は近く京都に設けられたが、創立日尙淺く未だ何れとも是非の判斷は下されぬ。工藝學校は京都の市立、石川、富山、香川等の縣立五六に餘るが、生徒成蹟品の五回博覽會敎育館に出陳されたるに依て見ると、まだ／＼自然の研究は足らず、科學の智識も充分でなく、其幼稚で不整不備なこと、平生授業の程も思ひやられる。尙此外に地方の特產に應じて陶磁、染織、髹漆等の實業學校はあるが、概して縣立の工藝學校は尋常中學の程度で、他は高等學校相當である。實に此等が今日の所謂藝術學校といふべきもので、我邦全般の藝術敎育は現在實に此等數校の上に委ねられてあるので、其責任や實に大なりと謂ふべきである。されど此等數校によりて果して藝術の開發が出來やうか。藝術進步の根基は果して此等によりて確立するであろうか。其校既往の歷史は確に其不可能を證明して居る。

余輩は多くの藝術學校の既往の歷史は詳に知らぬ。從て其內情にも通ぜぬ。併し東京美術學校に就て觀察の筆を下さば、他は深く架說するにも及ぶまい。何故か

といへば、此校は他の工藝學校などに比較して、最も古参て且上位に在るばかりでなく、現代の名工鉅匠が親しく教授の任に當て居る處であれば、嚴正の批判は宜しく先づ此校を中堅として、周到鎮密に裁斷するが順序であろうと思ふ。

東京美術學校、明治廿一年の創立以來既に十有六年、この長日月の間、隨分多數の卒業生を出したろうが、社會に幾何の功果を與へたであろうか、國民に幾何の藝術思想を皷吹したてあろうか。余輩は是より其組織の上より、其教科の點より、在學生の內容、卒業生の現狀等に及ぼし、一々分拆的批判を試みて、其革新の已むべからざるを說破しやう。

先づ其教育を見るに、同校は美術及工藝に從事する專門の技術家を養成するを本旨とし、併せて圖書教員に適する學科を教授すとある。さて其分科は、彫塑、繪畫、圖案の美術に加ふるに（建築は創立當時の校則に當分之を缺くと記し、爾後今日に至るも尙之を缺いて居る。）彫金、鍛金、鑄金、漆工の工藝を以てす。名は美術學校とはいふが、實に純然たる美術工藝學校である。美術學校中に工藝科を併置するは、其創立當時に於ては或は時宜に適するの設備であつたかも知れぬ。併し今日に於ても尙其必要を感ずるであろうか。美術を主として教育すると、工藝を主とするとは、其間自ら徑庭の存せねばならぬ筈、若し之を混淆教育して更らに其不都合を感ぜぬといふものあらば、これ根本的美術と工藝との差別を辨まへぬものといはねばならぬ。更に又學校設備の點より徒らに財政上の節約を主として併置するとせば、これ重きを教育に置かずして、專ら財政に留意した結果で、財政に窮すれば、味噌も糞も混同するといふが如きは、余輩の斷じて採らざる所、斯の如くんば初より設備せざるのまされるに如かずと思ふ。

次に、其教科程度を見る。教ゆる所は技術の實習を專一として、美術史、美術解剖、美學、考古學、外國語等で、工藝には又應用化學、金工史、漆工史、工藝資料等、各學科に應じて課せられてある。而して其收容すべき學生は、入學試驗課目に依るも、尋常中學卒業生にして技術の素養あるものか、然らずんば之と同等の技藝學校卒業生てなければ入學の出來ぬ規程である。然るに從前の學生及卒業生を撿べれば、其多くは滿足に普通學すら修めて居らぬものがある。まして科學上の智識、歐文の素養あるものといはば、實に寥々

晨星の如してある。これ畢竟ずるに其創立當時に於て、入學者吸收の必要より、試驗は只重きを技術に置いて學科を規程よりは極めて寛大にしたがため、自然畫學、彫刻家、又は工藝家の許に居て專ら技術の練習をしたものか、さもなくば平生技術の嗜好あるもの、、生活の資を得やうとして此校に集りて本科生又は撰科生となつたらしい。而かも因襲の久しき此風は容易に除却せず、漸く兩三年前より尋中卒業生にして入學希望のものは假入學として豫備の課程に於て技術を稽古せしめ、試驗の上本科に編入するの特典を設けたが、其以前は勿論、今日の在學生中にも尙科學の一班をも知らぬものが隨分多い。從て彼等の校に在る、亦實技の練習を重じて、學科の講義にはあまり身を傾けず、偶ま聽講に出るものあるも、甚しきは筆記の文字から敎へねばならぬ無丁字漢が居るには困るとは、余輩が常々其講師より聞かされた苦情である。此等の學生は無論美學を聽いても、美術史を釋かれても、之を翫酌するの腦力もなく、又趣味も感じまいが、さて普通の科學も知らぬとあつては、どうして藝術家となれやうか。いふまでもなく藝術は科學を離れて獨立の出來るものではない。古名匠の粉本や、畫稿を摸寫し臨摸して畫家の能事終れりと思ふて居る時代ならば兎も角、苟くも自個の作品を描きもし刻まうとするならば、科學を離れてどうして藝術の研究が出來やうか。然るに彼等はもと／＼其等差なくして入學し、校に在て又之を學ぶの道なしとせば、如何にして之を研究し、如何にして其思想を養成するであらうか。万有は科學である、自然の研究は科學の研究である。何も故らに學科に於て敎へる必要はないといふかも知れぬが、併し余輩は未だ今日の藝術敎育に於ては、斯の如く洪量に過すことは出來ぬのである。

更に卒業生の現狀は如何。同校一覽を繙けば一目瞭然たりだが、去る明治廿六年第一回の卒業生を出せし以來、其能く畫家として彫塑家として、其他の工藝家として、嚴然社會に獨立自活して居る者は、果して幾人かある。同校は果して其敎育の本旨に在る如く、專門の技術家として獨立活步の出來得るものを養成したであらうか。余輩の知る所を以てすれば、日本畫科卒業生の如き、其十中の八九は皆中學師範高等女學校の圖畫敎員である。成程此校沿革の上から見れば、明治十八年文部省に圖畫敎育取調に關する掛員を設け、尋て此圖畫取調掛を以て直に東京美術學校を組織し、尙前

に述べた如く、其教師にも圖畫教員に適する學科をも併せて教授すとあるからは、日本畫卒業生の多くが圖畫教員となるは、或は自然の數かは知らぬが、それでは專門の技術家を養成するといふ同校教育の本旨に背きはすまゐか。圖畫教員適應の學科を教授するは、是れ客てある從てある。主たる專門の技術家を養成する能はずして、客たる圖畫教員を多く出すは、主客顚倒の最も甚しきもの、斯の如くんば宜しく美術學校の名稱を撤去して、普通教育圖畫教員養成所と改むるが相當なのてある。

以上は日本畫科卒業生に就て概論したのてあるが、他學科卒業生も亦之と異ろう筈はないので、彫金、鑄金、漆工科生も亦大低地方の工藝學校教員か又は諸官省に職を奉じて居る。其自營自活と標榜せるは、立派に社會に獨立自活して居るといふのではなく、學校又は諸官省に相應の口を求めたいにも、斯かる優等生に奪はれて、不得已自營自活するといふ有樣で、勿論中には幾分の取除はあるが、多くは之れに洩れぬのである。殊に塑彫科卒業生の如き、或は鑄物師の下職人となり或は輸出金屬品の原型作者となり、或は圖畫教育用石膏型ぬきとなつて、辛くも露命を繋げる者が、在校中俊才の聞えあつたものにも隨分あるのである。

要するに美術學校卒業生は、其教育の本旨に示す如く、專門の技術家として毅然社會に獨立活歩して居る者は實に僅少なのである。甚しきは折角五ケ年の歳月を費して修め得たる技術を放擲し去つて顧みず、他に其職を求めて得々たるものもある。これ實に同校卒業生の現狀てある。

對清政策の缺點に就て

天津　日東子

十月發兌の中央公論「我對清政策の三大缺點」と題する社説に就ていさゝか愚見を披陳仕度候

（第一）、黄金と鐵艦に就て　成る程論者の掲げられたる三項は決して否認する次第には無之候得共唯だ一部若くは間接に影響を及ぼしたる缺點にはあらざるかと被存候、之れが直接に一大原因を爲したるものとは到底首肯する能はざる所に候、而して論者は「日本は國が幼き丈け朝野共に稚氣に富み北京に於ける外交を初め我對清政策は列國に比して老熟を缺き着々人後に落つるの觀有り」とあるは實に論者の言の如しと堅く

信じて疑はざる所に御座候、然れども露國が清廷に對して爲したる政策を單に黄金の利用にのみ歸して、日本が爰に出でざりしは我對淸政策の一大缺點とせられたるは餘りに酷評にはあらざるか、何となれば露國以外の他列國も矢張り露國の如く黄金政略を試用せざるのみならず、露國の黄金を以て餌食と爲せしも必竟する所其人を得なければ駄目かと被存候、また露國の黄金政略は韓廷に對しても同樣に施したることは夙に世人の熟知する所にして、我國とても一ヶ年僅かに拾萬足らずの黄金を使用するに於ては決して露國にも劣らずば又從來の如き不覺も取らざることとは朝野の志士は共に承知せる所に候得共、之を實行し得ざるは如何なる理由の存することかと穿鑿するまでもなく、第一は我國と露國とは國體を異にすることと、第二は我國民全體が未だ其程度に進み居らぬ事、第三は露外交官の手腕を異にする事等が主たる原因に有之候、要するに金なく人物なして黄金政略は望んでも出來なかつた相談かと被存候、日本の官吏は漸く骨なし議員の買收位が關の山かと存候。

軍艦の使用に就ても先き立つものは金にして、且つ未だ國民が海外に勇飛して居らぬにも拘はらず軍艦ばかり游泳を試むるも何の役にも立たず丸で的なくして矢を放つと一班かと被存候、軍艦は如何に平時の裝飾物とはいへ、無暗に他國に誇視しまた他國人を嚇すの用に供するのみの道具には無之かと信じられ候、先づ第一に國民が海外に向つて大々的勇飛を試みざる間は平時に於ける軍艦の本務を完ふすることが尠かるべきものと案じられ申候。

(第二)、清國内地に於ける「浪人の害」を疾呼せられ候得共、果して如何なる加害を爲したるものにや一向了解致さず候、假りに若し有りとするも之を東亞同文會の手を煩はさんなど以ての外のことと存候、千百の者ありと雖ども領事の手に於て相當の處分を爲し得る事は眞に易々たることにて決して心配せらるゝ程の事は無之と存候、一葦帶水である同文同種である日清兩國の間に於て偶々所謂浪人と稱せらるゝ輩に先き驅けらるゝに至つては、吾は却て國民の不甲斐なきことを證することかと存候、清國内地には幾多歐米の宣教師在りて屡々清國に對して重大の弊害を與へられたることは充分御承知の事と存候、而して彼等は絶へず本國の利益を計る先導者に候はずや、予は是等を見てせめて日本の宗教者にも、少と彼等の眞似にても爲さられ

んことを希望して止まざる次第に候、之を思ふ毎に日本宗教者の増々不甲斐なき事を慨するの外無之候、若し有りとも獨り浪人の害(?)位を云々するは餘り胴慾かと御怨み申度候。

(第三)、内地新聞の無責任なることは今更の事には無之かと存候、新聞社員といへは無責任の者の代名詞と、世人は承知する樣には無之哉眞にナサケなき次第に御座候、夫れゆへ新聞が誤謬を傳ふること位は寧ろ當然の樣にて、何か外交にでも關したることなど聞き出し候節は事の輕重をも顧みず鬼の首でも取つたらん樣に嬉しがり、サラケ出す樣にて其思慮に乏きことゝ言つたら何日ぞや、北米大統領ルーズベルト氏が新聞記者ほど秘密を守る者はないと申されたるを聞いては吾國新聞記者は汗顏に堪へぬ事と存候、其幼愚の結果世人を過まらしめ或は清國人に惡感情を抱かしむる位のこと事は彼等自身は一向平氣に候困つたものに候、新聞學校でも興して仕込まねば物にならずと存候、

以上小生の考を述べ候御失笑被下度候

序に一言希望を述べ置き候

一　清韓兩國は勿論東亞全體に向て我國の宗教と教育と醫藥を普及せしむる爲め本國佛教家の大々的奮勵を要すること

二　國民一般が今少し以上の地方に向て實地に調査する必要ある事

三　國家はこれらの國に向て一大金融機關を設け喩へば日清銀行の如きを設くること

四　學者及び學生の漫遊調査の頻繁たらんことを望むこと

以上は清韓及び東亞全體に向て目下の急務と存じ候、御參考までに申上候

有美堂の開店を祝す

小石川原町　口八丁子

青柳有美君足下。

聞く、足下、神田三崎町の地をトして、烟草屋を開業すと、僕實に踴躍歡喜して、これを祝するものなり。

「酒と烟草は養生に害あり」とは、僕の幼年の時に吹き込まれたるところにして、今も尚然りと確信するところのもの、僕は實に今の社會より、頑冥度し難きものとし取扱はれつゝある非飲酒家なり、非喫烟家なり、世に烟草といふものゝなくなり、烟草屋といふものゝ、絕えむこと、寧ろ僕の冀ふところ、しかも今、足下が

烟草屋を開業するに當り、これを祝するもの抑々所以あり。

未だ自ら學ばず、曷ぞ能く他を敎ふべけむや、未だ自ら養ふを得ず、曷ぞ能く他を救ふべけむや。假りに社會主義者の希望するところが、共產にありとして、さて何時にても「よし來た」とさらけ出す丈の財產と勇氣とある程のものが「我こそは」と進ンで先陣を仕るやうになッてこそ、始めて世は社會主義の時代に入れりと稱すべけれ。食ふや食はずの素寒貧書生が、如何に怒號し狂奔すればとて、今日の社會は、たゞそれを、空腹紛れの悲鳴とも聞き流さむのみ。古いやつだが、衣食足つて禮節を知るで、社會のためといふも、人道のためといふも、詮ずるところ「餘裕」の賜ならずはあらず。世の文學といふものゝ如きも、亦食ッて衣て住ンで、さてその上の御分別に外ならざるなり。

不思議なるかな、文運隆盛の明治の御代や、卵殼尙後に在る黃口兒も、文學といふものゝだに振舞はせば、兎も角も命に別條なきを得たりしなり。しかも、たゞこれ一時。今や世人は、漸く夫の似而非文學のつまらなきに厭氣を起し、更に眞の文學大なる文學の出現を冀ふに至り、隨ッて木葉文學者、デモ文學者は、遂に捨てゝ顧みられず、將に路頭に迷ひ出でむとして、纔に小新聞三面の片隅に唸めき居るもの、滔々として皆然らざるはなきが如し。蓋し、彼等は、本なき末の枝葉の榮えむことを欲したるなり、兵糧なくして戰に勝たむと要したるなり、つまり文學によつて食を得むと望みしなり。長持ちせざることもとよりそのところ、落城することと眞に是非なし。食へなくなつて周章狼狽するが如きは、その無知寧ろ笑ふべからずや。

文學者と言へば、兎も角もチャホヤせらるゝものなり。商人と言へば、一も二もなく輕蔑せらるゝものなり。人として、誰かチャホヤを捨てゝ好ンで輕蔑を取るものあらむや。されど、文學者獨りチャホヤせらるゝはもとより誤りにして、商人のみ特に輕蔑せらるゝも亦甚だ正しからず。しかも擧世無知の徒多くして、これを辨するに至らず、ために以て、浮薄なる木葉文學者を出すこと彼が如く多く、着實なる靑年實業家を出すこと此くの如く少し。若しこの時に當り、チャホヤせらるゝ文學者の群を脫して、輕蔑せらるゝ商人の仲間入りをするものあらば、大に以て世人の蒙を啓くに足るものあるべし。

靑柳有美君足下。

文壇に名を馳することと足下の如き文學者、文學によりて衣食せざることと足下の如き文學者に餘裕一あることと足下の如き文學者にして、しかも尚進ンで商人軒並の輕蔑を甘受せむとす。足下の勇氣と決意とは、僕の敬服に堪へざるところなり。夫の蠢々爾たる木葉文學者輩は、足下の風を望ンで、假に二一天作の五を學び、又夫力を生產に對して、少くとも自ら養ふことを得、日本商人の自ら卑しと信じて、人並に頭を上げ得ざる日本商人等は、足下の餘威に打たれて、品位を高むるに至らむか、こは余く足下が開業の賜ならずむばあらず。僕が足下の開業を祝するの微意、實にこゝに在りて存するなり。

短文

我國の雜誌界に就て

▲實業の日本と成功とは近來雜誌界の好取組である。此角力ナカナカ〳〵面白い。互に双方で睨み合つて居るかと思ふと、同じ樣な眞似をして居る。實業の日本が成功を振り廻すと成功が實業を擔ぎ廻す。そして双方共に亞米利加向いて居て、カーチギーを引張り合つたり、マーデンをつゝき合つたりして居るが然し成功は少し年が若い、實業　日本は流石に拔からず立ち働くので成功しつかりやれといひたくもなるのである、（牛通生）

▲雜誌取組　（順序不同）

（新小說 文藝俱樂部）（中央公論 獨立評論）（早稻田學報 慶應義塾學報）（文藝界 文章世界）（教育界 教育時論）（太平洋 實業の日本）（新佛教 精神界）（新聲 新人世）（女學世界 婦人界）（青年界 中年世界）（文學 新聲）（教育學術界 教育實驗界）（近事畫報 風俗畫報）（外交時報 國際法雜誌）（家庭の友 家庭雜誌）（ホトヽギス 卯杖）（女鑑 をんな）太陽（橫綱）病氣休業　（勝敗子）

▲妾は全く男の手を借らずに左の人々の執筆て「太陽」程の一大月刊雜誌を出し、そして現今の雜誌界に婦人の勢力範圍を押廣げたらばと思ふて居ます

主筆　鳩山春子　　外交　稻垣夫人
學術　下田歌子　　武藝　奥村五百子
小說　小金井喜美子　　繪畫　野口小蘋
演劇　川上貞奴

此外社會欄に竹內政子河越照子と言ふ樣に、まだ政治家、旅行家、音樂家、脚本家、大食家など集めたらイクラでもあるだらうと思ひます、何です、妾の好きな和歌はドーして下さるて、知れた事じやございませんか、その人はそれ、アヽあの名高い鳳晶子ですつて、マー戀歟の先生だわ。（田舍式部）

▲ミルクホールに入つて見ると東京の人士がドンナ雜誌を多く好んで讀むかが知れる、政治や宗教や學術の雄誌はいつも新らしいが、小說の雜誌と來たら次號が出る迄に殆ど表紙が剝がれる位いにも讀まれる。（六兒）

▲成功と實業之日本と合す可し。明星と新聲も合す可し、中學世界と靑年界はドッチか一つて充分なり、秀才文壇は廢して貰ひたい、文庫は學ろ別に新躰詩計りの雜誌を作つては如何、東京は虫が好かぬ、帝國文學はトウ〳〵懸賞募集と迄頭を下げて可哀想、成効は實直、新佛教は蠻勇

文藝界は愈々俗に陷つて來た。　（讀書士）

▲いつまでも若くて元氣な雜誌は文庫である、新聲も人氣が薄らき、明星も光り明滅して消えかゝつて居るのに、獨り文庫が健在なのは大に吾人の意を强うするに足るのである。聞けば文庫の同人は所謂緣雨の衆寡敵せずといつた、一本の筆を犴にして居る所謂原稿生活者はないさうな。鳥水でも江東でも其他銀行員や醫者や、いろんなものであるとの事、流石に賴母しい。　（夕雲生）

▲十年一日の如き雜誌、教育時論、風俗畫報、團々珍聞、さて〳〵少ないもの哉。　（ＨＳ）

▲新小說の俗化せざるは實に感心なり、文藝俱樂部は何時見ても猥に障る。文藝界が浮氣になつて來た、藝者も不見轉を働く樣になると多少は賣れる。　（ち、が）

▲聞くならく、萬朝報の一ヶ月純益一千圓、而して文藝俱樂部同しく一千圓。雜誌も割合に儲かるものじや、やはり藝の字じやない、藝者の顏を出されば賣れぬかな。　（ち、が）

▲東京といふ雜誌あり、初號の廣告を鐵道馬車に揭く、女の頰ぺタに赤く刀疵（かたなきづ）の加く東京と書いた繪を出せり。厭な事をするよと思ふて居たところ、十一月の雜誌の口繪に新橋藝妓の最中に、內閣總理大臣陸軍大將伯爵桂太郞令夫人の肖像を置けるを見て、僕の機嫌スッカりなほつたり。　（▲▲▲）

▲我國の雜誌發行者は外部の體裁にのみ注意して少しもタイトルページやインデックスに就て心を用ひないから圖書館員の方が余程其事に就ては利口である。我國の雜誌界にある人々も充分に時間を用ひて之を硏究し且つ應用してもらいたい。先つ雜誌界の諸君子達は雜然たる雜誌を作らず整然たる叢書の元に整然たる論說等を集めて万事詳密なれ而して行政法協會雜誌や大審院判決錄や通商彙纂や東洋經濟新報をモデルとして作れ。

正誤は必ず切り取りて其の各部に挿入するを得せしめよ。（富小路生）

▲歐の雜誌に『黑酔木』といふがある。之れを何と讀むか僕には判らなかつた。或人は『またゝび』と讀んだ。　（覧酔僕）

▲近頃主義のある雜誌ちうものが無くなつたのは、何故であろう。　（ＳＴ）

課題

▲我國の戶內遊戲に就て　（十二月廿日）

▲華族と新平民に就て　（一月十五日）

新刊紹介

▲換菓篇

十千萬堂門下諸氏作

十千萬堂藏版　博文館發行

生等相胥りて、師紅葉先生の病鬱を解かんが爲め、玆に各諳み草する所を輯めて。換菓篇と題する一篇を得たり。と門下十三人及び宙外氏、作る所短篇十二種俳句六十五句、こゝろ〳〵の色見えて、ひとりづつ〳〵かはる〳〵師の病を訪ひ來る面影ぞ見ゆるなる、今や紅葉散りて秋落寞の今日此頃亦多少の慰なき能はず。鏡花の藥草取ばいかにも鏡花らしく詩として讀むべし。風葉の宇宙の目的は失意者の人生觀正に如斯なるべし。其他味ふべきもの あり、卷末に添へたる宙外の微信心は流石に短篇に得意なる氏なればに篇中の白眉とし讀まるゝ。門人ならぬ宙外泣く一篇を寄せ

で今一層に加はる好意といふべし。

▲戰爭の卷　（定價六十錢）

武田櫻桃氏編

東京日本橋本町　博文館發行

教訓給ばなし聞きて出でたり、本書其第十五編給は皆十年前に我等が少年世界に於てお馴染なりしもの、其當時嬉しく樂しく眺めて飽かざりしなり、今の少年少女も本書を見て亦然らん（定價五錢）

▲ジヨン、ウエスレー傳

高木壬太郎氏著

東京京橋區尾張町二　警醒社發行

ウエスレー生誕二百年の紀元として、傳するものなりと、二百年前の彼な想起せんが爲めに傳するものなりと、宗教を適當に學ぶもの丶爲めに傳するものなりと、吾人は最後のものを取らんとす。ルーテルを說くもの世に多し、ウエスレー豈說かざるべけんや。ウエスレーは宗教の具體的說明者なり。宗教を適當に學ぶものはウエスレーを學ばざるべからず。本書第三章四章、彼の失敗して再び新生する前後は大に學ぶべきものあり、學ぶとは日はく之を行ふ事にあり。（定價五十錢）

▲人物三論

宮田倉太氏著

警醒社發行

三人物とはブライス、バンナーマン、而してパルンスである。本書の冒頭に『勿論自分か今度の想ひ出は、人物を上下して讀者一時の快感を弄ふ樣なことは之を愼み、擧世滔々たる紳士風を模寫して見たい心なのであるから、其人選の如きもズツと地味な方面で、而も最も澁味な英國紳士を御覽に入れるつもりである』とあるのが大に吾人の意を得た、吾人はチヤンバーレンよりもカーネギーよりも、如上の三人物を現代の日本に要すると思ふ。（定價貳拾五錢）

▲平民新聞　第一號

東市麴町有樂町　平民社發行

平民新聞出づ、幸德秋水、堺枯川二氏が健穩なる社會主義を鼓吹せんとて。願はくは。一日も早く其日刊新聞となるの日を、一日も早く吾人の理想新聞たらん日を、切に〱之を待つ。（定價一部三錢五厘）

▲佛教史論第壹編　佛典結集

文學博士松本文三郎氏著

文明堂發行

本書は文學博士松本文三郎氏の著なり、博士嘗に印度雜事を著し、今や又此著あり、而も本書か佛教史論第一編として出づるとの益前途の有望なるを認む。第一に王舍城の結集、第二吠舍離の結集、第三に阿育王の事跡幷に第三の結集、第四に迦膩色迦王朝の第四結集を紓述し、附錄として、阿育王の碑文、摩哂陀王子の事跡、及び王朝年代等を掲載せり、議論斬新にして而も穩健、說を西洋史家に採る所多きは、佛教專門學者の爲に稗益多かるべし、中に迦膩色迦王の年代を、紀元三世紀なりとするは吾人の最も注意すべき者、吾人は一日も早く、後篇の續々世に出でんと竭望して止まざるなり、（上製八十錢、並製六十錢）

▲鬼大名

小波編

東京　博文館發行

世界お伽噺の獨逸の部にして、ノルマンのロウベルトと云ふ勇敢なる少

年が、武男に任せて亂暴を働き、後悔ひて立派なる大名となりたると云ふ面白き小兒の讀み物なり。

（定價七錢）

▲一門三礎談

小泉了諦述
京都四六條　顯道書院發行

能辨家として知られたる小泉氏が、眞宗教義に就て極めて俗耳に入り易く、平易に說かれたるもの、說教者の參考となること尠なからざるべし。（定價不詳）

▲英文日記

東京　博文館發行

我國英學生の爲めに昨年初めて英文日記を發行し、大に高評を博せしものにして、各葉に古人の金言を挾み、名家の肖像を入れ、紙質體裁共に立派なる袖珍の美本なり、但し各日附の下に七曜と祭日とを附加し、英文の事なれば英米の祭日をも加へられなば一層の便利ならん。

（定價二十五錢）

▲實驗之宗教

佐々木月樵氏著
文明堂發行

題して實驗之宗教と云ふ、先づ宗教は學問研究以上に信仰を基礎として始めて之を談ずべきものであることを標目し、著者が幾多の懷疑煩悶人生の浮沈を經過し、又多くの靈界の偉人に接して漸くに得たる實際信念を告白し。書中、實驗の宗教先づ須らく自覺すべし、倫理、無倫理、宗教、地獄、極樂の意義、與へらかれたる問題即ち生死の問題、自然の大道、罪惡と宗教、宗教的同胞、人生の基礎、人道と佛教、無我の生活、吾人の宗教、と稱する十二難題を提供して、此を著者の實驗的信念に由つて解決し、更らに其引合として、傳教、弘法、惠心、明惠、道元、法然、親鸞、日蓮、蓮如、白隱等の知人を拉し來つて、精神主義の眼光を以て評釋を加へ、偉人の眞面目をして紙上に躍如たらしむ、且つ又是等偉人の尤も趣味ある簡潔なる傳記をも添へたり。

製本はクロース金文字入、菊版三百三十頁の大册子（六十錢）

▲教育漫筆

高島平三郎氏著
東京下谷車坂町三十一　元々堂發行

現今の教育家に於て高島氏の如く常識に富める人なし。故に吾人は教育家の模範として氏を尊敬す。今教育漫筆の著あり、苟も社會を重んじ個人を重んずるもの、此書に學ぶところなかるべからず。氏又近頃別書あり「母のため」と題す、想ふに教育漫筆は「父のため」とも題すべきか。家庭改良の好指針なり。

（定價參拾錢）

▲竹風香處讀

前田慧雲氏著
東京　文明堂發行

前田博士の修養錄にして、序言に「余が嘗て東山大谷に寓せし時、物に接し興に觸れて、心の動くまゝ、管城子に命して之を寫さしめたるものに係り、……願ふに當時身を松風竹月冷石香の間に置き、鳥語蟲語と共に、人間已外に一閑天地を領したりき。」云々とあり以て博士の面目を窺ふべく以て之に倣ふべし。袖珍本にして携帶に便なり。

（定價十五錢）

▲シヤクンタラ

東京　文明堂藏版

ゲーテの詩に此書を賞贊せりとて、此頃稍々世人が名を知るに到りしものなり。梵本の劇詩にして之れを寫眞版にして飜刻せり、用紙印刷製本共に美麗にして吾人は之れを出版したる勇氣を賞す、帝國大學以下梵文學の教科書たり。我國の學生廣く之を研究して完全なる譯書を世に公けにせんことを望む

（定價貳圓）

明治三拾六年

公論日誌

其十二

公論日報

合六年
同部三

共十二

公論日誌　自十月二十一日　至十一月二十日

▲政治　經濟

▲滿洲鷄林の雲行

△林公　使の謁見要請は今猶御不例なりとて許されず(廿二日)

△目下　義州出張中の新庄領事官より、義州鎭營隊長は部下兵丁が牧、吉永兩名に暴行を加へたる件は自身其責任を負ふとの證明書を取りて日本公使館に轉送し來れり依て林公使は昨日韓廷外部に向け既に鎭營隊長より證明したるとなれば貴政府は如何に之を處分するかと照會せり亦電車事件に負傷せし日本電遞夫の損害額は六百圓なりと通知せり(廿四日)

△外部　大臣李道宰は過日龍巖浦開港に關する全權を一任せられたしと上奏したるも聽許されざるを以て昨日より自邸に引籠り居れり(仝上)

△露兵　二百名豆滿江を渡り雄基灣に向へりと外部に慶興監督より電報ありたり(廿五日)

△海城　府の支那人の旅宿にて日本人久保吾一なる者韓兵の爲め斬殺され支那人二名負傷せり原因は不詳(廿七日)

△軍部　大臣李根澤の密使として旅順に赴きたる陸軍參領金仁朱(露國歸化人)は李根澤の公翰のみならず韓國皇帝より露國皇帝に捧呈する親翰をも携帶し行けるは事實也(三十一日)

△露國　公使は去日仁川に於ける露國水兵の亂暴せる當時日本人が各居留地在留の露國商人の家屋に亂入したる事實を擧け將來居留地の安寧を保つ爲め各國使臣會議を開きて協議する所あらんとて其旨各使臣に通牒して同意を求めたり(十一日)

△米國　公使は本國政府の訓令を奉じ龍巖浦を至急開放すべく極めて强硬の決意を示せる公文を韓廷に送れり(十二日)

△韓人　の暴行にて牧六郎負傷の結果終に漢城病院にて死去したり(十七日)

△萩原　書記官義州滯留中龍巖浦の露國士官(少尉)は支那人一名露兵六名を伴れ義州鎭營隊長を往訪し、兵士は一切夜行を禁ずべし若し夜間行人にして黑き衣服を着用せるものは總て日本人と視做し銃殺すべしと通告したる事實ありと、又筏を奪掠したる當時は日本人に向け銃砲を差向け脅迫したる由(仝上)

△各國　使臣に通知すべく認めし龍巖浦開放の公文は將に發送せんとする際急に宮中より電話にて見合すべき旨勅命下り爲に其儘外部にあり右は全く李根澤等親露派が李夏榮を逆賊なりと上奏したる結果なり(十八日)

△林公　使は淺田商店の損害金一万八千八百八十圓を外部に要求せり(二十日)

△米國　公使は電車損害八千餘圓を要求せり(仝上)

△露國　水兵暴行當時日本人が露國商民の家宅に侵入したる損害として仁川露國副領事より同地日本領事に向け賠償を要求したり(仝上)

▲重要なる内地の出來事

△本日　左の詔勅下る(十一月二十一日)

朕帝國憲法第七條及第四十一條に依り本年十二月五日を以て帝國議

會を東京に召集す

御名御璽

△宮中にて左の如く親任式を行はせられたり(仝日)

任陸軍大將　陸軍中將從三位勳一等功三級男爵　黒木爲楨

同　同　奥保鞏

△海軍省にては行政整理の結果二百餘名の減員を行ひ俸給のみにても約二万圓を減少したり(十日)

△攝津平原より丹波、備後方面に渉りて第十一師團、第五師團其他の旅團東西兩軍となつて本日より特別大演習擧行せらる(十二日)

△政府が廢合すべき縣として調査したるは神奈川、埼玉、千葉、茨城、奈良、山梨、滋賀、岐阜、福島、岩手、福井、富山、鳥取、山口、香川、愛媛、大分、宮崎の二十縣にして此の内より十五縣丈け廢止の見込なり(仝上)

△明年度歳入歳出總額左の如し(十一月十三日)

	歳入	歳出
經常部	二二五、二五八、八三七円	一八三、七一三、四七五円
	二六、九〇〇、二七六	六八、三七九、三四八
合計	二五二、一五九、一一三	二五二、〇九二、八二三

●行政整理の結果既定經費を節約せし分左の如し

種目	節約金額
府縣費整理減	四八九、〇〇〇円
陸軍々事費其他整理減	九七九、〇〇〇
海軍々事費其他整理減	四〇九、〇〇〇
裁判所費整理減	二〇〇、〇〇〇
遞信費整理減	一、〇〇〇、〇〇〇
臺灣費補充金整理減	二〇〇、〇〇〇
橫濱港維持費整理減	三五、〇〇〇
警察監獄學校廢止減	五八、〇〇〇
諸農商工高等會議費減	二、〇〇〇
諸調査費整理減	八三、〇〇〇
各會定員減少及事務整理減	一、四六二、〇〇〇
合計	四、九一七、〇〇〇

●財政整理を名として既定事業の繰延を爲したる分左の如し

種目	繰延金額
北海道事業費	五〇〇、〇〇〇円
砲臺建築費	一、六八二、〇〇〇
臺灣兵營建築費	二五五、〇〇〇
擴張費	四〇六、〇〇〇
吳造兵廠擴張費	三〇〇、〇〇〇
醫科大學長崎高等商業學校名古屋高等工業學校創立費	七七、〇〇〇
鐵道建設及改良費	五、〇〇〇、〇〇〇
在清國公使館新築費	四〇、〇〇〇
合計	八、二六〇、〇〇〇

●公債及一時借入金を要する分左の如し

公債を要する分

種目	金額
臺灣鐵道建設費	三、五〇〇、〇〇〇円
基隆築港費	一、二〇〇、〇〇〇
灣土地調査費	五〇〇、〇〇〇
大租權整理に關する公債額面未滿の端金	四〇〇、〇〇〇
合計	五、六〇〇、〇〇〇

一時借入金を要する分

種目	金額
製鐵所創立費	一、九九〇、〇〇〇円
製鐵所運轉資本缺損補塡	一、〇〇〇、〇〇〇
製造煙草專賣制度創業費	八、〇八〇、〇〇〇
合計	一一、〇七〇、〇〇〇

公債募集を要する分は預金部に於て引受くる計畫なり

●煙草官業の收支は一時、追加豫算とするの噂さありしも事實は本豫算に計上しあり官業制度創業の經費總額は二千四十九万三千圓にして四十二年度迄の繼續費とし明年度に於ては八百八万圓を支出すべく、依て得べき明年度の増收は六百十万圓也

●地租復舊の爲めの減額は九百八十万圓、酒税は本年度に比し百六十万圓を減ずる計算也

●新事業の重なる分は左の如し

種目	金額
臨時海外調査費	七五、〇〇〇円
土木事業費追加額	五七六、〇〇〇
酒類庫出課税實施に關する經費	一六〇、〇〇〇
轉業改良費	六〇、〇〇〇
青泥窪線航海補助費	七五、〇〇〇

外に煙草官業、基隆築港費等あり

重要なる海外の出來事

△英國　のピーオー佛國のエムエム獨逸のロイド三汽船會社は今回同盟して旅客賃を左記の如く改正せり(十月廿一日)

倫敦及ブレメンと東洋各港間	一等六十五磅	二等四十四磅
マルセーユ及ゼノアと東洋各港間	一等六十一磅	二等四十二磅

右の外往復切符は二割五分減にして使用期限は二ヶ年なりと

△伊太　利内閣の總辭職(二十二日)

△華盛　頓府に於て風説せらるゝ所によれば國務卿ヘイ氏は米淸條約に規定せる奉天府並に安東縣の開市に付き露國の態度如何を同國政府に質問せりと云ふ、極東總督アレキシーフ將軍の機關なるノヴイ、クライ新聞は右の開市に大反對を唱へつゝあり(仝日)

△香港　丸にて本月十六日に約百九十人の日本移民マニラに着したるにマニラ民政委員は日本に不利益なる決議を爲し今後日本の勞働者を雇入れざることに決したり(二十四日)

△日露　開戰の恐あるを以て極東行の荷物に對するロイド海上保險會社の保險料は昨日より二倍の額に變更されたり(仝上)

△リバ　ープルの保險業者は日本汽船に依て運搬せらるゝ荷物に對しては百ギニーの價格に對する保險料廿五ギニーの割合にても猶は且つ保險約束を爲すの危險を侵すことを絕躰に拒絕す(廿七日)

△匈牙　利及び伊太利兩内閣の動搖は終結せり而して匈牙利に於てはチサー伊太利に於てはギオリツチー新に内閣を組織したり(廿九日)

△露國　外相ラムスドルフ伯は巴里に在りて露墺兩國の決定せるバルカン半島改革案の細目に就きて他國外相デルカツセの同意を求めんとし且つ佛國の露國を離れて英國に親しむことを防ぐに力むべしと云ふ(仝上)

△來る　明治三十八年迄に露國は左の造艦計畫を完成せしむる筈なり(三十日)

戰闘艦　六隻　八万餘噸

巡洋艦　六隻　二万九千餘噸
驅逐艦　十六隻　四千八百三十噸

△最近の調査に係る露國の東洋海面に於ける艦隊の主力は（我派遣高千穂以上に匹敵すべきもの）合計十六隻、十四万五千四百四十二噸、右の外東洋回航の途中にあるもの五隻五万三千五百五十九噸なり（仝上）

△巴里に於て露國外相ラムスドルフ伯は、東京に於ける妥協は平和の終局を得べき見込充分なることを確言したり又同伯の漏らしたる露帝より佛國大統領ルーベー氏に宛てたる親翰にも平和を保持すべき希望を含めり（三十一日）

△有名なる歴史家テオドル、モムゼン博士は重き卒中病に罹りたり（仝上）

△浦鹽斯徳は軍略上樞要の場所なるを以て極東總督アレキシーフ將軍は總督府を旅順港より同地に移し居れり（十一月二日）

△歴史家テオドール、モムゼン博士は終に死去せり歐州の新聞は悉く彼の傳記を載せざるものなく獨逸皇帝ウイルヘルムは其遺族に弔詞を送りて彼を最も仁心ある研究家と稱へたり首相ビューロウ伯は同博士の半身像をザールブルヒ（ライン州に於て發見せられたる古代羅馬の遺物を陳列する博物館）に設くることに盡力すべき委任を受けたり（三日）

△羅馬法皇宮殿に於て有名なる書籍館の上部に位する三個の部屋火災に罹り法皇は宮殿備付の消防夫のみにては不充分ならんとの慮より伊太利政府の消防夫の援助を乞へり（仝上）

△パナマ地峽の獨立は昨夕發布せられ熱狂せる多數の群衆は政府軍の本營に向て進軍せり（四日）

△清國工部尚書那桐は外部尚書に任ぜられ、軍機大臣兼外部尚書王文韶は專任軍機大臣となれり（六日）

△東洋瓜哇間の定期航海は本日横濱出帆を初航として四週間毎に航行する事となり航路は横濱より神戸門司に寄港し香港、アモイ及び南洋ペタビヤ、チエリバン、サマラン、サエラバヤ、マカサル等を經由して瓜哇に達する由なり（六日）

△新任伊太利大藏大臣はピストルを以て自殺を遂げたり其原因は社會黨が氏の德義心に對し烈しく攻撃をなし且つ氏の子息が放蕩をなしにあり（九日）

△羅馬駐在露國大使ネリトブは召還せられ現任巴里駐在同國大使ウルソフ侯爵之に代れり（仝上）

△米國の石油トラストに對し全歐洲の石油發生地協同して一大石油トラストを組織せんとする準備打合成立したり（十四日）

△伊太利國王及び皇后兩陛下は明日頃本國を出發して倫敦に向はるる筈なるが此の機會を利用して兩陛下に暴行を加へんと企てたる一社會黨員はチエルブルグに於て警察官に捕へられたり（十五日）

△濠洲聯邦は左の如く新内閣を組織せり（二十日）

首相兼外相　エー、デイケン　大藏長官　ターナー
商業兼税務長官　ウキリアム、リン　内務長官　フコレスト
檢事總長　ドレーキ　郵政長官　フイツシ
海部長官　コヤプメン　專任内閣員　フレーフオルト

△獨逸皇帝は赤鷲一等勳章を日本陸軍大臣寺内男に帝冠勳章を横濱（神奈川縣知事）周布公平に贈與あらせられたり（仝上）

△緬甸印度、支那、廣東、地方等東洋の重なる米産地は本年非常の豊作にて西貢の如きは古米の在荷三十万乃至四十万担を有するも輸出

すべき地方なき爲め營業者中失敗を招きしもの少からず(仝上)

▲貿易通報

△十月　下旬の貿易は概算左の如し(十一月二日)

輸出品價	一一、五八八、九四〇円
輸入品價	七、一二二、二七七
輸出超過	四、四三六、六六三
輸出銀貨及銀地金	一八五、四六三
輸入金銀貨及地金	一五一、六五三
輸出超過	三三、八一〇

△十一　月上旬の貿易は概算左の如し(十二日)

輸出品價	六、九五〇、〇〇一
輸入品價	六、四二〇、二六九
輸出入超過(出)	五二九、七三二
金貨及金地金	一五一、三四二
銀貨及銀地金	六六、八四二
計	二一八、一八四
金貨及金地金	一四六、五九九
銀貨及銀地金	一六、二〇〇
計	一六二、七九九
金銀輸出超過	五五、三八五

△十一　月中旬の貿易は引續き好況にて又も輸出超過を見る(廿一日)

	十一月中旬	一月以降累計	前年同期比較
輸出品價	八、九三四、八六六円	三三四、〇八三、二六〇円	増二四、三二一、四六六円
輸入品價	七、七一七、六九五	二八一、六五四、九五四	増四四、八四一、七三三

輸出(入)超過		出一、三二七、六三一	入三七、五七一、六九四	—
輸出	金貨及金地金	一、三六五、〇〇〇	一〇、四六五、七三三	増一〇、〇一五、五五五
	銀貨及銀地金	一一〇、九〇三	三、〇三〇、八九三	増　一、〇〇三、八七五
	計	一、四七五、九〇三	一三、四九六、六二五	増一一、〇一六、四二六
輸入	金貨及金地金	六三、三四六	二四、三〇四、五五四	増　三、四四五、五六〇
	銀貨及銀地金	四五	三、四五一、六七〇	増　六八七、九五六
	計	六五、二八九	二六、七五六、三三四	増　五、一三一、四九六
金銀輸出(入)超過		出一、四二二、六一五	入一四、三五九、六〇九	

(備考)本表は横濱、神戸、大阪、長崎、函館、新潟、門司、下關、口津の九港に於る輸出入を調査したるものなり但十月迄は全國の輸出入總額を含む

△臺灣　に於ける十一月上半の外國貿易の景況左の如し、

	商品	金銀
輸出	三七〇、二四七円	一四、七一六円
輸入	二二六、一四九	一〇、五六〇
輸出超過	一四四、〇九八	四、一五六

(備考)右は淡水安平二港の合計なり

▲過去帳

△一中節家元宇治紫文齋逝去す(十月廿一日)

△十二代目横綱陣幕久五郎斃る(仝日)

△銅版印刷業玄々堂主松田敦朝卒す(仝日)

△休職栃木縣知事滿部惟幾歿す(廿三日)

△土木技師野口嘉茂死去す(仝日)

△洛陽の儒者山本章夫瞑す(廿七日)

△高島子爵北堂良子逝く(廿九日)
△東海丸船長久田佐助歿す(仝日)
△文壇の巨星尾崎紅葉殞つ(三十日)
△郵船會社浦潮支店長寺見機一死す(仝日)
△衆議院議長片岡健吉逝去す(卅一日)
△川路利恭母澤子卒す(十一月一日)
△笛の名人二代目住田又兵衛死す(仝日)
△巣鴨に在りたる蹄山環卒去す(六日)
△川村伯爵母山縣子逝く(十五日)
△大皷の名手高安飽叟死去す(十九日)

▲教學文藝

△本年度實業學校新規補助左の通り決定し指令ありたり(十月二十一日)

島根	邇摩郡立農學校	三百圓
同	安濃郡立農學校	四百圓
宮崎	兒湯郡立甲種農學校	五百圓
愛媛	周桑郡立農學校	二百五十圓
熊本	菊地郡立農學校	二百圓
神奈川	津久井郡立蠶業學校	三百五十圓
香川	木田郡立木田農學校	五百圓
新潟	縣立農林學校	千圓
愛知	縣立農林學校	千五百圓
靜岡	志田郡立甲種農學校	八百圓
大分	東國東郡立實業學校	四百圓
熊本	球磨郡立人吉工業徒弟學校	二百五十圓
佐賀	有田工業學校	千一百圓
新潟	縣立工業學校	千二百圓
愛知	縣立工業學校	二千圓
三重	白子工業徒弟學校	二百五十圓
宮崎	都城女子職業學校	四百圓
岐阜	大垣町立商業學校	三百五十圓

右は孰れも本年十月より向ふ五ヶ年間繼續交附するものなり、

△女子技藝學校並びに商業夜學校は盛大なる開校式を擧げたり(廿五日)
△論文を提出して遠山椿吉氏醫學博士の學位を授與せらる(廿六日)
△日本留學印度人プランシン氏原作小說印度奇談和譯されて萬朝紙上に載る(廿六日)
△京華日報再興す(十一月一日)
△日露戰爭羽川六郎なる書發賣さる著名東海散士の名あり(十一月三日)
△社會の秩序を紊亂するものとして本日の日本新聞其發賣を禁止せらる(十日)
△文部省は各府縣知事に對し小學校幷に其他の學校の運動場は勿論其校舍をも開放して一般公衆の使用に供せしむべき旨訓示せり但だ如何なる會合に貸與すべきかは各學校長に一任するも苟も公安を害せず風俗を亂さゞる以上は角力演劇亦不可なかるべしといふ(仝上)
△林學博士の數は是迄七名以上に充たざりしを以て博士會の職務は東京帝國大學評議會に於て行ひ來りしも今や同博士增加せるを以て文部省は新たに博士會を組織する由(十一日)

△平和　の福音を傳へんとて幸德堺兩氏執筆して平民新聞を刊行せり（十五日）

△文壇　の寵兒菅柳有美氏今回有美堂なる烟草店を開業す、曰く勿驚資本金十六圓（十七日）

△渡邊國武氏等主動となつて電報新聞發刊さる（廿三日）

△專門學校出願中にして近日認可せられんとする各校は左の如し（二十日）

日本法律學校　　同志社
明治學院　　慶應義塾

△嘗て東京日々新聞に筆を執りし數餘寬王關梅痴居士は今回華隱道人と稱して易斷方鑒に從事せり（仝上）

▲社會雜事

△大阪　市に於て電燈會社の電燈線に異條あり爲めに之に觸れて即死する者二名、負傷者七名、發火數ヶ所、會社は非常に狼狽し原因取調をなせり（十月廿三日）

△關西　鐵道富田驛にて列車の衝突あり、滊關車貨車に大損害を生じ、負傷者三十餘名を出せり（廿六日）

△青森　を發して函館へ航行中なりし日本滊船東海丸はヤゴシ附近にて露國商船プログレス號のために其船腹を衝かれ直ちに沈沒、五十名計りの溺死者あり、久田船長は露船の救助を退け自ら檣に身を縛して職に斃れたり（廿九日）

△常陸山、梅ヶ谷兩力士は熊本に於て吉田家より横綱免許狀を授けられたり、其證狀は左の三通なり（十一月一日）

證　狀

何國住人
氏　名

右は相撲古實門人に差加へ候依て證狀如件

明治三十六年十月十九日

免　許　狀

何國住人
氏　名

右は相撲之位横綱會免許畢以來方屋入の節迄相用ひ可申也依て免許狀如件

免　許　狀

何國住人
氏　名

方屋入の節太刀を持たすべく尤も門人の外一同揃踏有之間敷候依て免許狀如件

△川上　正劇一派は沙翁のハムレットを演じ劇場に於ける舊來の弊習を改む（一日）

△印度　王族カプヘタラ王及妃の兩殿下一行は横濱に着し來れり（五日）

△藤村　某投瀑以來之にならふ者頻々たりし華嚴瀑に情死を企てたる男女あり（九日）

△江州　瀨田川浚渫のため有名なる瀨田唐橋は向ふ一ヶ年間撤去され此間東海道の交通は渡船を以て聯絡する筈なり（十日）

△横濱　市喜樂座に於て新聞記者聯合大會を開き聽衆千五百餘名あり（十二日）

△奈良　市長發企して縣廢合反對運の計畫に付て各縣の市町村役場へ

通牒したり(十九日)

△天皇　陛下が大演習を結了せられて還幸の途鳳輦を櫻田門に迎へて直訴状を捧げ奉りたる苦學生あり上奏文の大要左の如し。(今日)

謹奏

草莽の微臣田中守平謹而奏す時下日露との交渉問題に就て近時四邊の傳ふるところに依れば平和の協商を結ばんとするの傾向あり微臣守平熟々日露兵力の優劣如何を考慮するに我が邦は露國に對し其優勢なることを認め得らる、この時に於て干戈相交へずして露と平和の協商を結ばんとするは國家百年の不利益なりと確信す、兵力の比較上露と戰ふ事は我が帝國の威權を伸張する上に於て公益なり云々

△教科　書事件の被告人なる碩學岡田某は駿河台のニコライより一千五百圓の契約にて或密告をなしたる事現はれ詐欺取財未遂犯として起訴されたり(二十日)

△歸化　横濱在留支那人中本邦へ歸化せんとするもの漸く増加の傾きありて既に歸化を許されたるもの十餘人に及びしが尚ほ今回四十八人の多數一時に歸化を出願せり(二十一日)

△名蹟　歷史上宗教上の名山として小學兒童さへも暗記せる山城笠置山及び日本三景の一なる丹後天橋立を不要存置林なりとし大阪大林區署の名にて公賣を廣告されたり千古の名蹟勝區を見ること弊履の如く漫然として之を棄てんとするに至りては何人も其思慮なきの甚しきに驚けり幸に京都府廳は之を永遠に保存するの目的を以て一面吏員を笠置山に派して調査せしめ又天橋立に就ては丹後與謝郡の有志に諭し之を郡有として保存せんことを勸めつゝありと(二十二日)

△台灣　臺灣總督府にては現任兒玉總督赴任以來專ら力を警察制度の整備に用ゐたる結果土匪の如き大に其數を減じたるが現行の制度は即ち左の如し

一、保甲制　土人をして自ら警戒せしむる自治制度にして之に從ふの壯丁十二万四千六百十三人其壯丁團役員四千四百十人

一、隘勇制　蕃界を警戒せしむるものにして其數二千七百十八人此外に土人の請願に依るもの二百八十五人あり

一、警察制度　內地同樣の國家的經營のものにして巡査數三千九十人補助千三百四十八人あり

尚ほ三十一年以降に於て處分せし員數は實に左の如しとなり

一、法律に依り死刑に處したるもの

三十一年	十八人	三十四年	一千〇〇八人
三十二年	六百七十八人	三十五年	五百三十九人
三十三年	八百七十八人	三十六年(十月迄)	百十七人

一、臨機の處置に依り殺戮したるもの

三十一年	一千〇七十六人	三十四年	九百八十五人
三十二年	三百二十四人	三十五年	四千〇四十三人
三十三年	百六十七人	三十六年(十月迄)	十七人

◎注意三十六年の殺戮者少數なるは三十五年に於て大に之を討滅したる結果に外ならず

又今日迄に銃器を沒收したる者五万一千百五十六挺彈藥十一万五千百五十五發なりと(二十三日)